

中部大学国際人間学研究所シンポジウム  
持続可能な観光 2019年度



CHUBU UNIVERSITY

# 中部大学国際人間学研究所シンポジウム

## 持続可能な観光2019<sup>年度</sup>

2020年2月26日(水) 13:00-17:00 於：中部大学不言実行館2階スチューデント・コモンズ

|                                           |   |
|-------------------------------------------|---|
| 開会挨拶：宗宮弘明（中部大学国際ESD・SDGsセンター長）            | 1 |
| 「持続可能な観光」プロジェクト群の趣旨説明：柳谷啓子（中部大学国際人間学研究所長） | 3 |

### Research Papers

|                                                                                                               |    |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| ■ マレーシアの歴史とペナンの観光<br>副田雅紀（マレーシア科学大学日本文化センター長）                                                                 | 7  |
| ■ Sustainable Tourism in Malaysia：Green Tourism Practices in Malaysia<br>Diana Binti Mohamad（マレーシア科学大学建築学部講師） | 11 |
| ■ 「草原旅行」の限界と持続的開発の可能性：<br>他者が求めるように演じるか？地域の多様性や歴史に根ざすか？<br>包呼和木其爾 Bao Huhmuchir（内モンゴル大学蒙古歴史学系講師）              | 15 |

### Project Reports

|                                                                                                      |    |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------|----|
| ■ 春日井商工会議所等との連携による地域活性化<br>水野雅夫（中部大学人文学部コミュニケーション学科教授）                                               | 20 |
| ■ 東濃地方の地芝居等文化資源記録保存プロジェクト：恵那市における地芝居調査中間報告<br>永田典子（中部大学人文学部日本語日本文化学科教授）<br>嘉原優子（中部大学人文学部日本語日本文化学科教授） | 22 |
| ■ 岐阜県高山市における歴史文化観光地域の成立背景及び現状と課題<br>末田智樹（中部大学人文学部歴史地理学科教授）                                           | 24 |
| ■ 地域情報資源収集・蓄積・提供システム構築プロジェクト<br>柊和佑（中部大学人文学部コミュニケーション学科准教授）                                          | 27 |
| ■ マレーシア国ペナン島における持続可能な観光プロジェクト：科学系博物館の検討<br>財部香枝（中部大学国際関係学部国際学科教授）                                    | 30 |
| ■ 内モンゴルにおける草原観光の季節的変動研究プロジェクト<br>セレンメン Sirenmen（中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻2年）<br>澁谷鎮明（中部大学国際関係学部国際学科教授）  | 32 |
| ■ 春日井市姉妹都市ケロウナ（カナダ）におけるワイン・ハスカップ観光プロジェクト<br>松本建夫（中部大学アクティブアゲインカレッジ）<br>根岸晴夫（中部大学応用生物学部食品栄養科学科教授）     | 34 |

### Posters & Free talk

|                                                                            |    |
|----------------------------------------------------------------------------|----|
| ■ 春日井商工会議所等との連携による地域活性化（水野雅夫・学部生）                                          | 37 |
| ■ 東濃地方の芝居等文化資源記録プロジェクト<br>（永田典子・嘉原優子・大学院生・学部生）                             | 38 |
| ■ 岐阜県高山市における歴史文化観光地域の成立背景及び現状と課題<br>（塩屋木雲・古川穂高・鶴飼要・末田智樹）                   | 46 |
| ■ 自律型移動ロボットによる稚内市の地域情報資源収集・蓄積・提供システム構築プロジェクト<br>（柊和佑・学部生）                  | 48 |
| ■ Sustainable Tourism in Malaysia Project：持続可能な観光拠点としての科学博物館の役割<br>（川井りさ子） | 50 |
| ■ 内モンゴルにおける草原観光の季節的変動研究プロジェクト：観光拠点「ゲルキャンプ」の特性<br>（セレンメン・澁谷鎮明）              | 56 |
| ■ 内モンゴル自治区における観光：草原観光をこえて（大岩揚）                                             | 62 |
| ■ 春日井市姉妹都市ケロウナ（カナダ）におけるワイン・ハスカップ観光プロジェクト<br>（羽後静子・根岸晴夫・松本建夫）               | 63 |

|                        |    |
|------------------------|----|
| 閉会挨拶：羽後静子（国際人間学研究所副所長） | 68 |
|------------------------|----|





## 開会の挨拶



宗宮弘明 SOMIYA Hiroaki

中部大学学長顧問・中部大学特任教授

中部大学国際 ESD・SDGs センター長

1946 年生まれ、名古屋市出身。名古屋大学大学院農学研究科修了、農学博士（名古屋大学）。日本水産学会・日本魚類学会・日本陸水学会東海支部会等所属。専門分野は、水圏動物学、魚類生物学、保全生物学等。研究テーマは、魚類の発音システム、魚類の感覚生態学。

皆さん、こんにちは。国際 ESD・SDGs センターの宗宮です。本日の国際会議の開催、おめでとうございます。今年度（2019）から ESD センターの名称に「SDGs」が追加されました。従来の「国際 ESD センター」に「SDGs」をくっつけて「国際 ESD・SDGs センター」となりました。「ESD」と「SDGs」はどこが違うのかとよく聞かれます。今日はとにかく、その違いを頭の中に入れていただければありがたいと思っています。

「ESD」は、皆さんもご存じのとおり、「Education for Sustainable Development」の頭文字です。「Education」は「教育」ですから、日本語にするなら「SD 教育」です。間に「for」が入りますから、本当は「E-SD」とした方がいいと私は思っております。「Sustainable」は「持続可能な」ですが、「Development」は「開発」と言ったり「発展」と言ったりします。どちらでもいいでしょう。「E-SD」は 2002 年に国連で決議されたもので、「持続可能な開発のための教育」つまり人材育成です。ですから、「E-SD」は主に教育機関向けの運動です。

一方、「SDGs」は「Sustainable Development Goals」の頭文字です。「SD」までは同じですが、「Goals」がついておりまして、この「s」は複数を意味します。目標が複数（17）あるからです。「持続可能な開発目標」として 17 の目標をつくり、2030 年までにそれを達成しようとして、2015 年に国連で決議されました。これは一般社会向けです。「E-SD」は教育機関に向けて、「SD-Gs」は一般社会に向けてということで、中身はほぼ同じと考えてください。

では、誰が「Sustainable Development」を考えたのでしょうか。この言葉を最初に定義した人は、元ノルウェー首相のブルントラントさんです。彼女は 1982 年の Our Common Future という国連の報告書でその言葉を提唱したのが始まりでした。

ブルントラントさんは、「Sustainable Development」とは「将来世代のニーズを満たす能力を損うことなく、現世代のニーズを満たす開発（Development）」と言っております。

「Development」自体の説明は何もしていません。私は今回この定義を再読して、ブルントラントさんはすごく賢い人だなと思いました。なぜかという、経済学で「Development」の解釈は様々なので彼女はそこをうまく避けているからです。

英語文では、「Sustainable development is development that meets the needs of the present without compromising the ability of future generations to meet their own needs.」となっています。何を言っているのかというと、「持続可能」とは次世代の利益を守ることであると、彼女は「Sustainable Development (SD)」を定義したのです。今日ここへおいでになった皆さんは、「SD」の意味は何かといったら、「次の子供たちを育てること」と頭の中へ入れてくださったら

良いと思います。ブルントラントさんは1939年生まれですから、今80歳で、まだご存命です。彼女は内科・小児科医で、大変賢い評判の良い人です。以上が「持続可能」についてです。

本日のテーマは「持続可能な観光」なので、次に「観光」とは何かについて簡単に触れます。

「観光」の出典は、『易経』の「国の光を観る」にあります（日本大百科全書、小学館）。『易経』は1,500年ほど前の古典です。英語にすると「To see the “light” of the visiting place」で、行った地域の光を観ることです。普通「観光」を「sightseeing」と英訳しますが、原典を忠実に英語に訳すと「light seeing」になります。「light」とは何かというと、「good point」、その土地のよいところです。では、観光地に来た人が観るその地域の「良い点」は何かというと、それはその地域の「独自の文化」だと私は思います。となると、観光は「To see the good point or “culture” of the visiting place」ということになります。

今回の国際シンポジウムの準備の中で変なところに気がつきました。私の英国の友人は、いつもクリスマスカードを筆記体で書いてくれます。ですから、筆記体を読むのが得意です。例えば、筆記体の大文字の「L」と「S」は非常によく似ています。私は、外国人が「観光」ということで「Light seeing」と書いたのを、誰かが「Sightseeing」と読み間違えたのではないかと考えています。今回、この短い挨拶をまとめる中で、実はこれが間違いの原因では？と思った次第です。半分冗談ですけどね。

「持続可能な観光（Sustainable Sightseeing）」というのは、「Sustainable」ですから、やはり将来世代のことを考えないといけません。その土地の文化を観て、観るだけではなく、やはりその文化を学び良いところを取り入れることが、将来世代にとって大事なことでしょう。つまり、観光とは「watch and incorporate good point or “culture” of the different land that will benefit future generations.」だと思います。観光は通常「Sightseeing」と言われますが、本当は「Light (culture) seeing」なのかも知れませぬ。

ここで絶対に忘れてはいけないのが観光の積極面です。観る側は、ほかの土地の文化を観て、帰って、それを自分の土地に戻すこと。とにかくそれを忘れてはいけません。そして観られる側は、伝統文化を観に来てくれということで、例えば、私は高山との地域連携に関係し、観光のことを長く考えてきました。どこの観光地もインバウンドということで観光客を集めています。でも、やはりそれだけではいけないと思っています。その土地自身で若い子供たちが新しい文化を継承し、さらにつくれるような教育をきちんとしないと、絶対に持続可能にはなりません。これが私の考える観光の積極的な面で、そこをぜひ押さえなければいけないと思っています。

最後にもう一度、「持続可能」の意味とその重要性について申し上げます。マイケル・トービスという気候学者は自分のホームページで、「Anything that cannot be sustained eventually stops」、「持続可能でない物事は結局止まる」と言っております。持続可能でない社会はどこかで止まるということです。次の世代への文化の継承と、次の世代と一緒に新しい文化をつくること、この両立をしなければ絶対に止まるのです。「持続可能」とはそういうことを含むリアルな言葉であると思っています。

今日のシンポジウムのチラシにも、「いわゆる『観光地』だけが観光地なのではありません。市民、企業、大学が共に、自分たちの地域の光をみつけましょう！」とちゃんと書いてあります。見つけて学んで取り入れる、もしくは新たな文化をつくっていくことが、本当の「持続可能な観光」の意味であるとは私は思っています。

ご清聴ありがとうございました。（拍手）

## 「持続可能な観光」プロジェクト群の趣旨説明



柳谷啓子 YANAGIYA Keiko

中部大学人文学部コミュニケーション学科教授

人文学部長、中部大学国際人間学研究所長

慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。文学修士。専門分野は、社会言語学、英語学、談話分析。研究テーマは、メディアと表現の関係、デジタルアーカイブなど。主な訳書・著書に『読みのプロトコル』『スクールズの文学講義：テキストの構造分析にむけて』『エーコの読みと深読み』（以上岩波書店）『〈はかる〉科学：計・測・量・謀：はかるをめぐる12話』（中央公論新社）。

宗宮先生が立派な導入をしてくださったので不要になった感もありますが、今日のシンポジウムの背景としての当研究所プロジェクト群の目指すところについて少しお話しいたします。

国際人間学研究所は2004年にできた新しい研究所で、国際関係学部と人文学部の上にまたがって国際人間学研究科が設置されたのに伴って設立されました。地域活性化（localization）を基盤とした国際共生社会（globalization）の実現を目指すことをミッションとしておりまして、文理融合の研究プロジェクトを推進し、それを通して研究科を活性化させ、ひいては中部大学の存在意義を高めようということによってまいりました。これまで、中部大学を中心とする中部ESD拠点の活動対象地域（伊勢・三河湾流域圏）に照準を合わせて、観光や移住労働などによる越境的な人間の移動に関する調査など、主にローカルな共生社会の実現に向けて文理融合の共同研究を行ってきました。しかし、今後は、ローカルな研究に立脚しつつ、SDGsに着目することでグローバルな共生社会の実現に向けての貢献となる研究にも体系的に取り組むたいと考えています。

当面3年計画で、歴史、文化、政治、経済、生態系などの文理融合の視座からの研究を進めるにあたって、ローカルな越境関係として、春日井市、高山市、恵那市を中心とした東濃地域を含む従来の伊勢・三河湾流域圏と隣接地域、および、ちょっと飛び地をしまして冬季の資源利用に課題を持つ稚内市を対象とします。また、グローバルな越境関係としては、本学の学术交流協定校のマレーシア科学大学があるマレーシア、昨年国際人間学研究科と学术交流協定を結んだ内モンゴル大学がある内モンゴル、春日井市の姉妹都市であるカナダのケロウナを対象とします。これらをあわせて、先ほど宗宮先生がご紹介くださった「持続可能な観光」を共通の切り口としつつ、具体的に7つのプロジェクトを立てて比較研究などを推進しています。もともとこういった地域の研究に取り組んでいらした方々にご参加いただいたのですが、詳細は、後ほどプロジェクト・リーダーのみなさんから紹介がありますので、そちらに譲ることにいたします。

さて、皆さんご存じかもしれませんが、「国連世界観光機関」（UNWTO）が1988年に「持続可能な観光」を定義しています。当時の定義は、「文化的完全性、（地球に）不可欠な生態学的作用、生物多様性、生命維持システムを持続可能なものとしながら、経済的、社会的、審美的ニーズを満たす方法で、すべての資源を管理しているような観光」というものでした。それが「開発のための持続可能な観光の国際年」であった2017年に改定され、「訪問客、業界、環境、および訪問客を受け入れるコミュニティのニーズに対応しつつ、現在、および将来の経済、社会、環境への影響を十分に考慮する観光」となりました。経済や審美的ニーズを満たすといったやや抽象的な言い方をしていたのが、訪問してくる観光客、観光業の業界の人たち、環境、そして訪問

客を受け入れるコミュニティという、具体的でより現実的な当事者のニーズに対応するという視点が新しい点かと思います。

「持続可能な観光」に関する UNWTO を中心とする主な動きとしては、まず、先ほど申したとおり、1988 年に最初の定義がなされました。その後 1990 年ごろから、環境に配慮した旅行への意識がヨーロッパ諸国を中心に広がり、また一方で自然の恵みを享受するエコツーリズムが盛んになり、宿泊施設や旅行業者に対する認証制度などが活用され始めますが、この頃は、まだ統一的なアクレディテーションの評価基準は存在しませんでした。そこで、1993 年に UNWTO が「ツーリズムの持続的マネジメントのための指標」を提唱し、2004 年には「観光地のための持続可能な開発指標・ガイドブック」を発表しています。

このような流れの中で、国連財団が各種の認証制度とその基準を調査・研究した結果、2008 年に世界持続可能観光協議会（GSTC）を組織し、国連環境計画や UNWTO の呼びかけにより、この GSTC が世界共通の基準を策定するに至りました。その GSTC による最初の「世界規模での持続可能な観光基準」は宿泊施設、およびツアーオペレーター向けのものでした。次いで、2013 年に観光地向けの基準である「Global Sustainable Tourism Criteria for Destination」が発表されました。その後、2016 年に宿泊施設およびツアーオペレーター向け基準が改定され、2017 年に UNWTO が先ほどの再定義をおこない、つい最近になって、GSTC から SDGs を視野に入れた観光地向けの基準の改定版が出たばかりという形になっています。

何をもって「持続可能な観光」と認定されるのかといいますと、認証機関が設定する基準がありまして、こういうことをクリアしていたら認証を与えましょうというシステムになっているわけです。ただ、いろいろな基準があるのですね。最初のガイドブックが基準だった時期もありますし、GSTC の基準、またそれに則って認証評価をする Green Destinations といった機関の基準もあります。ヨーロッパを中心とした ETIS（European Tourism Indicator System for the Sustainable Management of Destinations）などもあれば、タイ、韓国、アイルランドなどといった、各地域でそれぞれに決めているものもあります。

では日本はどうかといいますと、観光庁が中心になって持続可能な観光の指標をつくることになり、2018 年 6 月 18 日付で観光庁に「持続可能な観光推進本部」を設置しました。前回のプロジェクトの中間発表の場（2019 年 12 月 25 日開催）では、皆さんに 12 月 22 日付の *The Sankei News* の記事をお見せしたのですが、観光庁が、地域の経済や環境などに配慮した持続可能な観光を地方自治体の実現してもらうための指標を GSTC の基準を参考に年度内に作成し、来年度初めには公表予定ということで動いているとのことですので、もう間近かと思います。

これには観光公害や環境保全関連の事項も盛り込むことになっていて、2020 年度に GSTC から承認を受けた基準でもって各地方自治体に申請してもらうとのこと。どのような形でアクレディテーションを実施するのかはわかりませんが、基準をクリアした自治体には観光庁承認のロゴの使用を認め、環境などに配慮していることを対外的に示せる形にするようです。今年の 2 月 14 日に「第 4 回持続可能な観光指標に関する検討会」が開かれ、その場で仮の基準（指標）が発表されています。

GSTC の基準をもとにするという大方針を決めた理由として、一つには、国際基準に準拠したいということ。また、先ほどもお見せしたように、GSTC は基準を改定をしており、常に時代に合った、社会背景や観光動向を反映した実践的な指標だということ。加えて、国際プロモーション力やブランド力の向上という目論見があって、この基準に準拠することになったのだそうです。



日本版のシステムが大体どのようなものかといいますと、まず、規則というよりはガイドラインとして活用するという種類のもので、データソースや先行事例なども掲載し、参考にできるようにするようです。そのほか、さきほども申しましたように、目標に取り組んでいることを示す観光庁承認のロゴの活用なども考えているとのこと。第4回検討会の資料によりますと、「日本版持続可能な観光指標（仮）」は、図1のような構成になっています。

最初の部分だけちょっと見てみますと、図2の左側が改訂版 GSTC の基準で、一番左にはSDGsの何番のゴールに関連する事項なのかが示してあります。右側が日本版の指標案です。いろいろな項目がありますが、定期的な見直しをするシステムが組み込まれているかなども含まれています。これは観光庁のホームページに公表されている資料で、まだ案ですが、近いうちに正式なものが発表される予定です。

| 日本版持続可能な観光指標（仮）         |  |
|-------------------------|--|
| SECTION A：持続可能なマネジメント   |  |
| (a) マネジメントの組織と枠組み       |  |
| (b) ステークホルダーの参画         |  |
| (c) 負荷と変化の管理            |  |
| SECTION B：社会経済のサステナビリティ |  |
| (a) 地域経済への貢献            |  |
| (b) 社会的幸福と負荷            |  |
| SECTION C：文化的サステナビリティ   |  |
| (a) 文化遺産の保護             |  |
| (b) 文化的場所への訪問           |  |
| SECTION D：環境のサステナビリティ   |  |
| (a) 自然遺産の保全             |  |
| (b) 資源のマネジメント           |  |
| (c) 廃棄物と排出量の管理          |  |

図1. 第4回 持続可能な観光指標に関する検討会の配布資料をもとに作成した指標の構成

| ※ CSTC-D Version 2と日本版指標（案）の各指標項目が左右で1対1対応している訳ではない（トータルで対応）。 |                                                                                                     |
|---------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| CSTC-D Version 2<br>GSTC-Dの指標                                 | 日本版指標（案）                                                                                            |
| 注釈                                                            | 和訳案                                                                                                 |
| 小文字のアルファベットはA1、A2等の各指標を達成するための内容                              |                                                                                                     |
| SECTION A: Sustainable management<br>持続可能なマネジメント              |                                                                                                     |
| A(a) Management structure and framework<br>マネジメントの組織と枠組み      |                                                                                                     |
| A2 デスティネーションマネジメント戦略と実行計画                                     | A 1<br>持続可能な観光の基本理念に基づき、環境、経済、社会、文化、品質管理、衛生管理、安全管理及び景観に関する内容を含む、「日本版持続可能な観光指標（仮）」に取り組むこと明記した観光計画がある |
| 17 sustainable development goals                              |                                                                                                     |
| a. 現行のデスティネーション戦略と活動を示す、公的文書がある。                              | a. 複数年計画である                                                                                         |
| b. 戦略と計画は明確に示され、オンラインで公開されている。                                | b. 定期的な見直し（少なくとも5年ごと）及び一般公開をしている                                                                    |
| c. 計画策定においては、ステークホルダーが参画する協議の機会やミーティングの記録がある。                 | c. 住民参加によって策定している                                                                                   |
| d. 戦略と実行計画に、持続可能性原則への言及、観光資産、課題やリスクの評価に関する項目がある。              | d. 上記の計画に関連する取組の結果を公開している                                                                           |

図2. 日本版持続可能な観光指標（仮）の冒頭部分（事務局案）

最後に、先ほど宗宮先生がご紹介くださった本日のチラシにある、本プロジェクト群の基本コンセプト「いわゆる『観光地』だけが観光地なのではありません。市民、企業、大学が共に、自分たちの地域の光をみつけましょう！これは皆さん自身の再発見にも繋がるはずです」という文言を考えてくださったのは国際関係学部の財部香枝先生です。「地域の光をみつけましょう！」ということで、必ずしもいわゆる「観光地」だけが観光の対象、観るべき光なのではないという考え方です。自分たちにとっては何気ない日常でも、他者にとっては観るべきものと映ることがよくあります。この間シンポジウムの打ち合わせをしていて、こんなこともできるのではないかと皆んなで思いついた例ですが、春日井周辺の製菓企業を観に行く見学・試食・体験ツアーなどはどうでしょうか（図3参照）。楽しそうだと思いますか。当プロジェクト群は、このような感じで「持続可能な観光」を考えていきたいと思いますという趣旨としております。研究成果として、最終年度には研究対象地の「持続可能な観光」に関する何らかの提言をまとめる予定です。



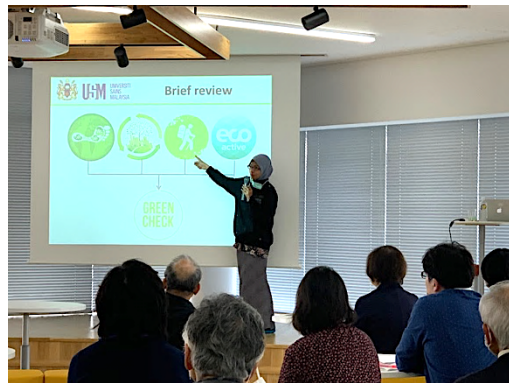
図3. 創業1924年大丸本舗の形を模った飴（左）と仕込み飴（右）（有限会社大丸本舗公式WEBページより）  
創業1879年青柳総本家の季節限定の生ういろう（中）（株式会社青柳総本家公式WEBページより）



# Research Papers

本来シンポジウムには内モンゴルより以下の2名の研究者もそれぞれの研究報告のために参加予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の影響で来日が叶いませんでした。

- ◆ 内モンゴル大学蒙古歴史学系講師 包紅霞（Bao Hongxia）氏  
「牧地草原観光における現地住民の生産能力への影響：内モンゴル・ヘシクテン旗を事例に」
- ◆ 内蒙古自治区図書館外文部主任・研究館員 文宝（Wen Bao）氏  
「内モンゴル自治区アルシャン水文化財の発掘と伝承研究」



## マレーシアの歴史とペナンの観光資源



副田雅紀 SOEDA Masatoshi

マレーシア科学大学日本文化センター所長

1963年愛知学芸大学外国語学科卒業。名古屋市立中学校英語教諭、名古屋市教育センター指導主事、名古屋市教育委員会指導主事、市立中学校校長を経て2001年よりマレーシア科学大学言語・翻訳・リテラシー学部の日本語教師。2014年より現在に至るまで、マレーシア科学大学日本文化センター所長として、日本とマレーシアとの文化・学術交流に取り組んでいる。これまでの日マ交流への貢献に対して、令和元年秋の叙勲において瑞宝双光章を与えられた。

### ABSTRACT

The Malacca Kingdom is established as the first country of Malaysia in 1396, to be colonized by the Portuguese in 1511 and by the Dutch 1896. It became the colony of the Britain in 1896. A lot of Chinese workers were flocked to work in the tin mines and the workers from India flocked to work in the rubber plantations under the Britain. This is the beginning of the ethnic society here. After Japanese and the second occupation by the Britain, independence was proclaimed in 1957. Malaysia today values the culture of each ethnicity, while having the issue of the so called Bumiputra Policy.

George Town in Penang has been listed as a World Heritage Site in 2008. Penang has been popular among the tourists as “Beach Resort Island”, “Pearl Island” since 1980s. George Town has been becoming a tourist destination since 2018 and the image of Penang has changed to a “a world heritage island”, “a multicultural island where the West and the East are mixed”.

### マレーシアの歴史

マレーシア（初期の呼称はムラユ）は紀元前の頃よりいくつかの原住民（オランアスリ）が生活していたが、国として成立したのはスマトラ島から逃れてきた王族パラメスワラが1396年に興したマラッカ王国が最初である。マラッカはインド洋と南シナ海を中心にあり貿易港として栄えたが1511年にポルトガルの植民地、1641年にオランダの植民地になった。その後1786年に東インド会社を作ったイギリスとオランダとの間に東南アジアの支配権をめぐる抗争の後1896年にマレー半島全体がイギリスの植民地（呼称はマラヤ）となった。

マラヤはこのイギリス植民地時代の19世紀後半に中国人資本によって錫産業が発展し、20世紀前半にはイギリス資本によってゴム産業が発展した。イギリスによって錫鉱山の労働者として中国人（主に福建省、広東省）が、ゴム農園の労働者としてインド人（主にインド南部のタミール人）が連れてこられ、多民族国家の原型となった。

また、この時代の中国やインドから連れてこられた労働者はいずれはそれぞれの国へ帰る出稼ぎ労働者としての位置づけしかなかった。彼らの帰属意識も中国やインドに強くあり、同じ社会にしながら最低限の経済的な交流しかなく表1に示されるようにそれぞれの民族は異なる地域で生活することになった。これはまた統治者であるイギリスはそれぞれの民族を交流させない分離統治政策でもあった。

1942年から1945年は日本の植民地になるが、イギリスが行った分離統治政策を利用して「大東亜共栄圏」「アジアの開放」をとнаえてマレー人を上層部に引き入れ、中国人に対しては抗日運動につながっているとして敵視し、インドとはこれまでの関係もあり、現地社会の取り締まりにあたせた。こうした日本軍の統治政策は戦後のマレー系と中国系との対立構造を助長することにもつながってきた。

表 1. 1930 年の民族別人口（出典 小野沢 2012 : 4）

|         | Tin Mine (%) | Rubber Plantation (%) | Farm Village (%) |
|---------|--------------|-----------------------|------------------|
| Malay   | 812 (1)      | 4,821 (3)             | 89,122 (97)      |
| Chinese | 70,704 (92)  | 32,916 (23)           | 1,038 (1)        |
| Indian  | 4,163 (7)    | 104,767 (74)          | 1,892 (2)        |
| Total   | 76,683 (100) | 142,501 (100)         | 92,052 (100)     |

1945 年に第二次世界大戦が終結し、マラヤは再びイギリスの植民地になり、1957 年にイギリスより独立し（マレー半島のみ）マラヤ連邦が成立した。この時に施行された憲法 153 条にマレー人の特別な地位が入れられた。1963 年にシンガポール、東マレーシアが加わりマレーシアが成立し、1965 年にシンガポールが分離独立したことにより現在のマレーシアに至ってきている。1960 年の 5・13 事件を受け 1971 年に新経済政策（NEP）がスタートしたがこの中にマレー系優遇政策（ブミプトラ政策）が含まれマレー系優遇政策は形を変えながらも続いてきた。1991 年にマハティール首相が発表した「2020 年への展望」では「バンサ・マレーシア（Bangsa Malaysia マレーシア国民）：肌の色や信条にかかわらずすべてのマレーシア人がそれぞれの習慣、文化、信仰を自由に実践、表現し、一つの国民として帰属意識を持つような寛容な社会の構築」が課題のひとつとして掲げられ現在に至っている。

マレー系優遇政策等の取り組みによってマレー系の所得は上がったものの依然としてマレー系、中国系、インド系の間の貧困層、極貧層には差がみられる。SGD s で目標とされている「貧困をなくす」「公正をすべての人に」にどう取り組んでいくかはマレーシアの抱える課題でもあるように思われる。

## ペナンの観光資源

ペナン州（ペナン島と対岸本土からなる）の人口は 2017 年現在約 161 万人（2010 年）そのうちペナン島の人口は 74 万人である。表 2 は民族ごとの人口比が示すように、ペナン島はマレーシアの他の地区に比べて中国系が多いことが大きな特徴である。

表 2. ペナン州とペナン島の民族ごとの人口比率 2010 年（出典 マレーシア統計庁 2010）

|      | マレー系   | 中国系    | インド系  | その他   |
|------|--------|--------|-------|-------|
| ペナン州 | 41.50% | 41.30% | 9.70% | 7.50% |
| ペナン島 | 29.50% | 55.60% | 7.20% | 7.70% |

マレーシアは 1990 年代より観光立国を目指してきており、Visit Malaysia Year (1991), Malaysia Truly Asia (1997), Visit Malaysia 2007 などのキャンペーンにより観光客が増加してきている。2008 年にマラッカとジョージタウンが「マラッカとジョージタウン、マラッカ海峡の歴史都市群」として世界遺産登録されたことを契機にペナン島への観光客も増加してきている。ペナンは 1980 年頃よりビーチリゾート、真珠の島として観光客を集めていたが世界遺産登録後

はビーチリゾートに加えて北東部に位置するジョージタウンが観光地として脚光を浴びるようになった（図1）。



図1. ペナン島地図（出典 aroundpenangtips.com）

ペナンへの観光客はどの地域からどんな目的でペナンを訪れているのか。ここではマレーシア科学大学 SUSTAINABLE TOURISM RESEARCH CLUSTER (STRC) が2017年に4,611人の観光客を対象に行った調査をもとにペナンの観光資源について考えてみたい。この調査によるとペナンへの観光客はイギリス、ドイツなどのヨーロッパ（28.5%）、インドネシア、シンガポールなどの東南アジア（26.9%）、中国などの東アジア（15.8%）からが多い。

図2は前述の STRC の調査によるペナンを訪れる観光客の目的あるいは活動を表したものである。1980年代から2008年に世界遺産として登録されるまではペナンは「ビーチリゾートの島」「真珠の島」というイメージが強かった。しかし、2000年の「家賃統制令」の排除、2008年の世界遺産登録以後はイギリス植民地時代の歴史的建造物や街並みが残るジョージタウンの観光地化が進み、「ビーチリゾートの島」から「世界遺産のある島」「西洋と東洋とが混じり合う多文化の島」というイメージに変化してきている。同調査はまた観光客が何に満足したかも調査している。その調査によればローカルの食べ物（45.7%, 1351人）、マレーシアの人たちの親しみやすさ（12.9%, 378人）、ストリートアート（6.4%, 189人）、多文化（5.0%, 149人）、アトラクション（4.2%, 123人）が上位をしめており、これらがペナンの観光資源としての大きな位置を占めていると言えるのではないだろうか。

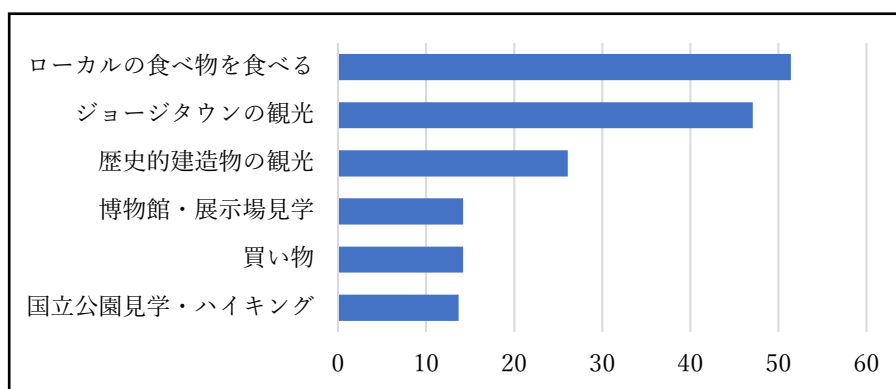


図2. 観光客の目的・活動 (%)（出典 STRC, Universiti Sains Malaysia 2017）

前述したようにペナンにはマレー系、中国系、インド系を始めとして多くの外国人も滞在しておりまさに多民族の地域でありレストランもさまざまである。トリップアドバイザーによれば小さいペナン島にある中国料理（457）、海鮮・シーフード（124）、カフェ・喫茶店（241）、和食（114）、インド料理（122）、タイ料理（77）、ステーキハウス（20）、バーベキュー（36）が掲載されている。これ以外にもマレー料理、アラブ料理、ベトナム料理、ロシア料理、韓国料理等々多くの国のレストランがある。加えてあちらこちらに見られるホーカーセンター（フードコート）でも様々な料理を楽しむことができ、まさに食天国にふさわしい。また、観光客の満足調査では「マレーシアの人たちの親しみやすさ」が2番目にあげられており、マレーシア人のひとなつこさ（怒らない、焦らない、走らない）はペナンの観光資源として特筆に値するのではないだろうか。

ジョージタウンが世界遺産として認定されて以降、町の様子は変わり、ぶらぶら歩きながらローカルフードを楽しみ、マレーシアの人たちと何らかの接触を楽しみ、ストリートアートの前で写真を撮る観光客の姿が多く見られるようになった。マレーシア政府観光局もこうした「街歩き」と「ストリートアート」を組み合わせた観光を推奨している。しかしながら過熱化するストリートアートが世界遺産としての景観を阻害しているようにも思われる。さらには2000年に家賃統制令の廃止によって街の様子は大きく変化してきている。今まで放置され老朽化していた建物や街並みが整備されてきたという面もあるが、家賃の高騰によりもともと住んでいた住民は郊外へ移転し、デベロッパーが買い取った家屋は土産物店やバジェットホテル等に代わってきているのが現状である。観光客を招致し、経済力を高めるということと歴史遺産をどう守っていくかが大きな課題となっているように思われる。

## 参考資料

- 小野沢純「ブミプトラ政策：多民族国家マレーシアの開発ジレンマ」『マレーシア研究』第1号, 2012: 4  
aroundpenangtips.com. “Amazing Explanations Penang Island.”  
<http://www.aroundpenangtips.com/penang-map/penang-guide.php>.  
Department of Statistics Malaysia. “Population and Housing Census of Malaysia, 2010.” 2010,  
[https://web.archive.org/web/20150301154300/http://www.statistics.gov.my/portal/download\\_Population/files/census2010/Taburan\\_Penduduk\\_dan\\_Ciri-ciri\\_Asas\\_Demografi.pdf](https://web.archive.org/web/20150301154300/http://www.statistics.gov.my/portal/download_Population/files/census2010/Taburan_Penduduk_dan_Ciri-ciri_Asas_Demografi.pdf).  
Sustainable Tourism Research Cluster, Universiti Sains Malaysia. “Penang Tourist Survey Report 2017.” 2017,  
[https://www.researchgate.net/publication/326144541\\_Penang\\_Tourist\\_Survey\\_Report\\_2017](https://www.researchgate.net/publication/326144541_Penang_Tourist_Survey_Report_2017).

## Green Tourism Practices in Malaysia: A Review



**MOHAMAD Diana** ディアナ・モハammad

マレーシア科学大学建築学部講師

BSc and MSc in Urban and Regional Planning, Universiti Sains Malaysia (USM); PhD in Conservation (Travel Behavior), University of South Australia (UniSA) School of Housing, Building and Planning (HBP), Universiti Sains Malaysia (diana\_mohamad@usm.my). Fields : Urban Planning, Travel Behavior, Transport Planning, Telecommuting.

### ABSTRACT

Green Tourism becomes the buzz word of key stakeholders, shareholders and players especially in referral to New Urban Agenda and Sustainable Development Goals. Green tourism is an ideation to address the negative impacts of traditional mass tourism, among others, pollution (air, noise, visual), depletion of resources (misuse of natural resources, overexploitation of natural resources utilization) as well as rapid development (issues with biodiversity ecosystem, environmental destruction). This paper brings forward Malaysia's notion and initiatives in practicing Green Tourism that is centralized on employing Green tourism as a means to empower local people as well as a medium to educate people (via engaging the education system) on the importance of 'be green and behave green' in order to sustain our livability.

As the globe is experiencing harsh reality on the adverse impact of traditional mass tourism, green tourism is becoming impressive in size and pervasive in practices. The original concept of Green Tourism reflects "...small-scale tourism which involves visiting natural areas while minimizing environmental impact" (Pedro Pintassilgo, 2016). Thus, the concept has been used interchangeably with concepts of nature tourism, eco tourism, sustainable tourism and responsible tourism. Yet, it is argued that Green Tourism is a term without specific definitions and often '...[unable to] explain specific methods of reducing environmental impact' (Culture Trip, 2020). Initially, Green Tourism was a movement describing the hotel industry's initiatives of encouraging the guests to reuse their towels (in the 1980s) (Rainsforest Alliance, 2020) and now has evolved to the practice that provides practical framework to achieve sustainable business in a sustainable tourism setting (Green Tourism, 2020). In a nutshell, Green Tourism can be deemed as a movement that is performed to achieve mental and physical enjoyment without impacting changes in landscape and changes in the system for commercial or professional reasons (Ministry of Economy United Arab Emirates, undated).

Green Consumer is often associated with the marketing strategy of the hotel industry that promotes environmental-friendly accommodation facilities; and therefore Green Consumer is displayed through their tourism product purchasing activity and their tourism behavior (Aminda et al. 2009). Green Behavior reflects '...buying green or sustainable products, pursuing responsible consumption, getting involved in environmental protection activities and preserving resources (Dan-Cristian Dabija & Bejan Brandusa, 2018). Conventional knowledge has generally encapsulated the Green Consumer into following criteria: (1) individual who really practicing green behavior, (2) individual who often practicing green behavior, (3) individual who practice green behavior at their convenience, and (4) individual who do not practice green behavior at all.

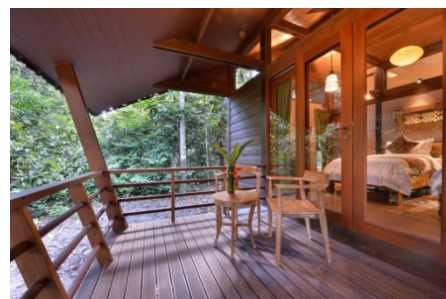


Green tourism practices in Malaysia can be encapsulated into a broad understanding as the practices are employed in various fields, among others: tourism, hotel (accommodation), education, conservation and daily life. In referral to hotel (accommodation), Maisarah Abd Hamid and Salmi Mohd Isa (2018) asserted that the green tourism practices cover facility design (elements of local culture especially for landscaping purposes, development of facilities that are disabled people friendly), sustainability system (implementation of green-based standard operating procedures for sustainability-related activities), community development (empowerment of local people and local businesses, involving local people in the decision making process) (see Pictures 1 and 2), and conservation (financial assistance for preservation and conservation activities, ensuring tour/tourism packages are ecosystem friendly, discourages purchasing items that are non-environmentally friendly) (see Pictures 3, 4, 5 and 6). In the context of daily life, however, the green practices could be considered at the very minimal level. Table 1 lists the ideation of green tourism practices, worldwide, in the field of tourism industry; which is also applied to Malaysia.

Table 1: The aspects covered in green tourism practices

Source: Adapted from Nur Syahidah Said (2016)

| Aspects of green practices      | Hill & O'Neill (2008) | Bergin-Seers & Mair (2009) | Croston (2010) | Becker (2011) | Bar & Prillwitz (2012) | Rezai et al (2013) | Huang et al (2014) | Choy (2015) | Graven (2016) | Jaini et al (2019) |
|---------------------------------|-----------------------|----------------------------|----------------|---------------|------------------------|--------------------|--------------------|-------------|---------------|--------------------|
| Behavior in daily life          | /                     | /                          |                | /             | /                      |                    |                    |             |               |                    |
| Participating in green campaign | /                     |                            |                | /             |                        | /                  |                    | /           |               |                    |
| Behavior while travelling       | /                     |                            | /              |               |                        |                    |                    | /           |               | /                  |
| Behavior while staying          | /                     |                            |                | /             |                        |                    | /                  |             |               |                    |
| Tourism products                |                       |                            |                |               |                        |                    |                    | /           | /             | /                  |



Picture 1 and Picture 2: Tourism product made by the locals

Source: [www.smallfootprintsbigadventure.com](http://www.smallfootprintsbigadventure.com) (2020)



Picture 3: Kayaking activity, Picture 4: Survival camp with local staffs  
Source: [www.smallfootprintsbigadventure.com](http://www.smallfootprintsbigadventure.com) (2020)



Picture 5 and Picture 6: Environmental friendly accommodation  
Source: [www.smallfootprintsbigadventure.com](http://www.smallfootprintsbigadventure.com) (2020)

Despite the ideation and the movement of green tourism could be principally dated back to 1980s, the action and the adaptation are still at the minimal level. Taking this into consideration, Malaysia is addressing green tourism and green practices from different perspectives namely education and awareness. Setting Philippines as the role model where tree planting and management has been absorbed as one of the graduation requirements, higher education institutions in Malaysia are now incorporating green activities into their calendar. At present, the education system seeks to instill and enhance environmental awareness and green practices through tree planting activity in new students' introductory week, community-based activity in institutional-level program, and education-based programs and activities that often handled by higher education institutions and non-government organizations (see Pictures 7 to 10).



Pictures 7 and 8: Gardening techniques sharing session with preschool teachers  
Source: [news.usm.my](http://news.usm.my) (2015)



Pictures 9 and 10: Instilling environmental awareness at secondary education level  
Source: News Straits Times (2019)

In line with the Sustainable Development Goals and New Urban Agenda movements, Malaysia is putting forward many efforts in ensuring current and future generations to commit to their responsibility in respecting the earth, taking care of the raw materials and in making certain that no further harm will be inflicted onto the Mother Earth. The notion is further strengthened through the country's belief in developing practical and pragmatic impact assessment checklist and manual such as Heritage Impact Assessment, Cultural Impact Assessment, and Arborist Impact Assessment.

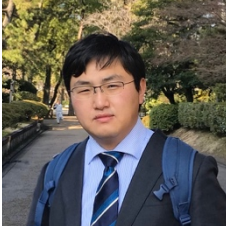
#### Reference

- Aminda Marian Finisterra do Paco, Mario Raposo & walter Leal Filho. *Identifying The Green Consumer: A Segmentation Study*. Journal of Targeting Measurement and Analysis for Marketing (2009)
- Culture Trip. *The Differences between Green Tourism, Ecotourism and Sustainable Tourism*. <https://theculturetrip.com/> (2020)
- Dan-Cristian Dabija & Bejan Brandusa. *The Impact of Consumer Green Behaviour on Green Loyalty Among Retail Formats: A Romanian Case Study*. Moravian Geographical Resports (2018).
- Green Tourism. *Promoting Sustainable Business Tourism: Green Tourism*. <https://www.green-tourism.com/> (2020)
- Maisarah Abd Hamid & Salmi Mohd Isa. *Exploring the sustainable tourism practices among tour operators in Malaysia*. Journal of Sustainability Science and Management 5, 68-80 (2018)
- Ministry of Economy United Arab Emirates. *A Guide to Concepts of Green Tourism*. (undated)
- News Straits Times. *SJKT Sg Ara applies fun approach to learning*. <https://www.nst.com.my/> (2019)
- Nur Syahidah Said. *Toward Green Consumerism Practices in Malaysia Hotel Industries*. 2016
- Pedro Pintassilgo. *Green Tourism*. Encyclopaedia of Tourism (2016)
- Rainforest Alliance. *What Is the Difference Between Green, Eco-, and Sustainable Tourism?* <https://www.rainforest-alliance.org/> (2020).
- Small Footprints, Big Adventure. *The ultimate guide to Malaysia Eco resorts & Sustainable Accommodation*. <https://smallfootprintsbigadventures.com/> (2020)
- Universiti Sains Malaysia. *RCE Penang shares expertise with preschool teachers on green gardening techniques*. <https://news.usm.my/> (2015)



## 「草原旅行」の限界と持続的開発の可能性

—他者が求めるように演じるか？地域の多様性や歴史に根ざすか？—



### 包 呼和木其爾 BAO Huhumuchir (バウ フフムチル)

内モンゴル大学蒙古歴史学系専任講師

2010年4月～2015年9月東北大学大学院環境科学研究科博士前・後期課程修了。博士（東北大学）。2015年10～2016年8月東北大学東北アジア研究センター・専門研究員。

2016年9月～現職。日本モンゴル学会、中国モンゴル史学会会員。専門分野は清代モンゴル史、蒙漢混住地域の社会構造。研究テーマは清代内モンゴル南部蒙漢混住地域の社会構造、前近代モンゴル人農耕社会における統治のあり方、現地語史料による前近代蒙漢混住地域社会像の再構築、内モンゴルにおける文化的ナショナリズムと地域主義など。歴史学概論、中国社会経済史、パブリック・リレーションズ、遊牧文明と社会などの学部生向け講義および史学理論と方法、満洲語史料講読などの大学院講義を担当。

## ABSTRACT

In this presentation, the speaker focusing on the “traditional culture” and “environment”, which as two key concepts related to Inner Mongolia’s ethnic tourism——grassland tourism. This article analyzes how the modern Mongolians thinking about ‘traditional culture’ and their own complex state of mind about agriculture, the development of living scenes and the dilemma of national environmental protection policies. Meanwhile, the speaker based on the Japan’s experience from the 1950s to the 70s “*bunme no setai shikan* (文明の生態史観)”, “*kogai genron* (公害原論)” and “*shigen ron* (資源論)”, to propose the issues that need to be resolved for the sustainable development of tourism development in Inner Mongolia.

## はじめに

中国の改革開放や市場経済への移行を背景に、ここ数年観光業は急成長を成し遂げた。特に地域経済の活性化が唱えられる中で、少数民族の伝統文化に商業的価値が付与され、商品化されていくことは珍しくない。しかし、経済効用が過度と言って良いほど重要視される風潮に乗り、観光開発に少数民族の“伝統文化”を如何に上手く取り入れるかを検討する研究が進展する一方、かかる商業行為が地域社会、特に当の社会に生きる人々にどう作用するかという問題は十分配慮されていないように思われる。

一方、内モンゴルにおける観光業の最大の頼りである草原の利用も様々な挑戦に直面している。持続可能な開発を目的とした政府の環境保全政策が続々頒布され、内モンゴルの農業地域に“退耕還林”、牧畜地域に“退牧還草”政策が実施された。特に「草原旅行」と直接関わる後者の“退牧還草”は広大な草原を無数の柵で区切り、その一部をもって放牧を禁止する空間を作り出し、草原の砂漠化を食い止めようと言う政策である。国家政策によって草原利用の方法に余儀なく変化が迫られた。草原がもはや国家が統制すべき「自然資源」として看做され、「遊牧の風土」としての地位を失った。その結果、長い年月を経て形成された地域在来の草原利用の知恵が機能を失い、現場では生計維持のために政策の隙間を狙う行為が相次ぎ、政策自体も環境改善の目的を達することができなかった。さらに、「禁牧」、「生態移民」政策によって生活基盤を失い、出稼ぎを目的に都市へ集中する者が続出し、ローカルなコミュニティに深刻な貧困化や貧富の格差が生じつつある。環境保全の大義を掲げた国家権力の浸透は地域社会にとって必ずしもプラスに働くとは限らないようである。

つまり、内モンゴルにおける観光開発の問題を論じるために上述の伝統文化をめぐる諸問題と「遊牧風土」としての草原環境をめぐる諸問題を総合的に把握しなければならないと考える。

以上を踏まえて筆者は社会学や人類学の先行研究成果を参照しながら、現場の視点から「草原旅行」を持続的に発展させるために配慮すべき諸点について問題提起を行う。そこでまず内モンゴルに暮らすモンゴル人自身が彼らの伝統としての「遊牧文化」を如何に理解しているのかを整理しておきたい。

## 1. 伝統文化をめぐる諸問題の整理

2019年6月8日、中国北京市朝陽区にある「蒙古大営」というエスニック・テーマパークに「遊牧計画」というイベントが行われた。イベントの主旨について運営側のホームページに次のように書かれてある；「Initiated by film director Uragshaa, musician Yalagch, anthropologist Uradyn E. Bulag and artist Chyanga, Nomad Relays is an annual non-profit event celebrating nomadic culture. On a Saturday every June, academic lectures, art exhibitions, film shows, musical performances and other related activities will be organized to present the charms of nomadic culture, exploring its contemporary significance, and reflecting on its inheritance and future development.」[Official Account of NomadRelays 2019.06.30]

この説明から分かるように、「遊牧計画」は内モンゴル出身の芸術家、実業家や学者等が参画した遊牧文化をテーマとする民間交流イベントである。今年是在日内モンゴル出身の歴史学者、滋賀県立大学教授のボルジギン・ブレンサイン氏が学術講演に招待され、運営側のケンブリッジ大学教授、内モンゴル出身の人類学者ウラディン・ボラグ氏が司会を務め、刺激に富んだ学術講演を披露した。

ブレンサイン氏は内モンゴル東部の農耕地域出身であり、1984年内モンゴル大学卒業後8年間新聞記者として内モンゴルラジオ放送局に勤務した。そして1992年に渡日し現在に至る。氏は自身の経歴を振り返えながら「遊牧」と「農耕」と言ったそれぞれ一種の生産方式を表すに過ぎない言葉に抱える現代モンゴル人のコンプレックスを、19世紀末から急速に農耕化したモンゴル人の歴史と関連づけて説明した。社会進化論がモンゴル社会にもたらした衝撃から、モンゴル社会内部の多様性と想像の一元性の矛盾によって引き起こされる文化ナショナリズムに至るまで簡明に説明した。ホストを務めたボラグ教授もブレンサイン氏に同感しつつ、内モンゴル西部の遊牧地域出身である同氏は元々東部の農耕モンゴル人に対しては誇り高く感じていたが、モンゴル国に行って雑種とみなされ、結局 *Nationalism and Hybridity in Mongolia, Oxford: Clarendon Press 1998* を題する著書を上梓した経緯を説く。ブレンサイン氏も冗談交じりに「私の目の前でボラグさんがモンゴル国の人にホジャー（「雑種」の意）と呼ばれた時、心の中に言葉で言い表せない快感が湧いた。内モンゴルにいた時、我々東部の農耕モンゴル人を見下すのに、モンゴル国の人にとって我々は似た者同士に過ぎないと言う妙な平等感を持った」と言う。ここで、ボラグ氏は一つのキーワードを提示する。つまり、「誰が本物のモンゴル人なのか？」と言うモンゴル社会内部の真正性（authenticity）の問題である。内モンゴルにおける「草原旅行」の代表性と単一性はまさに遊牧文化が他を圧倒してモンゴルを代表する真正性を獲得したからに他ならない。

観光学における真正性（authenticity）の問題について、高山陽子『民族の幻影—中国民族観光の行方』（東北大学出版会、2007年）では中国における少数民族概念の成立、民族文化の確立過程で自然観光に付随する観光資源としての「民族風情」は従来の「伝統文化」、「民族文化」、「愛国主義」に並ぶような「真正性」を獲得するプロセスをフィールドワークに基づいて丹念に分析した。中国における「本物の文化」への欲求とその変遷を描き出した点では刺激的な議論であり、「民族風

情」なるものが「真正性」を獲得するために国家が果たした役割の重要性を指摘した。つまり、真正性の獲得は発言権（discourse power）を握っている公権力によって付与されるのであり、自由競争の結果とは限らない。しかし、モンゴル近代史に興味がある者なら誰でも知っているように、近代内モンゴルの政治指導者はほとんど農耕地域出身のモンゴル人だった。本来、発言権を有する彼らは自分自身の文化を持ってモンゴル全体を代表させてもおかしくないはずである。ところがボラグ氏が言うように、当時の政治指導者たちはその権力を利用して自分自身がイメージしていた「遊牧文化」を形作って行ったのである。つまり、今日内モンゴルにおいて「本物の伝統モンゴル文化」とみなされ、舞台化されているのは遊牧民の生活に由来するものではなく、あくまでも想像された、あるいは意図的に作られた「遊牧文化」にすぎないと言える。無論、政治指導者たちの動機を掘り下げると問題ははるかに複雑であり、本文の主題を離れてしまう。ここで筆者が言いたいのはこうした現実と想像のギャップが開かれる中で、モンゴル人が辿ってきた農耕化の歴史やその過程で形成された農耕モンゴル人の文化がモンゴルの歴史と文化の一部として位置づけられることなく、今の内モンゴルにおける「草原旅行」と言う観光モデルの単一化にも繋がっているということである。

持続可能な開発の視点から見ると、現場本来の文化資源を生かすことは最も生産的であり、内モンゴルにおける持続可能な観光開発の次なる課題は農耕モンゴル人の文化にどのような位置付けを与え、その本来の様子を保ちながら観光客に本物の自然体験を提供できるのか？そして作られた「遊牧文化」を演じるのではなく、商品化を避けながら遊牧民の生活に由来し、絶えず変化している生活文化を如何に観光客に体験させるのか？と言う二点であろう。

## 2. 草原環境をめぐる諸問題

一般財団法人地球・人間環境フォーラムの情報誌グローバルネット 2018 年 8 月号に特集「持続可能な観光とは～観光業の発展と環境の保全を両立できる社会を目指して」が掲載されている。そこで議論されているのは「オーバーツーリズム」や「観光公害」と観光振興を如何に両立させるかと言う問題である。一方で「国連や先進諸国で行われている「上流」での議論と、日々の暮らしの向上にまい進する後発国の現場との間のギャップがあまりに大きく、小手先の対応では解決できそうでもない。」と言う懸念もある〔佐藤仁 2019『反転する環境国家——持続可能性の罫をこえて』（名古屋大学出版会）、ii 頁〕。

問題の根本は、前述の佐藤（2019）でも述べられているように環境問題の根源に横たわるのは資本主義とグローバリゼーションであり、これを真っ向から否定することは生産的ではない（vi 頁）。そこで、佐藤氏は反転をくい止める日本の知として、京都学派による「文明の生態史観」、知の階級制をめぐるポリティクスを真っ向から抵抗した宇井純の「公害原論」および資源調査会による資源の有効利用を主張した「資源論」を持ち出す。いずれも刺激に富んだアイデアであり、現在の開発国家が直面する経済成長と環境保全の両立問題を考える上で示唆的である。

内モンゴルの環境政策に目線を転じてみると、そこはまさに佐藤氏が言う「反転」が起こっている現場に違いない。モンゴル高原を発生地とする公害問題の一つである「砂漠化」は一部の研究者によって過放牧の結果とされ、砂漠化の防止や草原環境回復のために地元住民を指定された場所へ移住させたり、草原を柵で区切ったりする方針が取られた。放牧が禁止された牧民たちは夜中に家畜を放牧禁止区域に追い込んで草を食べさせる「夜間放牧」と言う異様な風景がいたるところに発生しており、それが環保局に発覚したら厳罰を受けることになる。他にも探せば似た



ような事例がいくらでもあり得る。こうした地元住民と国家機関との敵対関係があつては草原を守ることは不可能であろう。環境を改善しようとする国家の動きを批判するつもりはないが、肝心な問題は牧畜民が暮らす草原環境は単に草、水、土、空気ではなく、自然と人間の関わりの中で築き上げられた文化、生態景観の総体としての「遊牧風土」であることが全く無視されたところにある。

こう言う状況をくい止めるために、佐藤氏が提案する 1950～70 年代の日本の経験が大変参考となる。梅棹忠夫氏は「文明の生態史観」の中で内陸アジア乾燥地域に暮らす遊牧民を「悪魔の巢」と表現し、もっぱら中国やインドなど古代文明が高度に発達した第一地域の国々を攻撃、破壊する集団とするが、本日のモンゴル遊牧民の生活環境を考える上で「文明の生態史観」が参考になるのは、国家と言う政治的枠組みよりも、内陸アジアの乾燥地域と言う生態条件を地域の枠組みとし、その特性に応じた自然と人間の関係を考えると言う梅棹等がフィールドワークを通じて構築した「脱国家論」であり、現在から見てなおその理論的先端性に感心する。そこで、地域の生態的な条件に合わせた開発政策の提案を行おうとする場合、現場の実践から生まれた自然利用に関するローカルな知を発見し、それに学問としての権威を与え、現場の実情に寄り添った提案をしなければならないであろう。そこで宇井氏がこだわった「知の階級制」を克服する必要があると言えよう。砂漠化と言う公害問題は海を越えた隣国の日本にまで影響を及ぼしているとは言え、砂漠化によって生活全般が危険に曝されているのは地元住民であり、彼らが持っている砂漠への知識が何よりも全面的で、直感的であることに疑いの余地はない。ところが政策決定においては現場の特性に寄り添った知よりも、専門家によって一般化された砂漠化対策の科学性を信頼するのは現代国家の癖とも言え、科学技術の範疇に入らない異なった知識がもつ特定の場所、事件に対する実用性を認めて「知識」として平等に扱おうとする姿勢が見られない。

総じて、内モンゴルにおける観光開発の持続性を議論するに当たって、「草原旅行」が成立するための前提条件である「遊牧風土」をどのように利用し、守って行くのかを現場に寄り添う形で考え直す必要があると思う。まさに前述の「資源論」が提示してくれたように、「下からの資源計画」が求められていると言えよう。

## 結びにかえて

ここまでは内モンゴルにおける「草原旅行」に関わる二つの中心問題とも言える「文化」と「環境」をめぐる諸問題に一通り触れてきた。あまりにも大雑把で中心となる議論が無さすぎるが、あえて言いたかったことを簡単に述べると、持続可能な観光開発を行うために本質主義的、抽象的、部分的、科学的知識のいずれにも頼りすぎない、より現場に密着した開発政策の大事さと、対象への総合的知識の必要性を提案するつもりであった。何かを解明したわけではなく、ただ未熟な考えを羅列したにすぎないので、問題提起としても十分とは言えない雑論になってしまった。深く反省するばかりである。

## 参考文献

- 今西錦司『今西錦司全集（第12巻）ダーウィン論・主体性の進化論』、講談社（増補版）、1993  
梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社、1967  
小長谷有紀『人類学者は草原に育つ：変貌するモンゴルとともに』、臨川書店、2014  
佐藤仁『反転する環境国家―「持続可能性」の民を超えて』、名古屋大学出版会、2019  
高山陽子『民族の幻影―中国民族観光の行方』、東北大学出版会、2007  
ボルジギン・ブレンサイン『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』、風間書房、2003  
Borjigin Burensain. *The Agricultural Mongols — Land Reclamation and the Formation of Mongolian Village Society in Modern China*. SHUMPUSHA PUBLISHING 2017.  
Uradyn E. Bulag. *Nationalism and Hybridity in Mongolia*. Oxford: Clarendon Press 1998.

# Project Reports

各プロジェクトのリーダーによるプロジェクト概要と 2019 年度の成果等報告



## 春日井商工会議所等との連携による地域活性化



水野雅夫 MIZUNO Masao

中部大学人文学部コミュニケーション学科教授

1973 年名古屋大学工学部卒業。同年、中日新聞／東京新聞記者となる。1990 年ニューヨーク・コロンビア大学東アジア研究所客員研究員、1996 年中日新聞／東京新聞ブリュッセル特派員、1999 年東京新聞経済部長、2003 年中日新聞／東京新聞論説委員、同年名古屋大学大学院国際言語文化研究科客員教授などを経て、2009 年より現職。

### ABSTRACT

The aim of this project is to promote the regional development in Kasugai City, Aichi in cooperation with the Kasugai Chamber of Commerce & Industry. My seminar students have been working on various regional revitalization events in cooperation with the Chamber for two years. For example, they rented a facility in a local shopping street and conducted a smartphone class for the elderly. They also co-produced exhibits of companies participating in the Kasugai Business Forum hosted by the Chamber. Their support was highly evaluated and appreciated by business forum stakeholders and the local citizens.

「持続可能な観光」は、まずは地元の人々が満ち足りて、誇りをもって幸せに暮らしていることが前提となるべきである。そのために、筆者は、まずは地域の活性化の支援に取り組むことから始めた。指導するゼミ生ら 9 人は、「春日井商工会議所との協力による地域活性化プロジェクト」（ゼミ員全員参加）のメンバーとして 2018 年度と 2019 年度の 2 年度にわたり活動した。ゼミ生らは、ゼミ全員参加の地域活性化プログラムとして、春日井商工会議所が主催する「まちゼミ」活動の一環として、2018 年度に 4 回、2019 年度に 1 回、それぞれ地域の高齢者対象の「スマホ使い方教室」を開催した（図 1 参照）。

### 「春日井まちゼミ」事業に参加の目的

水野ゼミは、活動目的である地元地域活性化のために協力可能な事業について春日井商工会議所担当者と協議を重ね、最初の活動として同会議所が毎年開催している「春日井まちゼミ」事業に参加することを決定した。

「春日井まちゼミ」は、ゼミ参加店舗の経営者らが講師となって店舗や企業事務所で、地域の人々に生活に役立つ店や企業のノウハウを教える活動である。毎年、商店街の繁忙期である「夏祭り」と「暮れの大売り出し」の端境期である 11 月の 1 カ月の任意の日に 1 回、あるいは複数回、それぞれの店舗・企業を会場にして開催している。「春日井まちゼミ」は、同会議所が毎年実施している地域の商工業活性化のための主要行事の一つであり、水野ゼミの目的と一致していると判断した。さらに、サブ・プロジェクトである「お店サポーター」（ゼミ生個人活動）として、ゼミ生一人ずつが、個別の企業・店舗に対して業務活性化を目的に協力し、活動した。ゼミ生らの活動内容は、主に、この 2 つの活動で構成されている。

### 商店街関連の追加的活動

以上の 2 つの活動を補足する形で次の追加的活動も行った：JR 春日井駅での「春日井まちゼミ」PR 活動、春日井商工会議所主催「ミステリー調査員」事業への参加、「かすがい下街道商店

街」における、春日井商店街連合会主催「かすがい夏祭り」協賛電子通貨 PayPay による「©鉄腕アトムグッズ」販売露店運営など（図 2～6 参照）。



図 1. まちゼミ：スマホ使い方教室



図 2. まちゼミ PR 活動



図 3. PayPay 普及活動



図 4. 「ミステリー調査員」事業



図 5. 春日井ビジネス・フォーラム

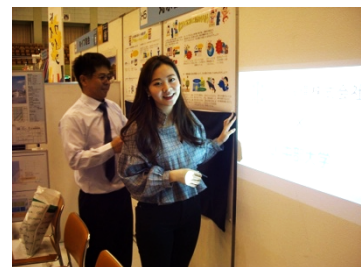


図 6. 春日井ビジネス・フォーラム

### 春日井ビジネス・フォーラム開催支援活動

別途、大きな活動としては、春日井商工会議所主催、春日井市共催「春日井ビジネス・フォーラム」に協力し、ゼミ生が会場の総合司会を担当するとともに、各出展企業の展示ブースのデザイン、パネル作制、アトラクション演出などへの協力も行った。

これらの活動は、春日井商工会議所、地域の企業・商店街をはじめ、市民らからも高い評価を得、地域振興の一端を担うことができた。ゼミ生らも、実社会で活動する企業関係者らと深く接することで、社会経験を積み、自分たちが学ぶ春日井市に興味をもち、彼らなりの地域愛を育み、大きく成長することができたようである。

### 参考資料

- 安藤明之 編著『地域活性化の情報戦略』芙蓉書房出版、2017
- 春日井商工会議所 編『春日井商工会議所 20 年の歩み』木野瀬印刷株式会社、1987
- 長谷川徳之 編著『春日井商工会議所 10 年の歩み』木野瀬印刷株式会社、1977



## 東濃地方の芝居等文化資源記録プロジェクト：恵那市における地芝居調査中間報告



永田典子 NAGATA Noriko

中部大学人文学部日本語日本文化学科教授

愛知県出身。甲南女子大学大学院博士後期課程単位取得満期退学。研究テーマは伝承文芸。『愛知県史』『新修名古屋市史』の口承文芸を担当。著書に『西三河の昔話』などがある。

嘉原優子 YOSHIHARA Yuko

中部大学人文学部日本語日本文化学科教授

兵庫県出身。関西大学大学院文学研究科博士課程修了、博士（文学）。研究テーマは、日本を含むアジアの祭礼や奉納芸能。著書に『バリ島の村落祭祀と神観念』などがある。



### ABSTRACT

This is the record keeping project of JIKABUKI in Gifu Prefecture Tono district. There are 15 JIKABUKI clubs in Tono district, in Ena-city 8 clubs, Iiji Gomoza Kabuki is one of them which has GOMOZA theater for JIKABUKI. JIKABUKI is the amateur kabuki performed by local residents. GOMOZA was built in 1951 as a Iiji town public hall and registered as a tangible cultural property of the country in 2010. The member of the club is currently 20 people, they have learned Kabuki from the late Dansho Matsumoto and his daughter Danjo Matsumoto. In recent years, JIKABUKI performances have been held once every two years due to the declining birthrate, aging and raising costs. JIKABUKI is a cultural resources with great potential for sustainable tourism development. Therefore, it is necessary to pass on this culture to the next generation.

岐阜県には、高山、飛騨、下呂、白川郷などの有名な観光地があり、また温泉やウィンタースポーツなどでも多くの観光客を集めている。一部の地域ではオーバーツーリズムが問題となり、白川郷では、2019年から休日夜間のライトアップイベントが完全予約制となった。一方で、観光地としては発展途上の東濃地方は、2020年、NHK大河ドラマ『麒麟がくる』が放映され、千載一遇の観光開発の機会を迎えている。また、2027年に開業が予定されているリニア新幹線岐阜県駅が東濃地方に設けられるとあって、周辺地域では大きな期待の中、様々な試みが始められている。岐阜県は地芝居が盛んであり、保存会が30団体存在するが、その多くは東濃地方に集中する。今や東濃の地芝居を鑑賞するためのバスツアーもあり、この地方にとって地芝居は重要な観光資源となっている。これを持続可能なものとするには、地元住民の伝統文化に対する理解と、地域文化の健全な継承が前提となる。本プロジェクトは、このような観点から東濃地方の地芝居の現状を調査し、地芝居を準備段階から記録保存することによって、地芝居という文化資源の維持に貢献しようとするものである。本プロジェクトは、地芝居および芝居小屋の宝庫である東濃地方の中でも、今後、大きな変化が起これうる地域、リニア新幹線岐阜県駅周辺地域を調査対象としている。

表1は、中津川市（no.1-6）、恵那市（no.7-14）、瑞浪市（no.15）の歌舞伎保存会と活動拠点を示したものである。2020年には「清流の国ぎふ2020地歌舞伎勢揃い公演」が実施され、東京オリンピック開幕までに東濃地方を含む岐阜県下の29の歌舞伎保存会が、ぎふ清流プラザにてその伝承文化を披露することになっている。東濃地区の中でも恵那市には最大の8つの保存会がある。2019年度、本プロジェクトでは、恵那市に現存する唯一の芝居小屋である五毛座を活動拠点とする飯地五毛座歌舞伎会を中心に調査を実施した。



飯地町は恵那市の南東部に位置する人口 628 人（2019 年 8 月現在）の町である。江戸時代は苗木藩、明治時代は加茂郡、昭和 23 年に恵那郡飯地町、28 年に周辺 8 町村が合併し恵那市飯地町となった。豊かな里山に囲まれた地域で、古くは農業を中心に、林業、養蚕が大切な収入源だったが、現在では企業誘致が進み、企業勤めが一般的となった。若者は進学等で町を出て、都市部で就職することが多く、近年、少子高齢化、人口減少が急速に進んでいる。

表 1. 東濃地方で活動する歌舞伎保存会

| no. | 保存会名称   | 活 動 の 拠 点       |
|-----|---------|-----------------|
| 1   | 東濃歌舞伎中津 | 東美濃ふれあいセンター     |
| 2   | 加子母歌舞伎  | 明治座             |
| 3   | 坂下歌舞伎   | 坂下公民館           |
| 4   | 蛭川歌舞伎   | 蛭子座             |
| 5   | 安岐歌舞伎   | 安岐中之島公園ふれあいセンター |
| 6   | 常盤座歌舞伎  | 常盤座             |
| 7   | 東野歌舞伎   | 東野公民館           |
| 8   | 飯地五毛座歌舞 | 五毛座             |
| 9   | 恵那歌舞伎   | 恵那福祉会館          |
| 10  | 串原歌舞伎   | サンホール串原         |
| 11  | 明智町歌舞伎  | 文化センター          |
| 12  | 山岡町歌舞伎  | 農村環境改善センター      |
| 13  | 三郷歌舞伎   | 公民館（宮盛座）        |
| 14  | 上矢作町歌舞伎 | 上矢作公民館          |
| 15  | 美濃歌舞伎   | 相生座             |

江戸時代より地芝居が盛んで、その歴史は天保年間にまで遡る。明治期には杉之沢、南、西山、沢尻、五明、福原尾の 6 集落がそれぞれの神社に拝殿型舞台を備え、祭礼時などに地芝居を上演していた。西山の舞台は大正 8 年に改築された記録があり、嘉永年間に建築された沢尻の舞台は昭和 12 年に改修の記録がある。第 2 次世界大戦時には一旦下火となるが、戦後の復興による地芝居復活の機運と、昭和 20 年代に各地で起こった公民館運動を背景に、公民館兼芝居小屋として昭和 26 年に飯地村に飯地公民館（現五毛座）が建築された。公民館という機能を持たせるために客席は設置されておらず、舞台の前には平場のスペースが広がっている。両花道を有し、1 階 2 階に栈敷席が設けられている。舞台の下には楽屋があり、2 階栈敷席の後方には和室の続き間が広がっている。現在、2 階栈敷席の一部では、

「するめ」と呼ばれる珍味が作られており、恵那市内などで土産物として販売されている。地下 118.41 m<sup>2</sup>、1 階 466.18 m<sup>2</sup>、2 階 192.11 m<sup>2</sup>、延床面積 776.70 m<sup>2</sup>、建築面積は 476.28 m<sup>2</sup>である。

建設されて以降は、地芝居の上演以外に、地元青年教育の場、選挙事務所、保育園、結婚式場、また、葬儀会場としてなど、多様な目的のためにまさに公民館として利用されてきた。飯地五毛座歌舞伎保存会は、昭和 27 年に飯地歌舞伎同好会として発足した。故松本団升氏（岐阜県無形重要文化財）を振付師匠に、地芝居の上演を開始。団升氏没後は、団升氏次女団女氏に指導を受けている。昭和 30 年代後半は青年団演劇が盛んとなり、一時、地歌舞伎の上演が中断されることもあった。昭和 42 年、活動を再開したが、昭和 50 年代以降は職業の多様化、資金調達難により、毎年の公演開催が困難となり、現在では隔年開催が続いている。昭和 58 年に飯地公民館が新設されたため、旧公民館を「五毛座」と命名し（所在地の五明に由来）、以降、地芝居専用施設となった。現在会員数は 20 名、2020 年は春に公演を予定している。

五毛座近くの民俗資料館には多くの民俗資料とともに、歌舞伎台本や芝居弁当用の弁当箱のセットなどが展示されており、町が近代化されていく中で、いかに芝居が人々の日常の中に入り込んでいたか、観劇が町ぐるみの娯楽であったかを示す資料となっている。2020 年度はそれらの資料の分析とともに、地芝居が上演されるまでの過程を記録する予定である。

## 岐阜県高山市における歴史文化観光地域の成立背景及び現状と課題



末田智樹 SUETA Tomoki

中部大学人文学部歴史地理学科教授

岡山大学大学院文化科学研究科産業社会文化学専攻博士課程修了。博士（経済学・学術）。専門分野は経済地理学、歴史地理学、経営史。江戸期の豪商経営や捕鯨業史、近代以降では百貨店の成立・発展史に関心があり、東海地方では松坂屋（伊藤次郎左衛門家）の研究に取り組んできた。現在は、徳川幕府領（天領・親藩等）であった各都市の観光地域の形成過程を検証している。主な著書に、『藩政捕鯨業の展開』（御茶の水書房、2004年）、『日本百貨店業成立史』（ミネルヴァ書房、2010年）、『老舗百貨店の接客法』（風媒社、2019年）がある。

### ABSTRACT

In this project, first, the background of the establishment of the historical, cultural and tourism area in Takayama City, which is highly regarded as an international tourist city, will be clarified from an industrial and cultural historical perspective. The second section introduces Takayama's active attitude toward tourism. Third, it points out some problems in Takayama City as a historical and cultural tourist area. The factors behind the establishment of the historical and cultural sightseeing area in Takayama City are as follows. First, wealthy merchants in the Edo period succeeded in converting to several industrial forms after modern times. Moreover, Takayama City has been transformed into a tourist spot since the 1970s. However, it became clear that various urban and regional problems occurred in Takayama City. For example, the declining population, the declining birthrate and aging population, changes in the economic environment, the emergence of environmental and energy problems, and the worsening financial situation of local cities.

### 1 はじめに

本プロジェクトでは、まず地方都市のなかで国際観光都市として高い評価を受けている高山市の歴史文化観光地域の成立背景について、産業・文化史的視点から明らかにする。次に大学院生（鶴飼要）・学生（塩屋木雲、古川穂高）との現地調査を踏まえ、現在の高山市における観光振興への取り組みについて紹介し、最後に高山市の歴史文化観光地域としての課題を提示する。

### 2 高山市の歴史文化観光地域の成立背景－重伝建、酒造、木工家具、高山祭から－

高山市に歴史文化観光地域が成立した要因として、以下の4点を指摘しておきたい。

第1に高山市の観光資源として2つの重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建）があげられる。1979年（昭和54）2月3日に指定された「三町伝統的建造物群保存地区」（以下、三町）と2004年（平成16）7月6日に指定された「下二之町大新町伝統的建造物群保存地区」である。1960年代から高山市にて魅力ある空間作りへの取り組みが展開された結果、重伝建の指定を受けるに至った。同じ市に2つの重伝建の「商家町」が隣接するのは、2019年（令和元）12月時点において、43道府県100市町村の120地区のなかで高山市のみである。

第2にその重伝建の三町において、現在6軒の造り酒屋（酒蔵）が観光施設として営業していることである。一之町には平瀬家、二之町には二木・川尻・平田家、三之町には原田・船坂家の各酒屋がある。1697年（元禄10）頃の飛騨高山には酒屋が89軒ほど存在し、酒造業は旦那衆（＝有力商人）の多角的商家経営において柱となる重要な事業であった。昭和戦前期までに高山市内では10軒となっていたが、1970年代以降の毎年1～2月に前述の6軒による「酒蔵めぐり」が開催されてきた。昨2019年（平成31）の第45回をへて、2020年（令和2）からは「飛騨高山7蔵のん衛まつり」へとリニューアルされ、三町の冬を代表する観光イベントとなっている。

第3に古代から飛騨と森林資源・木材との結びつきは深く、現代においても脈々と受け継がれてきた木製家具の技術産業があげられる。「飛騨の匠」と呼ばれる飛騨の木工職人たちが飛鳥時代の頃から奈良の都へ赴き、宮殿や寺院の建築に尽力してきた。重伝建を中心とした歴史的な街並みや寺院などは地元産の木材を使って建てられた建築物であり、歴代の匠が生み出した技術の美しさが観光客を魅了している。旦那衆の商家や造り酒屋の邸宅は、京の雅な様式と江戸の力強い構成に匠の技術を加えて完成した建築物との評価が高い。そして、大正中期頃から匠の伝統技術と、山々に密生したブナ原生林を資源に西欧文化を意識した木製家具生産が本格的に開始され、現在でも飛騨高山の経済の大きな支柱となっている。

第4に春と秋に高山祭が盛大に展開されていることである。この祭は、江戸期から続く天領（＝徳川幕府領）における飛騨高山の旦那衆の資金力を背景に成立したもので、戦後以降では1979年（昭和54）2月に屋台行事が「重要無形民俗文化財」に指定されている。春の山王祭は4月14・15日に行われる旧高山城下町の南半分の氏神様である日枝神社の例祭で、安川通りの南側を舞台とした屋台12台の曳き揃えである。秋の八幡祭は10月9・10日に行われる旧高山城下町の北半分の氏神様である櫻山八幡宮の例祭で、安川通りの北側を舞台とした屋台11台の曳き揃えである。2018年（平成30）の観光客数は春が約15万5,000人、秋が約14万1,000人であり、高山市最大の観光資源となっている。飛騨の匠の技は、この高山祭の屋台で見ることができる。

### 3 高山市の観光振興への取り組み

高山市では、まず地域の魅力が伝わる観光地作りを推進している。国内外のターゲットを明確にした誘客宣伝の推進や、観光ガイドブック・パンフレット・ホームページ等の情報媒体の作成と活用による情報発信の強化がみられる。さらに、市内観光案内の充実やインバウンド事業の戦略と体制作りを常に意識して整備してきた。

次に滞在型・通年型の観光地作りを進めている。広大な市域における地域資源の活用や四季を通じた多くの観光イベントが開催されている。体験型・交流型の要素を取り入れたニューツーリズム・山岳観光・教育旅行等の多様な旅行形態の創出に力を入れている。自然と歴史を活用した観光関連施設の整備や市街地観光の周遊性向上の推進、観光業を中心とした産業間の連携強化による市内産業の活性化に向けた取り組みを行っている。これらの地域資源・観光関連施設を利用することで、様々な文化を持つ観光客のニーズに対応できる仕組み作りに余念がない。

そして、バリアフリー観光と広域観光の中心地としたハブ観光地化を推進している。前者では、障がい者、高齢者、子供連れ・妊婦、外国人などすべての人が、何の障壁もなく安心して楽しみながら観光できる支援団体の育成によるバリアフリーの観光地を目指している。後者では、周辺地域からの交通アクセスや宿泊施設などの受け入れ体制を充実させ、「昇龍道」や「北陸飛騨3つ星街道」等の広域観光を目的とした連携による魅力ある観光地作りを展開している。

### 4 高山市の歴史文化観光地域としての課題

現在の高山市の歴史文化観光地域における課題として、以下の5点を提示しておきたい。

第1に人口減少・少子高齢化の問題である。市人口が減少するなかで、観光産業の継続や各産業・事業の後継者不足が叫ばれる。第2に宿泊施設の問題が指摘できる。2016年（平成28）以前は価格競争が激しく、いかに宿泊単価を維持するかが課題であった。しかしながら、観光客を呼び込むために「協力」が行われるようになり、この問題は収束した。現在も外国人観光客が増

加するなか、2016 年以降に増え続ける民間宿泊施設の体制作りと、それに伴う雇用システムの構築、働き方改革などが新たな課題となっている。

第 3 に町並み景観保存の問題があげられる。1960～70 年代以降に郊外住宅開発による中心市街地の夜間人口の減少がみられ、防災・防犯体制が弱体化した。2016 年 11 月には上一之町に外資系企業の進出がみられ、2020 年に高級ホテルが開業予定である。建設計画など観光事業による地域経済の発展にともなう問題が発生している。第 4 に高山祭の費用、とくに屋台維持費の問題である。江戸期には屋台講と町組の間で金融ネットワークがあり、資金調達は旦那衆が受け持っていた。1951 年（昭和 26）には高山市から補助金交付が開始され、1964 年（昭和 39）に国 50%、県 10%、市 30%、屋台の所有者 10%と定められ制度化した。しかし、現在では市人口の減少による将来的な税収の減少が懸念され、維持費が課題となっている。

第 5 に重伝建の三町への観光客集中の問題が指摘できる。上一・二・三之町と下一・二・三之町・大新町の両重伝建への観光客数に大きな差異がみられる。その一方で、両地区周辺の商店街の衰微も確認でき、なおかつそれに伴う空き家問題が大きく浮上している。そのため、高山市全体でにぎわいのある商業空間の形成が目標に掲げられている。

## 5 おわりに

高山市が地方都市屈指の観光地域として成立した要因としては、まず図 1 にみられるような江戸期から続く飛騨高山の豪商であった旦那衆が近代以降に諸産業への転換に成功したことである。

そのうえ、高山市が 1970 年代から観光地として本格的に形成されていったことである。しかしながら、人口減少・少子高齢化の進展や経済環境の変化、環境・エネルギー問題の顕在化、地方財政状況の深刻化など国家・時代的な課題と重なって、魅力ある持続可能な観光都市づくりに力を入れる高山市でも、都市・地域的な種々の問題が生じているのである。

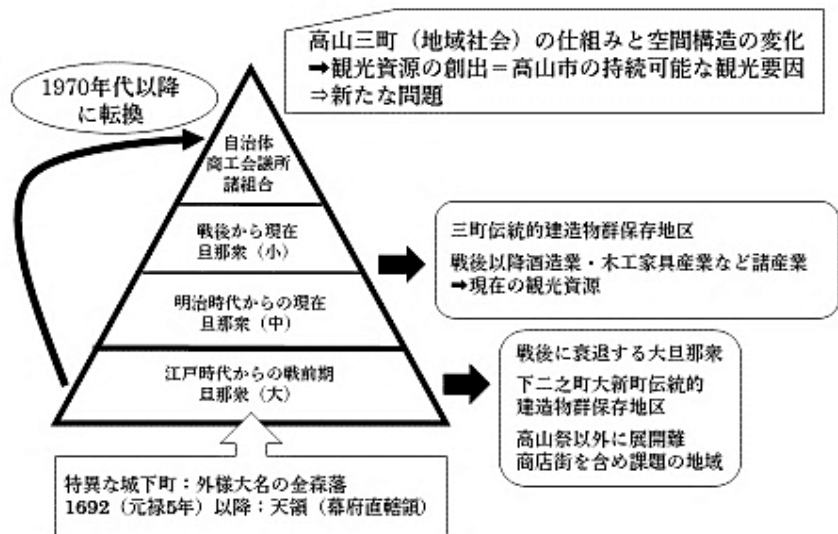


図 1. 高山三町の空間構造の変化

## 参考文献

- 高山市企画管理部企画課.2015.『高山市第八次総合計画』高山市.  
林上編著.2018.『飛騨高山ー地域の産業・社会・文化の歴史を読み解くー』風媒社.  
高山市商工観光部観光課.2019.『平成 30 年 観光統計』高山市.  
宗宮弘明・太田明徳編.2019.『持続可能な地域のあり方を考えるー高山学をめざしてー』あるむ。

## 地域情報資源収集・蓄積・提供システム構築プロジェクト



柊和佑 HIRAGI Wasuke

中部大学人文学部コミュニケーション学科准教授

1978 年、佐渡島生まれ。筑波大学大学院図書館情報学研究科（博士後期課程）単位取得退学。博士（情報学）。専門分野はデジタルアーカイブ。主に、地域情報資源の収集・蓄積・提供について研究。現在は過疎地域の地域アーカイブ、災害アーカイブや地域教育への応用、自律移動型ロボットを用いた情報収集などのプロジェクトを展開している。

f

### ABSTRACT

This paper describes a project on digital archiving of institutional materials and intangible assets. Records and reports of earthquake disasters often involve interdisciplinary teams, each performing a separate task, from acquiring datasets to analyzing the processing results. Also, Operating costs continue to increase each year due to recent advances. Our project is studying three categories to control the cost. In the collection category, we are experimenting an oral history collection experiment from local residents and a collection incentive design. In the semantic category, we are experimenting with a system that automatically extracts local vocabulary. In the utilization category, we are studying the design of the metadata schema and the method of adding information annotations for regional resources. In the future, we will make the results of this project a core of regional comprehensive support.

### デジタルアーカイブの現在

近年、インターネットの発展に伴い、デジタルアーカイブや機関リポジトリが様々な組織で構築されている。これらは、近年の震災において特に注目され「地域の記憶」アーカイブの構築において大きな役割を果たしている。地域の記憶アーカイブは、収集システムと蓄積システム、Webを中心とした提供システムから構成されており、維持自体にそれなりのコストが発生する。現在は震災から9年が経ち、維持コストの確保が問題となりつつある。実際に、構築したアーカイブの委譲が検討されつつあるが、その解決手法が確立されたとは言い難い状況である。

一方、ティム・バーナーズ＝リーは、セマンティック Web の知識構造化手法を、既存の情報資源へ適用する概念として Linked Open Data を提唱した。LOD は、コンピュータで利活用可能な構造化されたデータの普及を目指しており、情報学分野でその実現手法の研究・構築が進められている。LOD は、インターネットを利用した将来的な情報蓄積手段になるべく研究が進められており、その柔軟な規格から様々な手法が考案されている。このように、デジタルアーカイブの各種運用コストの低減については以前から指摘されており、今日の震災アーカイブに代表される地域情報アーカイブの解法になり得る仕組みである。

### 地域情報デジタルアーカイブの目的と概要

本研究は地域住民による地域情報デジタルアーカイブのデータ収集・蓄積・利活用・維持のための支援システムの構築を目指している。そして、地域デジタルアーカイブ自体を地域包括的支援サービスの一つと捉え、「地域の記憶」を残すための中核システムであると位置付けている。そのため、地域の全ての人々を対象とした支援システムであることを目指し、多様なシステムの複合体によるサービスの考案を進めている。



なお、本研究グループは日本最北端の街である稚内市を実験対象地域とし、地域情報資源の収集・蓄積/組織化・提供システムの構築を目指している。このシステムは、稚内は夏季の最北端を目的とした旅行者が多いため、今すぐ行ける情報の収集・蓄積・観光利用に関する実験研究を行うことができる。冬は積雪寒冷地である点を利用して、遠隔操作可能な半自律移動型ロボットによる収集・提供実験を行うことが可能である。また、周囲 180 キロ圏内に同規模の街はなく、季節にもよるが稚内市民だけを対象とした調査も行いやすい。

現在進めている研究テーマは、3 カテゴリに分かれている。まず、地域情報収集カテゴリでは、地域住民による情報提供によってデジタルアーカイブを構築することを目標としている。そのために、遠隔地からの地域住民への情報収集のための働きかけに関する研究と、地域住民の情報提供インセンティブに着目した研究を行なっている（図 1）。



図 1. 地域情報収集ロボットと収集実験（稚内駅のある複合施設「キタカラ」内にて）

意味理解カテゴリでは、地域住民から収集された情報の意味理解を目的とした研究を行なっている。地域情報収集を行う過程で、市民が寄せる情報に使われる語彙が“微妙”に異なっていることがわかっている。様々な年代の市民から情報を収集するため、地域区分、地名、名称、建物といった固有名詞と、方言ともいえるべき世代間で使う言葉が異なっている。そこで、情報学におけるオントロジーの概念を取り入れ、一定の基準に沿った地域辞書の作成が必要であると考えた。しかし、言葉や呼び方は短期間で変わることが多く、ある時点の辞書を作成しても実用に耐えない可能性がある。また、作成コストも大きく、将来的に更新できなくなる可能性がある。そこで、昨今の人工知能技術を用い、新聞と SNS の文章を解析することで、低コストで逐次的に地域語彙の辞書を作成する研究を進めている。なお、担当学生は 2020 年度本学大学院への進学が決定している。また、本学研究者ではないが、岐阜女子大学の研究者と稚内市における地名の変遷を利用した地域語彙を作成する共同研究を行っており、常に情報共有を行なう体制を構築している。

利活用カテゴリでは、地域住民から収集した情報にどのようなメタデータを付与し、どのように使うかに主眼が置かれた研究である。本研究プロジェクトの収集対象は静止画、動画、文字情報、インタビューがあるが、それら複合的な情報をどのように蓄積するかが中心的課題となって

いる。まずは提供方法および、利用者の想定を行い、アクセスポイントと利用形態を分析し、適切なメタデータスキーマを設計することを目的としている。2019 年度は主に提示手法の技術的確認（図 2・図 3）と、動画収集のためのメタデータスキーマの検討（図 4）、情報提供のためのイベント駆動型動画アノテーション手法の検討が行われた。なお、動画メタデータスキーマ研究の担当学生は 2020 年度本学大学院への進学が決定している。



図 2. VR 端末を利用した閲覧環境の研究

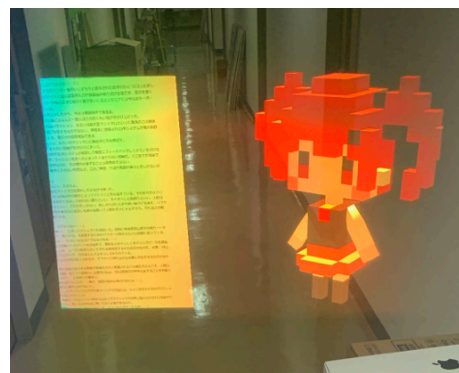


図 3. MR 端末を利用した閲覧環境の研究

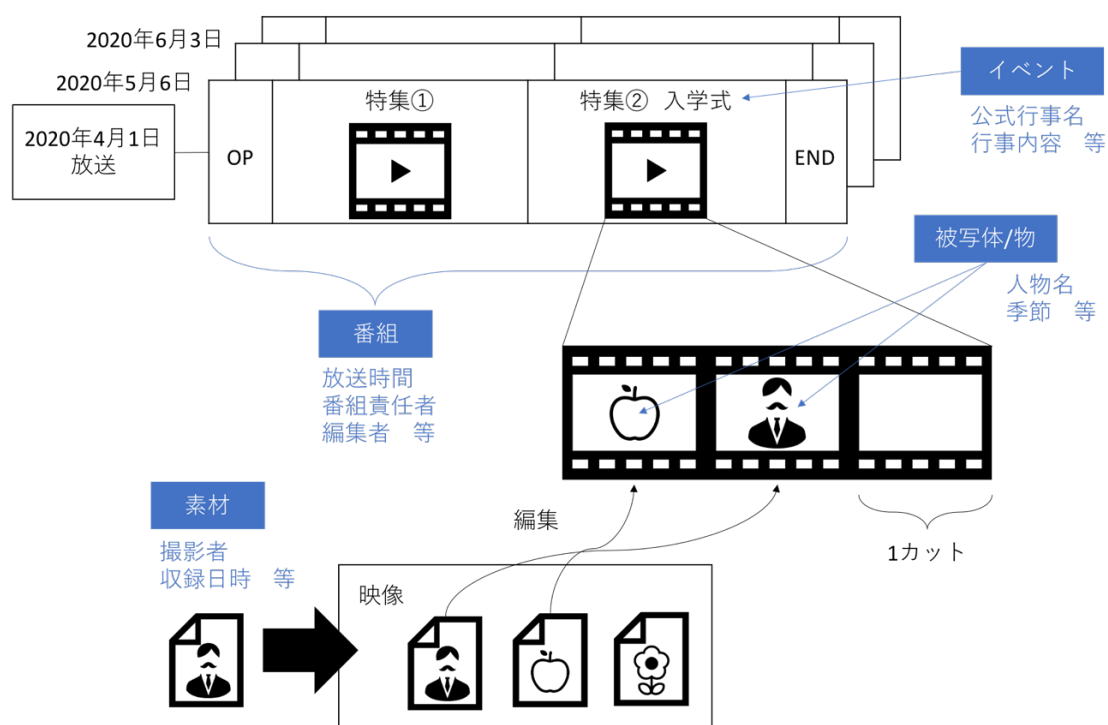


図 4. 動画メタデータスキーマのための動画構造分析

## マレーシア国ペナン島における持続可能な観光プロジェクト：科学系博物館の検討



### 財部香枝 TAKARABE Kae

中部大学国際関係学部国際学科教授

中部大学大学院国際人間学研究科副研究科長

名古屋大学大学院人間情報学研究科博士後期課程満期退学。博士（学術）。スミソニアン協会リサーチ・アソシエイト。専門は科学史、博物館学。近年は明治初期の気象学史（とりわけスミソニアン気象観測法の日本への導入過程）に関心を持っている。

### ABSTRACT

The purpose of this project is to examine the characteristics of science museums in Penang, Malaysia, from a sustainable tourism perspective.

本研究プロジェクトは、マレーシア国ペナン島における持続可能な観光を主題とし、観光資源としての博物館、なかでも科学系博物館の実態調査を行い、その課題を検討するものである。ペナン島は、2008年7月、ジョージタウン地区がマラッカとともにマレーシア初のユネスコ世界文化遺産として登録されており、著名な観光地である。筆者は、①2016年1月、6名の国際関係学部教員で、②2017年9月、5名の同教員で、さらに③2018年2月、5名の同学部学生とともに、ペナン島を訪問した経験がある。①は日本留学経験があるガイド、②はマレーシア科学大学副田先生、③はマレーシア科学大学バディ（学生）にアテンドしていただいた。いずれも滞在時間が短かったために、ジョージタウン地区を中心に視察した。

こうした中、ガイドブックの博物館情報を見てみると、たとえば『るるぶ』（JTBパブリッシング）には、ペナン博物館の紹介があるのみである。一方、マレーシア政府観光局公式サイトによると、ペナンは、世界遺産地区ジョージタウン、ビーチライフ&郊外、アクティビティ、ダイニング&ショッピングの4つに分類された上で、次の博物館が紹介されている。

#### ペナン博物館 Penang State Museum

ペナンの歴史を豊富な史料で分かりやすく紹介。マレー、中国、インドの主要3民族の文化や移民の歴史のほか、20世紀初頭の日本人居住者やプラナカンについても紹介。

#### 孫中山記念館 Sun Yat Sen Museum

中国革命のリーダー孫中山こと孫文が一時的に暮らした家で、革命を支援する活動家の拠点でもあった。19世紀後半建立。

#### テックドームペナン Tech Dome Penangt

コムター内にある、ペナン初の科学館。約120種類の科学体験ができる設備がある。小さな子供から大人まで楽しめるという。

#### エントピア Entopia by Penang Butterfly Farm

2016年に「ペナンバタフライファーム」のあった場所に完成した、昆虫と植物の自然調和の世界を体験できるネイチャーランド。特に、蝶とトンボ、蛍の保護を行っており、園内では15,000匹以上の蝶が自由に飛び回る。

このほか、ペナン国立公園 Penang National Park、トロピカル・スパイスガーデン Tropical Spice Garden、トロピカル・フルーツファーム Tropical Fruit Farm、ペナン植物園 Penang

Botanic Gardens、エコツアー型レジャー施設・ブキッ・メラ・オランウータン島 Bukit Merah Orang Utan Island が紹介されている。同サイトには紹介されていないが、マレーシア科学大学には、大学博物館および考古学博物館のほか、海洋研究所内展示室がある。

近年、博物館は観光資源として注目されている。こうした中、科学系博物館も文化の拠点としての取り組みを始め、観光客誘致に尽力してきている。なお、観光資源の分類体系（2014）によると、「人が創造した観光資源は全て人文資源に含める。文化的景観、産業遺産は人文資源に含める。博物館は収蔵する博物館資料が自然系・理工系に限られていても施設として捉えて人文観光資源とする。従って、動物園・植物園・水族館も人文観光資源となる」と定義されている。

2019 年度は、本プロジェクトの大学院生がペナンにて、どれくらいの科学系博物館があるのか、また、どのような科学知識が来館者と共有されているのかを調査した（詳細はパワーポイント資料参照）。今回の調査によると、予想以上の科学系博物館の存在が明らかとなった。この中には、2011 年 3 月の地震の際、ペナンはほぼ初めて甚大な津波被害を経験したが、津波に関する知識を共有するために新設された博物館も含まれる。2020 年度は、科学系博物館と SDGs17G との紐づけを確認し、科学系博物館の情報発信・観光資源化を検討していく。その際、観光地の情報が商業的価値に見合うもののみに縮小されていく傾向が指摘されてきており、この点に留意したい。また、観光客の関心は多様であることを、改めて理解する必要もあるだろう。<sup>1</sup>

| 博物館の種類      | Goals |    |    |    |    |    |
|-------------|-------|----|----|----|----|----|
| 郷土・歴史       | 4     | 11 | 14 | 15 | 16 |    |
| 美術          | 4     | 11 | 15 | 16 | 17 |    |
| 自然史         | 4     | 7  | 11 | 14 | 15 | 16 |
| 理工          | 4     | 7  | 9  | 11 | 12 | 16 |
| 動物園・水族館・植物園 | 4     | 7  | 11 | 14 | 15 | 16 |

図 1. 博物館の種類と SDGs17G の紐づけ（清水 2019：6）

## 参考資料

- 清水玲子「SDGs と博物館：その課題と展望」『全日本博物館学会第 45 回研究大会発表要旨集』全日本博物館学会、2019：5-6
- 全国科学館連携協議会「文化の拠点としての科学系博物館の取り組み」『全科協ニュース』vol.48、no.5、全国科学博物館協議会、2018：2-8
- 中村浩・青木豊編著『観光資源としての博物館』芙蓉書房、2016
- 日本交通公社監修『美しき日本』JTB パブリッシング、2014
- 林良博「日本の大学と科学系博物館のゆくえ」『結晶』中部大学、2019：269-272
- 山口誠『グアムと日本人：戦争を埋立てた楽園』岩波書店、2007
- 山中速人『イメージの「楽園」：観光ハワイの文化史』筑摩書房、1992
- マレーシア政府観光局公式サイト（ペナン） <http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/index.html>

<sup>1</sup> 「絶対に行きたい！外国人旅行者の口コミに選ばれた国内人気美術館・博物館 TOP10」では福井県立恐竜博物館が 2 位となっている。



## 内モンゴルにおける草原観光の季節的変動研究プロジェクト セレンメン・澁谷鎮明



### セレンメン SIRENMEN

中部大学大学院国際人間学研究科国際関係学専攻2年

中国・内モンゴル生まれ、2015年内モンゴル大学のモンゴル歴史学部を卒業した。現在、内モンゴルのフルンボイル市・新バलग右旗のゲルキャンプ運営を中心に、草原観光の季節的変動の実態と問題点について研究している。

### 澁谷鎮明 SHIBUYA Shizuaki

中部大学国際関係学部国際学科教授

名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻満期退学。博士（地理学）。専門は人文地理学、韓国地域研究で、韓国を中心とした風水地理思想の展開、日本人作成の近代都市図研究に関心を持つ。近年中部地方のインバウンド観光についても研究を行う。



## ABSTRACT

The purpose of this project is to examine the characteristics of Ger Camp in Inner Mongolia, China, from a sustainable tourism perspective. Ger Camp is a tourist facility using the traditional Mongolian dwelling "Ger". Ger camp experience is the main event for grassland tourism for travelers. According to our research in Inner Mongolia, grassland tourism using ger started around 1978. Ger camps are now spread throughout Inner Mongolia.

In remote areas of Inner Mongolia such as Hulinubir region, ger camps are still important, but small and privately owned. Many of these ger camp guests are private customers and come by car from large cities directly. Many ger camp owners also run livestock. They open ger camps only in summer, when care for livestock is low. Ger camps are built into their life cycle and natural environment.

本プロジェクトは、主として中国の内モンゴル自治区において行われている草原観光を主題に、その季節的変動について探究するものである。その際にこのような草原観光において、重要な観光拠点である「ゲルキャンプ」を軸として調査研究を進めている。

中国の内モンゴル自治区は、モンゴル国（外モンゴル）と国境を挟んだ南側に広がる地域で、降水量の少ない砂漠地域と、それを取り囲む準乾燥地域である草原地域からなっている。ここはモンゴル民族がそのような環境のもと遊牧や牧畜を営みながら居住した地域でもある。また内モンゴルは、本来モンゴル族の居住地であったが、現在は漢族が80%以上を占めており、回族などその他の少数民族も多く居住している。

このような内モンゴルで行われる草原観光は、草原地域の自然環境や自然景観を楽しみつつ、そこで暮らしてきたモンゴル族の生活文化を体験するものである。具体的にはモンゴル族の伝統的住居であるゲルに宿泊し、羊肉料理や馬乳酒などを楽しみ、乗馬体験をし、モンゴル相撲などを見学する。いわばグリーンツーリズムと民族観光が同時に行われているとも言えるだろう。

このような草原観光の拠点となるのが、「ゲルキャンプ」である。これは伝統的なゲルやゲルを模した建築物の集合体で、一つ一つの「ゲル」は宿泊、食堂、各種体験に用いられ、その周囲には乗馬体験などを行う馬場や、モンゴル相撲、キャンプファイヤーを行う広場などがある。この「ゲルキャンプ」の規模は多様である。内モンゴルでも観光客に良く知られているシラムレン（希拉穆仁）草原やゲゲンターラ（格根塔拉）草原などでは観光センターの周囲に多くの固定された宿泊用ゲルが設置され、かなり大規模なものが存在する。その一方、このような「センター」の周囲の草原や、自治区の遠隔地では、元々あった牧場の周囲や、ただの草原にゲルを設置した



中小規模のゲルキャンプも見られる。このようなゲルキャンプは外モンゴル（モンゴル国）側にもみられる。

このようなゲルへの宿泊を伴う観光は 1978 年頃には行われていたものと推察される。筆者らの調査によると、シラムレン草原地域において、もともと草原の各地域で映画を「映画放送員」だった者が 1978 年頃に外部からの訪問者を案内する「外来事務所」に移り、牧畜民のゲルに訪問者を案内するなどの業務を行ったという。これがゲルを用いた草原観光の初期段階であったと推測される。

筆者らは、このようなゲルキャンプの特性と運営の実態をさらに追及するため、内モンゴル自治区最北端のフルンボイル市の中においてロシア・モンゴル国国境に近い新バルグ右旗のゲルキャンプについて現地調査を行なった。この地域はモンゴル族の居住者が 8 割を占め、牧畜が主たる産業である。ここは、フルン湖に臨む草原地域で夏季の美しい自然景観が観光資源として評価されており、近年ゲルキャンプを利用した草原観光が行われつつある。

この地域に現在ある 8 つのゲルキャンプを調査すると、おおよそ次のような特徴が理解される。その規模はゲルが 5・20 基程度で、従業員数もおおよそ 2・15 名程度と中小規模のものが多く、開業年も 2010・2017 年と新しいものが多く、上述のシラムレン高原などの地域に比べ、最近になってゲルキャンプを用いた草原観光が行われるようになったものと思われる。この点からは、自治区内のゲルキャンプという観光手法の伝播と、地域差を伺うことができる。

訪問客は自家用車で北京、天津、上海などの大都市からの者が多く、しかもツアーバスではなく自家用車で訪れる個人客が多いようである。また、自治区の他の地域も同様であると思われるが、これらのゲルキャンプは、おおよそ 6・9 月を中心とした季節営業であるのも特徴である。これら施設の関係者によると、経営者のほとんどは牧場経営など牧畜に従事しているものが多いが、放牧の出来ない冬が繁忙期であり、家畜の世話が比較的楽な夏季に、サイドビジネス的にゲルキャンプの経営をしているという。

ここで見られるような個人客が中心のゲルキャンプは、牧畜民の季節的なサイドビジネスとして小規模の経営がなされており、現地の自然環境や生業のサイクルにうまく組み込まれているとも言えるかもしれない。今後、中国の環境政策や社会経済的背景などへのさらなる知見を加え、より詳細な研究を進めたい。

## 参考文献

- 山口有次・斎藤隆夫「モンゴル高原のゲルキャンプ開発による草原景観破壊の動向と景観保全に向けた提案」『桜美林論考・ビジネスマネジメントレビュー』創刊号、2010：63-79
- 山口有次・斎藤隆夫「内モンゴル正藍旗の観光施設開発と環境・景観保全に関する調査」『桜美林論考・ビジネスマネジメントレビュー』第2号、2011：80-94
- Chinbayar, Tserenbat「モンゴルにおける小規模ゲルキャンプツーリズムの発展と地域活性化に関する研究：アラハンガイ県・ウギー湖のゲルキャンプを事例として」博士学位論文（首都大学東京）、2014

## 春日井市姉妹都市ケロウナ（カナダ）におけるワイン・ハスカップ観光プロジェクト

中部大学国際関係学部羽後静子教授・応用生物学部根岸晴夫教授

中部大学アクティブアゲインカレッジ国際羽後ゼミ（松本建夫・野上秀之・足立晃久・飯田知恵子・野田美智子）



松本建夫 MATSUMOTO Tateo

中部大学アクティブアゲインカレッジ（CAAC： Chubu University Active Again College）プロジェクト・リーダー

根岸晴夫 NEGISHI Haruo

中部大学応用生物学部食品栄養科学科教授。

博士（農学）。専門分野：食品科学、食品加工学。研究テーマ：食品の開発・加工プロセスにおける食材の変化を、美味しさと機能性の面から科学的に追究。



### ABSTRACT

Kelowna, a beautiful sight facing the Okanagan Lake is, since 1981, a Sister City of Kasugai City of Central Japan. Kelowna, a multi-cultural City which refused to send to the Camps the citizens of the Japanese Community during WWII. We wish to learn and benefit from Kelowna's multi-culturalism. Its multi-cultural wineries include French, German and Italian wines. The First Nation also owns its own winery. The Japanese Community in Kelowna do not produce wine and specializes in fruits farming. Among its products we wish to introduce to Central Japan the hascap berries, hybridized with Russian berries in Canada, coming originally from the Ainu Indigenous People of Hokkaido who is culturally very close to the Kelowna First Nation. Tasting Kelowna wines and hascap allows us to enjoy the multi-cultural tastes of Kelowna. It meets the SDGs Objectives 16 and 17, by developing an all-inclusive multi-cultural exchange crossing all national and cultural borders. Chubu University is in the process of developing hascap jam of less sugar content. Its nutritious value is high, the preservability is guaranteed, and a few tasting experiments prove that its taste is appreciated by the Central Japan consumers. (Seiko Hanochi)

春日井市と姉妹都市の提携をしているカナダ・ケロウナ市との親善交流を深めることを目的とし、その手段として様々な切り口からアプローチをする中で、ケロウナ市の特産品であるワインとハスカップに着目した。

まず、ケロウナ市の概要についてであるが、ケロウナ市は、図 1 に示すようにカナダ南西部でブリティッシュコロンビア州に属し、バンクーバーから東へ飛行機で約 1 時間のロッキー山脈の湖水のあるオカナガン盆地にある。人口およそ 13 万人（2017 年）、カナダのリゾート地として、人気を博しリタイヤ後のシニアの人達のみならず、IT 企業、大学が進出し、建設ラッシュで活気ある都市と言える。我が春日井市とは 1981 年に姉妹都市となり、中心部には日本庭園の春日井ガーデンが観光スポットとなっている。



図 1. ケロウナ市の位置

次にワインに話題を移すと、日本、また、世界の中ではカナダワインはあまり有名ではないが、カナダ国内のケロウナワインは、国内 2 大産地の一つとして有名であり、市の中心のオカナガン湖周辺に 200 近いワイナリーが点在している。多文化的なケロウナにふさわしくフランス系、ドイツ系、イタリア系などヨーロッパにルーツを持つワイナリーのほか、ファーストネーションと呼ばれるカナダの先住民族のワイナリーもある。

このワインの日本輸入については、春日井燃料など既に数社の代理店が取扱いをしており、その中で中部大学とは OGT エンタープライズ代表の滝沢氏と繋がりががある。氏には中部大学生対

象に、カナダの生活・文化・政治などを毎年講演してもらい、好評を得ており、カナダ・ケロウナへ中部大生が短期・長期留学をするトリガーとなっている。

さて、主題のハスカップに話題を転じると、私たちはこのハスカップに焦点を定め、日本国内に紹介・導入したいと目をつけた。その理由には、日本では北海道で栽培され、ジャムに加工したり、ハスカップ スイーツとして販売しているもののあまり有名ではない、カナダでもケロウナだけの希少価値フルーツのようであるなどである。

加えて、ケロウナで栽培・販売を事業化している経営者が、日系三世のレジ氏（図2）であることも一因である。この方は姉妹都市交流を立ち上げた功績のある、ロイ田中氏の御子息ハーブ田中氏とは竹馬の友で、現在も親交がある。日本とのつながりを深める要素が多く、カナダ産ハスカップ（図3）の日本への紹介にドライブがかかった。（以上文責 松本建夫）

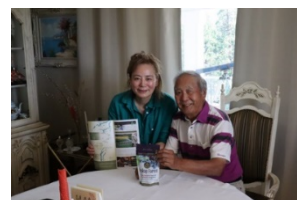


図2. レジ氏と羽後静子教授

ハスカップは北海道で栽培されており、道内ではすでにジャムや果汁などが商品化されている。図4に示すように、カナダ産のハスカップは道産のものよりも粒が大きく、その外観はブルーベリーとよく似ている。



図3. カナダ産ハスカップ

日本食品成分表によると、ハスカップはブルーベリーよりも、ビタミンではA、B群（ナイアシン）、C、E、葉酸など、ミネラルではCa、Kなどが非常に多く含まれている。

今後分析予定の紫色素のアントシアニンなど、ハスカップには栄養学的に優れた成分が豊富に含まれることが期待される。表1にまとめたように、ケロウナ産ハスカップは北海道産に比べ、粒がやや大きく、糖度は51%前後とやや高い。酸味は約pH3.3でやや弱く、その風味は爽やかな甘酸っぱさの特徴としていた。



図4. カナダ産と北海道産のハスカップ比較

ケローナ・ハスカップジャムの開発に先立って市販ジャムの消費動向を調査したところ、高糖度と低糖度ジャムに大別された。近年の健康志向から、低糖度ジャムの消費が伸びていることから、低糖度のハスカップジャムの開発をターゲットとした。主原料のハスカップとグラニュー糖だけではジャムにとろみと果肉感が不足したために、ペクチンの種類と添加量を調整して品質設計した。

表1. ケローナ産と北海道産のハスカップの性状比較

|       | ケローナ産     | 北海道産      |
|-------|-----------|-----------|
| 粒の大きさ | やや大きい     | やや小さい     |
| 糖度(%) | 51.3±2.16 | 38.8±5.44 |
| pH    | 3.35±0.07 | 3.07±0.05 |

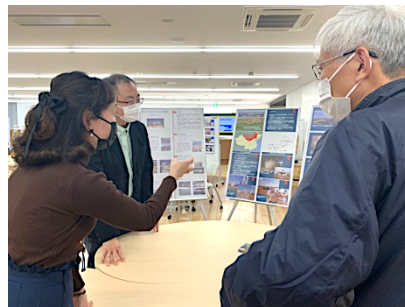
仮表示やパッケージデザインを作成して、図5の瓶詰め品を開発することができ、2019年11月24日に開催された春日井市民フェスタ2019にて試食会を行った。試食者66名中、「やや良い」以上が8割以上で食味試験の結果はたいへん良好であった。現在、保存試験を行っており、30℃、2か月で一般細菌、大腸菌群、カビ類は検出されず良好な保存性が維持されている。プロジェクトチームでは、種々試みをしながら、ケロウナ・ハスカップジャムを中部大学の名と共に広めていけたらと考えている。（以上文責 根岸晴夫）



図5. 瓶詰め品

# Posters & Free Talk Session

第2部では、プロジェクトごとにテーブルに分かれてポスターを囲んで自由懇談を行ない、記録のために自由懇談を録音しました。録音のうち、聞き取りが可能だったやり取りをポスターとともに掲載します。なお、発言者に関しては、わかる範囲／公表可能な範囲において氏名や肩書きも記載しました。

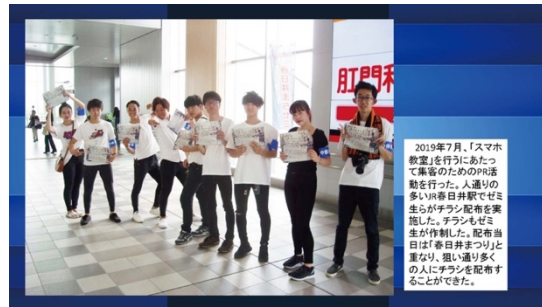




国際人間学研究所シンポジウム  
「春日井商工会議所との連携による地域活性化」

①「春日井まちゼミ(同会議所主催)」への参加  
②「春日井ビジネスフォーラム」(同)の展示物の共同制作と会場内PR活動  
③ゼミ生らによる個別活動  
「お店サポーター方式での企業連携」

発表者  
中部大学人文学部  
コミュニケーション学科  
水野雅夫







## プロジェクト概要

岐阜県は地芝居が盛んであり、保存会が30団体存在するが、その多くは東濃地方に集中する。今や東濃の地芝居を鑑賞するためのバスツアーもあり、この地方にとって地芝居は重要な観光資源となっている。これを持続可能とするには、地元住民の伝統文化に対する理解と、地域文化の健全な継承が前提となる。本プロジェクトは、このような観点から東濃地方の地芝居の現状を調査し、地芝居を準備段階から記録保存することによって、地芝居という文化資源の維持に貢献しようとするものである。恵那市、中津川市、瑞浪市が調査範囲となるが、五毛座を擁する恵那市五毛座歌舞伎保存会の活動を中心に記録を進める。



## 東濃地区における地歌舞伎ツーリズムの動き



## 恵那市飯地町概況

人口 628人（男性300人、女性328人）（2019年8月1日現在）  
世帯数 252世帯  
面積 20.3 km<sup>2</sup>

江戸時代は苗木藩、明治時代は加茂郡、昭和23年に恵那郡飯地町、28年に周辺8町村が合併し恵那市飯地町となった。豊かな里山に囲まれた地域で、古くは農業を中心に、林業、養蚕が大切な収入源だったが、現在では企業誘致が進み、企業勤めが一般的となった。しかし若者は進学等で町を出て、都市部で就職することが多い。交通の便が悪く公共交通空白地帯で、近年、高齢化が急速に進んでいる。町内には縄文遺跡、双体道祖神などが点在する。



## 飯地町の人口減少問題

平成28年までの20年間の人口減少率 34.63%  
⇒ 20年間で約3人に1人がいなくなった  
高齢化率 44.9%（小学生数 21人）

このまま推移すると25年後には人口が半減し、地域の存続が危ぶまれる。急速な高齢化により地域づくりを担う人材も高齢化の一途をたどっており、1人が担う役職数が増加、いかに負担を軽減するかが課題となっている。

◆地域計画「みんなの想いを重ね合わせて子どもの声が響くまちへ」  
組織変革と参画促進、子育て支援と高齢者ケア、移住定住環境の整備  
地域資源の活用と交流促進、の4点を地域計画の柱とする。

## 飯地五毛座歌舞伎保存会の歩み

江戸時代より地芝居が盛んな地域で、歴史は天保年間にも遡る。明治期には、杉之沢、南、西山、沢尻、五明、福原尾の6集落がそれぞれの神社に拝殿型舞台を備え、祭礼時などに順番に地芝居を上演していた。西山の舞台は大正8年に改築された記録があり、嘉永年間に建築された沢尻の舞台は昭和12年に改修の記録がある。第2次世界大戦時には一旦下火となるが、戦後の復興による地芝居復活の機運と、昭和20年代に各地で起こった公民館運動を背景に、公民館兼芝居小屋として、昭和26年に飯地村に飯地公民館（現五毛座）が建築された。

## (つづき)

拝殿型舞台で現存するのは、杉之沢の舞台であるが現在では立ち入りができない。昭和26年に建設された飯地公民館は、「公民館」という機能を持たせるために客席が設置されなかった。舞台の前には平場のスペースが広がっている。地下118.41㎡、1階466.18㎡、2階192.11㎡、延床面積776.70㎡、建築面積は476.28㎡である。建設されて以降は、地芝居の上演以外に、地元青年教育の場として、選挙事務所として、保育園として、結婚式場として、また、葬儀会場としてなど、多様な目的のためにまさに公民館として利用されてきた。**飯地五毛座歌舞伎保存会**は、昭和27年に歌舞伎同好会として発足し、現在に至る。

## 飯地五毛座の構造

|       |                                                                         |
|-------|-------------------------------------------------------------------------|
| 構造形式  | 木造桧瓦葺 地上2階・地下1階 南面玄関ボーチ<br>両花道付舞台 平土間 1・2階観客席（客席200名収容）<br>和室（3室32畳）床欄付 |
| 外壁    | 南京下見板張り                                                                 |
| 屋根    | 切妻屋根 軒端を小さく寄棟                                                           |
| 玄関ボーチ | 円盤型柱頭つき円柱 「霜よけ」（小庇）につく軒天井                                               |
| 内部    | 洋小屋（キングポスト） 小屋組 観客席の床を鉄パイプの支柱に洋風の縁型を付けた肘木で受ける。                          |
| 厨房    | 特産品加工場として利用                                                             |

平成22年 国の登録有形文化財 平成27年 恵那市景観重要建造物指定

※ 随所に洋風建築の要素が取り入れられている



正面から見た飯地五毛座。左手に見えるのは台所。

(2019年11月30日撮影)



五毛座平場客席より舞台を臨む。左上の2階席部分では、通常、恵那名物の「するめ」が作られている。

(2019年11月30日撮影)



当地の民俗資料館には、芝居用の弁当箱が保管されている。芝居が家族ぐるみで楽しんでいたことを示す資料である。

## これまでの上演演目

（保存会記録表記のまま 太字は子ども歌舞伎でも上演）  
 「娘景清八島日記」「白木屋お駒」「牡丹景清」「壺阪霊験記」  
 「**鞘当**」「毛谷村」「川中島」「重の井の子別れ」「浅岡御殿」  
 「一条大蔵物語」「角兵衛」「鎌倉三代記」「近江源代先陣館」  
 「伽羅千代萩」「弁慶上使」「本朝廿四孝」「妹背山婦女庭訓」  
 「**滝夜叉姫**」「ひらがな盛衰記」「心中宵庚申」「いざり勝五」  
 「三人吉三」「絵本太功記十段目」「義経千本桜 道行初音旅」  
 「義経千本桜 すし屋」「**曾我対面**」「菅原伝授手習鑑 寺子屋」  
 「**石井の婦咲**」「忠臣蔵七段目」「扇屋熊谷」「神靈矢口渡し」  
 「四人曾我」「新の口村」「安達ヶ原三段目」「**白波五人男**」  
 「**三番叟**」「だんまり」

## 今後の課題と対策

### 課題

- ・若者の関心低下と地域外流出 ⇒ 歌舞伎伝承・保存に携わる人材の減少
- ・観客（町民） **マンネリ化**（観客の半数は地域外から）
- ・資金難 ⇒ 振付師、衣装、化粧師、義太夫、三味線弾きを **外部委託**
- ・職業多様化により演者の時間が合わず稽古開催が困難

### 対策

啓蒙活動、資金確保、企画・広報強化、出演者の多様化、移住促進・移住者へのアピール、観光客への歌舞伎体験・参加アピール…など。

**2020年4月11日（土）飯地五毛座歌舞伎公演開催**

## 東濃地方の芝居等文化資源記録プロジェクト：自由懇談（部分）

- 永田 プロジェクトリーダーの永田と申します。今日はわざわざありがとうございます。
- 加藤 恵那市役所の加藤と申します。
- 永田 恵那市は都市にアンテナショップを出されていますか。
- 加藤 東京のほうで以前に出したとは聞いていますが、今現在は出していないんじゃないかな。
- 永田 名産品とかを置くアンテナショップは多いから、そういうところに地歌舞伎のポスターとかパンフレットとかあると、興味を持ってもらえるかなと思って。
- 加藤 そうですね。たまに観光交流館でのイベントとかで出したりするぐらいかなと思います。
- 永田 名産品というと、飯地のスルメがどうしても浮かんできてしまうんです。ご存じですか。
- 加藤 わかります。スルメの麴漬け。
- 永田 そうそう。五毛座でつくっているところを見たんですよ。
- 嘉原 私も見ましたが、五毛座でつくっていらっしゃるとは知りませんでした。
- 加藤 自分も知らないです。五毛座でつくっているんですか。
- 永田 そうなんです。五毛座の二階部分の広いところで麴菌を広げてやっていたよ。つくりたてだったからなのか、おいしかったですね。
- 永田 あれは長野なのかしら、木祖村というところがあって、知らないかな。実は名古屋の病院に通っているとき、近くにそこのアンテナショップの小さなお店があって、木祖村の名産とか、お六衛とか、何かいろんなものを売っていたんですけど、そこでいろいろおもしろい話が聞けたりしたので。
- 加藤 なるほど。そうですね。アンテナショップはあれですけど、恵那の駅前にそういったやつがありますよね。
- 嘉原 「恵那」という町の名前は意外と東京でも有名で、なぜ有名かというと、圧倒的に栗きんとん。でも、それは大きな強みで、関心を持ってもらうきっかけになると思うんですね。日もちしないというところも、なかなか魅力がある。だから、現地に足を運んでみようとか。
- 加藤 そうですね。今でいうとそれが多いですね。ただ、栗きんとんって、中津川も有名なのは同じじゃないですか。だから、この二つが一緒になってやっついこうとはなるかもしれないんですけど、じゃあ恵那でと言われたら、「うーん」となっちゃうかもしれないですね。
- 永田 恵那って、「良」という字がつくお店がありましたよね。
- 加藤 良平堂ですね。
- 永田 通販であつという間に完売するお店ですね。
- 加藤 そうです。僕、毎朝その良平堂の前を通るんですけど、車がとまっているのをほとんど見たことないんですよ。でも昔からずっとあって、何でだろう、何でだろうと思っていたら、インターネットのネット通販のほうで大成功しているという話で、ああ、そうなんだって。
- 永田 だから、それを足を運んでもらうようにすると思います、銀の森みたいに。あそこは、たいへん人気がありますね。
- 加藤 そうなんです。銀の森と、その近くの川上屋で、セットみたいになっています。夏にはかき氷を多くの人が食べに来られます。秋は栗きんとんですね。



嘉原 寿やさんの栗パフェを、先生方も召し上がりました。

永田 はい。恵那へ行ったら、やっぱり栗でしょう。やっぱり栗だというのは、私たちの固定観念かも知れません。地元の人たちにはもっと勧めたいものがあるかも知れない。

加藤 地元からしたら、結構地域によっていろいろあります。

永田 広くなりましたもんね。

加藤 そうなんです。恵那市としては、確かに栗を推してはいるんですけど、例えば飯地だったらスルメというのがあったりとか、その近くの笠置という地域はユズ。ゆずもちゃんというキャラクターをつくったりとか。

嘉原 恵那市のキャラクターのエーナちゃんじゃなくて、エーナちゃん以外にですか。

加藤 そうです。ゆずもちゃんというキャラクターがいるんです。

嘉原 笠置町のキャラクターですか。

加藤 そうなんです。やっぱりその地域で推していく食べ物があって、地域ごとに色があるというような感じではありますね。ただ、さっき言った飯地のこういったものというのは、どうなんだろうな。僕自身、あまり小さいころからの触れ合いがなかったのかわからないですけど、そんなに身近に感じていなかったというのが正直なところです。

永田 やっぱり違うところなんですね、住んでいらっしゃるのが。

加藤 そうですね。近くではあるんですけど。

永田 離れた山の村という感じですか。

加藤 あまり行かない感じですね。自分が知らなかったかもしれないんですけど。

永田 意外と地元の人が知らないということはありますよ。でも、小学生から練習して子供歌舞伎をやっているから、いい後継者が育つかと思います。海外にも行っているんですよね。

嘉原 京劇との共演をされたとか。私はバリ島の文化を研究しているので、バリ舞踊家に共演の可能性を聞いてみたら、大いにあるということでした。

加藤 バリですか。

永田 嘉原先生はインドネシアのバリ舞踊をされるので。古典芸能の歌舞伎は難しいでしょうけれど。

嘉原 地元で伝承されているものを。そのバリ舞踊家は日本で教えている日本の方なんですけれども、以前、淡路人形浄瑠璃との共演をされたことがあって。その時は、人形と人間の共演だったんですけども、結構新聞で取材していただいたりしたんですよ。人間と人間の共演もおもしろいなと思っていて。人形浄瑠璃の演目をバリ舞踊でやるんです。そうすれば、バリ舞踊を全然知らなくてもその踊りの内容が推測できます。言葉を介さなくても、それぞれの動きの意味や理由がわかる。お互いにそういうことをや披露し合うというのが、グローバルな文化理解かなと思うんですね。

永田 小さいときにそういうことを経験すると、自分のふるさとはこんなものがあるんだという一つの誇りになって、後継者も育つのではないかと思います。

加藤 本当にそう思います。

嘉原 みんな、自分たちが生まれた地域の価値がよくわからないんですよ。バリ島の人たちもそうでしたし、モンゴルの事例でもほかの事例でも、「観光客や外国人に付度して期待されるものを出すから観光は文化に悪影響を及ぼす」と言われていた時代はもう過ぎて、例えばバリ島の場合、外国人の観光を通して自分たちの文化がどれだけ評価されているのかに

気がついた人たちが新しい観光文化を生み出しています。ですから、観光の影響を文化を壊すマイナスの力とばかり捉えないで、プラスの側面を。もう観光化しない地域なんてないわけで、それをしてはいけないと言ったら発展は見込めないわけですから、それをどういうふうに自分たちに生かしていくのということなんですね。

加藤 そうですね。ただの自分たちの自己満足だけで終わるということではなかなか難しいですし、せっかくその土地だけのものなので、もっと外に発信していけたらいいなと思いますけどね。

嘉原 おもねることなく。双方がそうだと思うんですけど、観光客もやっぱり成長する必要があると思うんです。点だけの観光じゃなくてとか、自分でその点をつなげていく作業とか、自分が欲しいものを取りに行くんじゃないで、そこに何があるのかという事実をそのまま見る。例えば、理想の写真ばかり撮るのにこだわらずに、「こんなに伝統的なものの後ろに、この高層ビルは何だ」みたいなものも、それは一つの現状ですから、そういう文化が今現在あるわけですから、それも見せた上で考えていくべきなんですよ。恵那は、とてもいい環境ですから、あまりいろんな変なものがないほうがいいかなとは思いますが。最近ではキャンプの場所としてとても人気があると聞くんですけども、キャンプかあ、最近グランピングってのはやってるけど、でも恵那には似合わないかなとか、いろんな可能性を考えたりしています。

永田 あそこは星がきれいだというのを売りにしていますよね。それで、天文台の先生に話をしたら、ぜひ学生を連れていってみたいとおっしゃっていました。

加藤 そうなんですか。ぜひ。飯地のテント村のキャンプ場は、今整備を進めていたりするので。あそこは、最近整備して頑張って、ちょっと人気が出てきたという感じですね。

永田 恵那には民俗資料館のようなものはありますか。博石館はありますけどね。

加藤 駅前に広重美術館というのがあります。

永田 中山道にちなんだというのはあると思うんですけど、生活道具を展示するようないところがあるといいと思います。飯地に行ったときに、古い農具や何かを集めて収納されているのを見せていただいたんですけど、全然整理もされてなくて。それを私たちがお手伝いしましょうかという話に、流れでなったんです。農機具だけではなくて、歌舞伎の台本もあり、そのためのスキャナーも買いました。本を広げたまま上から撮るのがあるんです。写真を撮ったりとか、解説文を書かせたりとか、学生の授業の中でもそういうことをやると、こちらも勉強になりますし、飯地の方々にも資料館ができる望みになるのではないかなと思うんです。そういうことは、恵那市では教育委員会ですか、お話を持っていくとしたら。

加藤 教育委員会ですね。まさに生涯学習のところですよ。

金澤 いいですか。

永田 どうぞ。どちらにお住まいですか。この辺（恵那市飯地町）の地理はわかりますか。

金澤 行ったことあるんです。私、恵那の観光大使をやっていますので。

永田 恵那の観光大使だそうですね。こちらは恵那市役所の方です。

加藤 地域振興課の加藤と申します。

金澤 恵那の観光大使です。春日井に住んでいるんですけど。



永田 高蔵寺にいらっしゃるんですね。

金澤 ええ。ニュータウンに住んでいます。

永田 観光大使に選ばれたのは、一体どうして。

金澤 私は以前名鉄に勤めていて、たまたま岐阜県のほうで子会社の岐阜グランドホテルをやっていたので。

永田 社長さんでいらっしゃった。

金澤 大分前。もう 10 年以上前ですけど。

永田 岐阜グランドホテルって、長良川のところですよね。行ったことがあります。

金澤 そのときに、恵那市から名鉄の顔を使って何かやれと言われて、10 年ぐらいやったんです。五毛座も行ったことがあります。このポスターにある「課題」というのは、どういうことですか。

永田 少子高齢化の影響で、ここで演じる人たちがだんだん少なくなってきた、毎年開けない。それから、こういう地芝居というのはお金を徴収しているわけではなくて無料でやっているんです。ですから、これにかかる経費はすべて住民が負担しているということで、そういう経済的な問題もあって、上演したくてもなかなかできないというようなこともあるんです。大体、五毛座は非常に駅から離れているということで、車でなければ行けません。ですから、あまり知られていませんので、観客というのは、やっぱり住民の方々ということになる。そうすると、マンネリ化というようなこともあるということです。

金澤 なるほど。今はどなたが。

永田 先ほどのこの方（松本団升氏）の娘さんが今指導をされています。化粧をすとか、着付けをすとか、そういう言ってみればプロの方々をお呼びするということもあるんです。地域にそういうことのできる人がいらっしゃるわけじゃないので、演技方を指導してもらって、借りた衣装やかつらで演じるということになります。もう少し根づかせるには、やっぱり先立つものの問題があるものですから、なかなか難しいかと思います。

金澤 これはどのぐらいの頻度でやっているんですか。

永田 2 年に一度ということになっています。本当はもっとやりたいと思っているんですけども。

金澤 やる人がいないですね。

永田 もう高齢化になってきたということや、ご自身の仕事が忙しい。地域社会の中で先輩・後輩でいろいろと教わったりして伝承されていたのが、外に働きに行くことによって、地域との関係がなくなってきたということもあると思うんです。

金澤 時代ですね。それを食い止めるのは難しいですね。

永田 それでは今の時代だったらどうするのかということで、観光客に、まず知らない人に見てもらうことが大切だと思います。

加藤 正直、あまり自分もこういった飯地の地歌舞伎とか、恥ずかしながら詳しくないんです。ああ、そうなんだかと思って、逆に勉強させてもらっているの。

柳谷 市役所の中にもいらっしゃいましたよね、地歌舞伎の役者さん。

加藤 聞いたことはあります。飯地のほうでは結構小学校のころからやっているの、すごい  
いなと思って。僕も地元なんですけど、やった記憶ないなって。

柳谷 同じ市でも地域によって全然違いますもんね。

加藤 自分のイメージだと、本当にいいなと思うのは、幼少期からの記憶というのが大きいです  
ね。かなり小さいころから地域と密接に結びついてというのが、今飯地では学校のほうで  
やっているわけですから。

嘉原 それぞれの村で伝承されているものが消えつつある。

金澤 今は伝統が途絶えないように、学校でも小学生に棒の手を授業で教えてますよ。（春日井  
市の）玉野とか。

永田 玉野も盛んですね。

金澤 伝統を絶やさないように、年に一遍神社で棒の手を披露すると、やっぱり達成感が出てく  
るから、そういうことで何とかね。

永田 見て楽しむだけでなく、やっぱり地域の人々の紐帯というか連帯感というか、そうい  
うものを生み出すということもあると思うんですね。これだけ災害の多い時代になります  
と、この家にはどんな人がいるか知らないというのも、やっぱり問題になりますよね。イ  
ベント的なもので隣近所が顔を直に合わせるというのも、とても重要なと思います。

金澤 地芝居はなかなかいいですね。わかりやすいし、おもしろい。もっとわかりやすいとい  
うか、楽しめるような演目を考えるということも必要かもわからんね。

永田 そうですね。長い話よりは、いいところだけをやるとか。こういう古い資料があったりす  
るんですね。だから、昔は割と栄えたんです。

金澤 五毛座は、国の文化財に指定は。

永田 国の登録有形文化財になっています。それから、恵那市の景観重要建造物です。

金澤 愛知県に登文会というのがあって、登録有形文化財が犬山とか岩村とか名古屋市内にもか  
なりあるんですけど、たくさんのそういう文化財を登録した人がいて、それをまとめると  
何十にもなるんですね。そういうのをPRしようということでツアーを打っておるんです。  
私も、登文会の人から頼まれて、毎年一遍そういう文化財を見学に行くというので、ここ  
を紹介したんです。そうしたら、恵那の市役所はオッケーということで紹介してくれたけ  
れども、登文会の人スケジュールに合わせてくれなかったの。というのは、臨時で対応  
できないから案内できないといって断られて。せっかく愛知県の団体が来るというチャン  
スをもらったのに。

永田 いつごろの話ですか。

金澤 3年か4年ぐらい前にね。

永田 人手不足というのがあるのかもわかりませんが、また来ていただけるといいと思います。

金澤 登文会のに登録できればね。これももうちょっと売り出してほしいよね。何かもっといい  
宣伝を。

永田 そういうことを誘導してくれるような方がいらっしゃれば、それに乗っていけるんでしょ  
うけど、地元の人では、どうもなかなかそれがうまくいかないんですね。

金澤 そうね。愛知県には登文会というのができたんですけど、岐阜県にはないんです。だ  
から、岐阜県庁の文化課へ言って、愛知県にはこういうのがあって、全国のあちこちにで  
きているのに、岐阜県だけないよと。

永田 だって、岐阜県こそあちこちに文化財がありますよね。

金澤 ええ。指定していないものも多い。もっと積極的に市とか県が指定するように努力して、登文会等もつくって、そこで全国からお客さんを呼べるように、そういうこともやってもらいたいと思うんだけどね。

永田 まず文化財として注目してもらえるようなことを。こういう歌舞伎だけではなくて、有形文化として呼び込むということですね。人に来ていただけるように。専門家だけでもいいですから、とにかく地域以外の方に来ていただくということが先決かわかりませんね。

金澤 活性化するためには、それがね。

永田 さすがいいお知恵をありがとうございました。



五毛座二階席でのスルメ作りのための麴仕込み



飯地のふるさと民俗資料館  
(旧恵那市役所飯地支所庁舎：国の登録有形文化財)



二階展示



二階展示



飯地子供歌舞伎（五毛座展示）



飯地歌舞伎と京劇団合同公演のポスター（1997年）  
(資料館展示)



国際人間学研究所シンポジウム  
持続可能な観光2019年度  
(於：中部大学不言実行館2階)

2020年2月26日(水)

ポスター発表  
塩屋本雲  
古川穂高  
鶴飼 要  
末田智樹

飛騨高山の歴史観光都市としての  
伝統を支える人々が暮らす社会空間  
研究プロジェクト

## 岐阜県高山市における歴史文化観光地域の 成立背景及び現状と課題

目次

- 【1】発表の目的
- 【2】高山市の歴史文化観光地域の成立背景  
ー重伝建、酒造、木工家具、高山祭からー
- 【3】高山市の観光動向と取り組み
- 【4】高山市の歴史文化観光地域としての課題
- 【5】まとめ

写真1 高山駅前(塩屋本雲君)

### 【1】発表の目的

- ①歴史文化観光地域としての成立背景  
→産業・文化面の歴史から検証
- ②高山市の観光動向と取り組み  
→現状の検証
- ③歴史文化観光地域としての課題  
→国際観光都市として高く評価され  
ながらも問題が生じていないか?

写真2 宮川朝市  
(全写真は末田智樹)

写真3・4 高山陣屋跡

写真5 高山市政記念館(旧高山町役場)

### 【2】高山市の歴史文化観光地域の成立背景

#### (1) 観光資源としての重要伝統的建造物群保存地区

写真6 三町伝統的建造物群保存地区  
上三之町並保存区域

●1979(昭和54)年2月3日指定  
:高山市上之一町、上二之町、上三之町、  
片原町、神明町4丁目の各一部

写真7 下二之町大新町伝統的建造物群保存地区  
吉島家住宅(国指定重要文化財)

●2004(平成16)年7月6日指定  
:下之一町、下二之町、下三之町、八幡町、大新町1  
丁目、大新町2丁目、大新町3丁目、大新町4丁目の  
各一部

### 【天領・飛騨高山の豪商＝旦那衆】

●谷屋(日下部)九兵衛家・同族団組織、地主的経営、大名貸して  
高山町の旦那衆のなかで上位へ

写真8 日下部家(民藝館)  
(国指定重要文化財)

→町人の首座＝「旦那衆」の存在  
・全国の都市では京都や金沢、  
博多など多くの地域で確認  
・**辺境地に限定すれば飛騨高山のみ**

江戸期の西日本を中心  
とした豪商の拠点

#### (2) 観光資源としての酒造業

●特徴・6軒の酒蔵めぐり  
(毎年1～2月、第45回まで)  
2020年から「飛騨高山7蔵のん衛まつり」  
へとリニューアル

●現在・重伝建の三町に造り酒屋  
一之町・平瀬家  
二之町・二本家、川尻家、平田家  
三之町・原田家、船坂家

●銘柄は飛騨、天領など  
→地域名・歴史と関連

●本醸造、純米酒、吟醸酒、  
大吟醸酒など  
→種類の豊富さ

写真9 高山駅での広告  
「飛騨高山7蔵のん衛まつり」

写真10 平瀬酒造店(久寿玉)

写真11 二本酒造(玉の井)

写真12 平瀬酒造店の  
醸造用タンク

#### (3) 観光資源としての木工家具産業

写真13・14 飛騨国分寺 三重塔  
(岐阜県重要文化財)

写真15 屋台の修理作業所

写真16 飛騨・世界生活  
文化センター

写真17 飛騨の家具と工芸の館  
匠館(下三之町)

写真18 飛騨の家具館

写真19・20 ミュージアム飛騨  
(飛騨の匠 ミュージアム)

鶴飼 要君

#### (4) 観光資源としての高山祭

16世紀後半から続く  
国の「重要無形民俗文化財」

●春の高山祭「山王祭」・4月14・15日開催  
・旧高山城下町の北半分の氏神社である日枝神社の例祭  
・安川通りの南側を舞台とした屋台12台の曳き揃え

●秋の高山祭「八幡祭」・10月9・10日開催  
・旧高山城下町の北半分の氏神社である横山八幡宮の例祭  
・安川通りの北側を舞台とした屋台11台の曳き揃え

→2018(平成30)年度観光客数・春:約15万5,000人  
秋:約14万1,000人

高山祭の観光客入込者数の推移(千人)

写真21・22・23 高山祭屋台会館及び屋台

写真24 まつりの森(塩屋本雲君)

### 図1 1970年代以降高山市の観光地域の形成過程

戦前戦後 1970年代 1980年代 1990年代 2000年代 2010年代 2020年代

写真25・26・27 下三之町の  
高山陣屋跡  
(塩屋本雲君)

写真28 神明町の飛騨高山  
レトロミュージアム

写真29 飛騨高山まほの博物館  
(旧末田家・大坂屋右衛門)



平成25(2013)年の観光客県内1日帰り・宿泊区別消費額(単位:円)

|   | 1日帰り客        | 宿泊客           |
|---|--------------|---------------|
| 国 | 約 40,000,000 | 約 110,000,000 |
| 県 | 約 30,000,000 | 約 100,000,000 |
| 市 | 約 20,000,000 | 約 80,000,000  |
| 町 | 約 10,000,000 | 約 40,000,000  |
| 村 | 約 5,000,000  | 約 20,000,000  |

出典)「平成25年度観光客県内1日帰り消費額調査について」(2014年)より作成。

平成20年の主な都市の1人当たりの支出総額(単位:円)

|      | 宿泊客    | 1日帰り客  |
|------|--------|--------|
| 京都市  | 41,891 | 10,383 |
| 高山市  | 34,382 | 7,441  |
| 横浜市  | 33,896 | 6,282  |
| 名古屋市 | 24,442 | 4,594  |
| 松山市  | 17,500 | 8,700  |

出典)「観光客の消費行動と消費額」(2011年)より作成。  
 注)「宿泊客」:「宿泊客」の消費額を1泊あたり145円、観光客1人当たり消費額を145円と仮定して算出。  
 「1日帰り客」:「1日帰り客」の消費額を1日あたり145円と仮定して算出。  
 出典)「観光客県内消費額調査について」(2014年)より作成。

### インバウンド事業の戦略と体制

**戦略的なプロモーション**

- ・現地組織を取り入れたPR資料の作成
- ・官民連携 (観光県高国府観光政策協議会 他)
- ・近隣自治体との連携 (耳鳴道プロジェクト等)
- ・海外観光客への設置 (職員の派遣、観光客数の高い海外メディア等へのPR)

**受入環境の抜本的な整備**

- ・バリアフリーのまちづくり (伊予いよまち、まほろばいよまち)
- ・無料公営駐車場(入7日間)
- ・マルチモ旅行受入体制
- ・地域経済通達室内土制度 (英語、中国語に対応)
- ・多言語化 (パンフレット10言語、サイト11言語)

[illegible]

(1) 人口減少・少子高齢化の問題

市人口の減少中のか観光産業の継続  
各産業・事業経営の従業者不足

山形市市域の総人口推移 (千人)

| 年度     | 総人口     | 15歳未満人口 | 15歳以上人口 | 65歳以上人口 |
|--------|---------|---------|---------|---------|
| 昭和三十九年 | 210,830 | 34,800  | 176,030 | 24,880  |
| 昭和四十一年 | 212,360 | 34,832  | 177,528 | 24,915  |
| 昭和四十三年 | 211,110 | 34,432  | 176,678 | 24,937  |
| 昭和四十五年 | 209,590 | 33,910  | 175,680 | 24,809  |
| 昭和三十七年 | 207,373 | 34,242  | 173,131 | 24,507  |
| 昭和四十九年 | 204,400 | 34,163  | 170,237 | 24,564  |
| 平成三年   | 200,564 | 33,053  | 167,511 | 24,577  |
| 平成五年   | 198,442 | 32,319  | 166,123 | 24,372  |
| 平成七年   | 196,289 | 31,476  | 164,813 | 24,490  |
| 平成九年   | 194,218 | 31,034  | 163,184 | 24,554  |
| 平成十一年  | 192,046 | 30,495  | 161,551 | 24,666  |
| 平成十三年  | 189,833 | 31,180  | 158,652 | 24,902  |
| 平成十五年  | 187,524 | 30,923  | 156,601 | 25,293  |
| 平成十七年  | 185,402 | 32,781  | 152,621 | 25,165  |
| 平成十九年  | 183,160 | 31,406  | 151,754 | 25,362  |

図例： 山形市域の「15歳未満人口・15歳以上人口・65歳以上人口」の推移。より作成。

山形市域の人口構成 (千人)

山形市域の人口構成 (千人)

| 年度     | 15歳未満人口 | 15歳以上人口 | 65歳以上人口 |
|--------|---------|---------|---------|
| 昭和三十一年 | 34,800  | 176,030 | 24,880  |
| 昭和三十三年 | 34,832  | 177,528 | 24,915  |
| 昭和三十五年 | 34,432  | 176,678 | 24,937  |
| 昭和三十七年 | 33,910  | 175,680 | 24,809  |
| 昭和三十九年 | 34,242  | 173,131 | 24,507  |
| 昭和四十一年 | 34,163  | 170,237 | 24,564  |
| 昭和四十三年 | 33,053  | 167,511 | 24,577  |
| 昭和四十五年 | 32,319  | 166,123 | 24,372  |
| 昭和四十七年 | 31,476  | 164,813 | 24,490  |
| 昭和四十九年 | 31,034  | 163,184 | 24,554  |
| 昭和五十一年 | 30,495  | 161,551 | 24,666  |
| 昭和五十三年 | 31,180  | 158,652 | 24,902  |
| 昭和五十五年 | 30,923  | 156,601 | 25,293  |
| 昭和五十七年 | 32,781  | 152,621 | 25,165  |
| 昭和五十九年 | 31,406  | 151,754 | 25,362  |

図例： 山形市域の「15歳未満人口・15歳以上人口・65歳以上人口」の推移。より作成。

山形市域の人口構成 (千人)

| 年度     | 15歳未満人口 | 15歳以上人口 | 65歳以上人口 |
|--------|---------|---------|---------|
| 昭和三十一年 | 34,800  | 176,030 | 24,880  |
| 昭和三十三年 | 34,832  | 177,528 | 24,915  |
| 昭和三十五年 | 34,432  | 176,678 | 24,937  |
| 昭和三十七年 | 33,910  | 175,680 | 24,809  |
| 昭和三十九年 | 34,242  | 173,131 | 24,507  |
| 昭和四十一年 | 34,163  | 170,237 | 24,564  |
| 昭和四十三年 | 33,053  | 167,511 | 24,577  |
| 昭和四十五年 | 32,319  | 166,123 | 24,372  |
| 昭和四十七年 | 31,476  | 164,813 | 24,490  |
| 昭和四十九年 | 31,034  | 163,184 | 24,554  |
| 昭和五十一年 | 30,495  | 161,551 | 24,666  |
| 昭和五十三年 | 31,180  | 158,652 | 24,902  |
| 昭和五十五年 | 30,923  | 156,601 | 25,293  |
| 昭和五十七年 | 32,781  | 152,621 | 25,165  |
| 昭和五十九年 | 31,406  | 151,754 | 25,362  |

図例： 山形市域の「15歳未満人口・15歳以上人口・65歳以上人口」の推移。より作成。

山形市域の人口構成 (千人)

| 年度     | 15歳未満人口 | 15歳以上人口 | 65歳以上人口 |
|--------|---------|---------|---------|
| 昭和三十一年 | 34,800  | 176,030 | 24,880  |
| 昭和三十三年 | 34,832  | 177,528 | 24,915  |
| 昭和三十五年 | 34,432  | 176,678 | 24,937  |
| 昭和三十七年 | 33,910  | 175,680 | 24,809  |
| 昭和三十九年 | 34,242  | 173,131 | 24,507  |
| 昭和四十一年 | 34,163  | 170,237 | 24,564  |
| 昭和四十三年 | 33,053  | 167,511 | 24,577  |
| 昭和四十五年 | 32,319  | 166,123 | 24,372  |
| 昭和四十七年 | 31,476  | 164,813 | 24,490  |
| 昭和四十九年 | 31,034  | 163,184 | 24,554  |
| 昭和五十一年 | 30,495  | 161,551 | 24,666  |
| 昭和五十三年 | 31,180  | 158,652 | 24,902  |
| 昭和五十五年 | 30,923  | 156,601 | 25,293  |
| 昭和五十七年 | 32,781  | 152,621 | 25,165  |
| 昭和五十九年 | 31,406  | 151,754 | 25,362  |

図例： 山形市域の「15歳未満人口・15歳以上人口・65歳以上人口」の推移。より作成。

山形市域の人口構成 (千人)

| 年度     | 15歳未満人口 | 15歳以上人口 | 65歳以上人口 |
|--------|---------|---------|---------|
| 昭和三十一年 | 34,800  | 176,030 | 24,880  |
| 昭和三十三年 | 34,832  | 177,528 | 24,915  |
| 昭和三十五年 | 34,432  | 176,678 | 24,937  |
| 昭和三十七年 | 33,910  | 175,680 | 24,809  |
| 昭和三十九年 |         |         |         |

① 1960～70年代以降、郊外住宅開発による中心市街地の夜間人口の減少→防災・防災体制の弱体化

② 2016年11月、上二之町に外資系企業の進出、2020年に高級ホテルの開業予定  
→観光事業による地域経済の発展にともなう問題の発生

写真33 上二之町並保存区域 写真35 上二之町大町会保存区域 写真36 上二之町の高級ホテル

(4) 屋台維持費の問題

①江戸時代・屋台講と町組間の金融ネットワーク

② 1951 (昭和26) 年・高山市から補助金交付の開始

③ 1964 (昭和39) 年・国50%、県10%、市30%、屋台所有者 (屋台組) 10%

写真39 下三之町の宝珠台 写真40 下三之町の仙人台 写真41 高山祭屋台会館内：秋の(町屋)の屋台一覧 (いんかん費)

① 2つの重伝建に差異・下一之町～下三之町、大新町 ② 重伝建周辺の商店街の衰微・空き家問題

写真43 下一之町の板橋付近 写真44・45 国分寺通り第三商店街 (塩屋本雲君) 写真46 本町2丁目商店街

写真47・48 上三之町 写真49・50 二十四日市 本町2丁目

写真51 本町2丁目商店街

1970年代以降に転換

自治体  
商工会議所  
諸組合

戦後から現在  
旦那家 (小)

明治期からの現在  
旦那家 (中)

江戸期からの戦前期  
旦那家 (大)

三町伝統的建造物群保存地区  
戦後以降酒造業・木工家具産業等諸産業  
→現在の観光資源を創出

戦後に衰退する旦那家  
下二之町大新町伝統的  
建造物群保存地区  
高山祭以外に展開地  
商店街を含め課題の地域

特異な城下町：外縁大名の金森藩  
1892（元禄5）年以降：天領（徳川幕府領）

**山梨県甲府市**

山梨・温泉地などの観光地の中継地点  
ビジネスの出張拠点

史跡  
甲府城跡  
武田神社

現代  
宝石の街  
フルーツ  
フルナー

明治開港以降  
製糸業と呉服人物商  
水晶・印刷・甲州ワイン

江戸期  
両袴・呉服類・塩・魚商  
幕末期に生糸商

山梨とにも特なる城下町  
甲府：甲府御用家・大洞  
松江：外堀⇒東堀  
(越前松平家)  
高山市と同じ歴史的要件  
(日本海との間接もあり)

城下町の人 (商人) 町  
から戦前・戦後期に  
大商店街に形成  
平成期に商店街の衰微

**島根県松江市**

出雲市・松江市  
(隠岐・石見・島根)の  
広域観光の拠点

国定・史跡  
松江城

現代  
和菓子の街  
海産物・シジミ  
蕎麦・日本酒

明治開港以降  
明・琉球人参  
海産物・和菓子

江戸期  
本町・呉・和紙類  
石材・高麗人参・海産物  
和菓子

→ 1970年代から観光地として積極的に活動（形成）…図1  
→ 江戸時代から江戸景業の存在と格差意識の転換 …図2と図3

(2) 高山市のまち・ひと・しごと創生総合戦略

- ① 飛騨高山にのびを呼び込む・魅力ある観光地づくりの推進
- ② 飛騨高山にモノを売り込む・国内外への販売戦略の推進
- ③ 住みやすく働きやすい飛騨高山をつくる・歴史・文化の保存や広域連携の推進

(3) 国際親親都市において種々の問題が生じている

- 高山市（地方都市）でも観光振興・発展によってメリットとデメリットがある

**※来年度：広域観光連携と下呂市、飛騨市、白川村等との比較**  
**(keyword)**

## 自律型移動ロボットによる稚内市の地域情報資源収集・蓄積・提供システム構築プロジェクト

コミュニケーション学科 柊和佑・学部生

## まちがなくなる

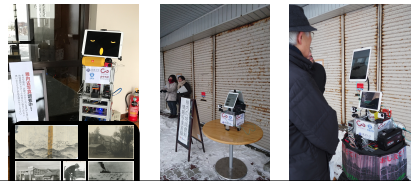
- ・ まちが消えていくことは必然
- ・ まちがなくなって困るのは誰か？  
「この研究を始めるきっかけ」  
研究者を相手にしたシステムなら作ることはできるのでは？
- ・ 地域住民だろうか→実は研究者ではないか？
- ・ 50年後に研究者に役立つことを行いたい  
＝まちのデジタル化

## だから、まちのデジタル化

- ・ インターネット＋デジタルコンテンツ
- ・ デジタル写真・デジタル動画・デジタル地図・デジタル発言記録・デジタルな方言辞書、などなど
- ・ 今後も増えていくインターネットで閲覧できるデジタルコンテンツは増えていく
- ・ 3Dプリンタなども使える日が来るかも
- ・ デジタルコンテンツの複合体としてまちを作り直したい

## まずは、まちでの情報収集

- ・ まちをデジタル化するのはすごく大変
- ・ その時代の旅行者・住人に「喜んで」情報を出してもらおう  
＝持続可能&地域住民がアップグレードできる地域情報の収集手法が必要



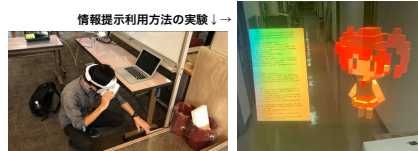
## 収集にはインセンティブがいる

- ・ ロボットによる「楽しさ」＋地図による「交流」  
＝写真収集タスクのインセンティブ



## 集めた”まち”の利用

- ・ 利用に関してはアーカイブのデータを利用してコンテンツを作るような「プロ」を想定
- ・ メタデータを濃密にすることで様々な「プロ」に対応する



## 利用のためには準備がいる

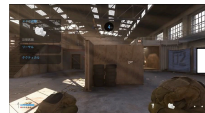
- ・実験は“面白かった”が、そのための準備はそれなりだった
- ・専用の写真を撮影して、機械に入れて（プログラムして）調整→自動化は可能だが、まだお手軽ではない



## 集めたまちの検索

- ・集まる“まち”の形式は多様  
＝テキスト、音声、静止画、動画、3D、2D・・・
- ・従来の検索では探しきれない（文字にしようすると多すぎる）  
→全部テキストなら良いのでは？

情報量が多すぎる動画（ゲーム）への  
アノテーション利用分析！



動画を見る際に必要な情報！

| マップ   | KING             |
|-------|------------------|
| ラウンド  | 6ラウンド目           |
| 生存人数  | 自軍：4ポイント敵軍：1ポイント |
| 自身の体力 | 自軍：2人敵軍：2人       |
| 敵の体力  | 100              |
| 敵の体力  | 100              |
| 敵の体力  | 敵A：100           |
| 敵の体力  | 敵B：100(合計：200)   |
| 敵の体力  | 敵C：100           |
| 敵の体力  | 敵D：100           |
| 敵の体力  | 敵E：100           |
| 敵の体力  | 敵F：100           |
| 敵の体力  | 敵G：100           |
| 敵の体力  | 敵H：100           |
| 敵の体力  | 敵I：100           |
| 敵の体力  | 敵J：100           |
| 敵の体力  | 敵K：100           |
| 敵の体力  | 敵L：100           |
| 敵の体力  | 敵M：100           |
| 敵の体力  | 敵N：100           |
| 敵の体力  | 敵O：100           |
| 敵の体力  | 敵P：100           |
| 敵の体力  | 敵Q：100           |
| 敵の体力  | 敵R：100           |
| 敵の体力  | 敵S：100           |
| 敵の体力  | 敵T：100           |
| 敵の体力  | 敵U：100           |
| 敵の体力  | 敵V：100           |
| 敵の体力  | 敵W：100           |
| 敵の体力  | 敵X：100           |
| 敵の体力  | 敵Y：100           |
| 敵の体力  | 敵Z：100           |

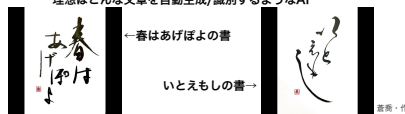
抽出

意味もわからない

## ”まち”の検索にも準備がいる

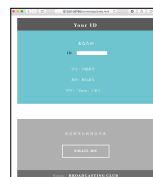
- ・さらなる地域辞書の必要性
- ・地域語彙は時期や時代＝使う人の世代によって異なる  
→多様な語彙を扱う仕組みがないと検索できない
- ・会話文から地域語彙を抽出するAIの構築に着手

理想はこんな文章を自動生成/識別するようなAI



## ”まち”動画の収集

- ・コミュニケーション学科はドキュメンタリー撮影が得意  
→動画の蓄積・検索の仕組みがあるのか調査
- ・結論：なかったため、**収集蓄積システム構築に着手**



撮影した素材の収集システム（試作）

## 動画に積もる問題

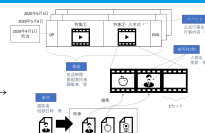
- ・経験の有無によるクオリティの問題

撮影経験の有無によって動画に集めるものの比較実験：お題「商店街の様子を30秒」  
両者とも集めての場所・角度とも揃っている場所・季節を揃えて比較をおこなった



- ・複雑な編集段階の  
動画関係

4月発表予定の予稿より  
「本システムが扱う動画の構成図」→



## デジタルなまちの保存 進行中

- ・そもそも消えていく“まち”の保存が目的  
→自治体ですら消えていく時代で“誰が”保存するのか
- ・震災アーカイブは予算切れて廃止されていくものが多い  
→ブロックチェーンを用いた分散管理手法の検討開始
- ・アーカイブの教育利用（人の頭に保存）の検討開始  
→震災アーカイブ関係機関/大学との連携が進行中



## 持続可能な 観光拠点としての 科学博物館の役割

国際人間学研究所国際関係学専攻  
川井りさ子

### 研究の目的

- 本研究では、現状としてペナンでは、歴史的遺産物の観光を主としており、博物館観光が主流ではないという事例から例として博物館の観光資源について科学博物館での実態を調査する
- 地域振興の重要施策の一つに観光があり、歴史・文化的な「世界遺産」は地域振興の観点でクローズアップされてきている
- 「博物館」の観光資源において、地域振興の施策の内の重要なものとして名所旧跡、遺跡地とともに博物館の存在があげられることから、魅力的な博物館は多くの人を集める重要な観光資源であり、その魅力を発信するものは他ならない博物館の収集資料であるといえる
- これらを踏まえて、「世界遺産の街ペナンにて、持続可能な観光拠点としての科学博物館の役割」を検討する

### 博物館と観光資源



- 観光庁の訪日外国人消費動向調査によれば、訪日外国人旅行者の訪日の動機12位が博物館、美術館が目的のものであり、インバウンド化する博物館の対策としてパンフレット等の多言語化の向上や環境整備等の重要度が上がっているといえる
- それに伴ってか、国内の人気博物館・美術館も東京を中心としたものではなく、1位は広島平和記念資料館、2位が福井県立恐竜博物館と地方の自治体の博物館が大半であり、今後の地域観光資源の保護と磨き上げこそが博物館の役割となると言われている

### 博物館と観光資源



- 観光庁の訪日外国人消費動向調査によれば、訪日外国人旅行者の訪日の動機12位が博物館、美術館が目的のものであり、インバウンド化する博物館の対策としてパンフレット等の多言語化の向上や環境整備等の重要度が上がっているといえる
- それに伴ってか、国内の人気博物館・美術館も東京を中心としたものではなく、1位は広島平和記念資料館、2位が福井県立恐竜博物館と地方の自治体の博物館が大半であり、今後の地域観光資源の保護と磨き上げこそが博物館の役割となると言われている

### るるぶ マレーシア クアラルンプール・ボルネオ (2019年版)



筆者が調べたところ、博物館・美術館に相当する施設は約50件確認できる  
しかしながら、2019年版の日本人向けのガイドブックにはペナン博物館の紹介があるのみであり、科学博物館の紹介は一切ないといえる



マレーシア政府観光局が日本人向けに制作しているこのガイドブックもほぼ同じであり、HPの情報欄にはペナン博物館、孫中山記念館、トロピカル・スパイスガーデン、Entopia、ペナン植物園、Tech Dome Penangの紹介があったが、地図に記載されている博物館施設の紹介はペナン博物館とペナンアートギャラリーのみであった

### ペナンにおける博物館の分布

- ジョージタウンに点在している博物館施設について、特に歴史・アート系の博物館・美術館が多いといえる
- それぞれの位置は近く、1つの訪問後に訪れて訪問できるようなつくりとなっている
- 有るところは中心部の交通の便が良いところにある
- それによりペナン島にある博物館施設はジョージタウン東部に集中している
- しかし、地図を見てみるとジョージタウン以外にも博物館施設は点在しており、一極化しているわけではないことがわかる



### Tech Dome Penang

- 場所：ペナン島のジョージタウンの世界遺産地域に隣接するテナントの中
- 設立：2015年8月19日
- スポンサー：ペナン州政府
- 営業時間：午前10時～午後6時
- 目的：マレーシアの科学リテラシーと技術能力を向上させること、技術学習、アイデアの交換
- 特徴：ペナンで初めてできた科学館。技術や知識を子供や若者に伝えるために特別に作られたプログラムが定期的に実施されている





## CEMACS

- 正式名称: Center for Marine and Coastal Studies
- 場所: ペナン国立公園内のペナン島の北西海岸のテルクラリングに位置している
- 設立: 1991年8月
- 目的: 海洋および沿岸生態系に関連する問題の解決につながる統合的な学際的および総合的な研究を実施する能力を強化すること
- 特徴: 施設内に博物館を有しており、海洋科学、沿岸生態系の研究および大学院研修の実施をしている
- この地域周辺の軟体動物、ゴルゴニアン、サンゴ、棘皮動物、魚類、甲殻類等をコレクションとし、沿岸・海洋生物と海洋・マングローブ植物標本も資料として有している



## Entopia by Penang Butterfly Farm

- 場所: ペナン国立公園の東部
- 設立: 1986年
- 営業時間: 毎日 午前9時～午後6時
- 目的: エントピアでの体験を通して、人々が自然と再び関わるように促すこと
- 特徴: 蝶に興味、関心を持つDavid Gohが創設者であり、熱帯地域で世界初の蝶と昆虫の施設である
- また、館全体で150種以上の動物と200種以上の植物を展示し、500万人以上の地元及び海外からの訪問者が訪れている
- マレーシア政府によって2010年から2011年のマレーシア観光賞にノミネートされており、その他にも多くの賞を受賞し、ペナンで最高の観光地の一つであると称賛されている



## USM MUSEUM

- 場所: マレーシア科学大学内、付属博物館
- 設立: 1971年の人文科学学校の創立と1972年の美術プログラムの導入に関する提案によるもの
- 入館料: 無料
- 目的: 生徒の教育の補完のため
- 特徴: 博物館と美術館の両方の要素を有している



## GALERI ARKEOLOGI

- 場所: マレーシア科学大学内
- 目的: マレーシア先史時代からの考古学に興味を持ってもらうこと
- 特徴: 考古学の博物館であり、手工芸品、宝飾品、武器、狩猟用具のコレクションを有している
- また、考古学ギャラリーでは1987年から現代にかけてのUSMの考古学研究成果が展示されている
- 「考古学観光」と称してパッケージツアーも開催しており、人気である



## 調査結果

- ペナンにある博物館・美術館はアートギャラリーや歴史博物館が主であり、科学博物館の数は数えるほどしかなかった
- ペナン地域住民も授業の一環を除くと博物館にはあまり行くことはないらしく、そもそも歴史的建造物などにも普段の日常生活で行くことはまれだと話していた
- しかしながら、EntopiaやTech Dome Penangなどの博物館の入館料はマレーシア地域住民と観光客などのそれら以外で値段に著しく差があり、地域住民が気軽に訪れることのできる施設として力を入れていることがうかがえる
- 近年は主にインバウンドの訪問客の収集に力を入れている
- それを受けてか、2019年版のるるぶのガイドブックにはペナン博物館の紹介しか載ってなかったが、2020年1月現在ではマレーシア政府観光局のペナンの情報が更新されており、ペナン博物館の他にもアクティビティ枠等でEntopiaやTech Dome Penangの紹介がされている
- ペナン独自の文化を伝えることを主とした博物館施設が多数を占める中で、数の少ない科学博物館が情報サイトの主な見どころとしてピックアップされていることから、観光における科学博物館の割合が増えている

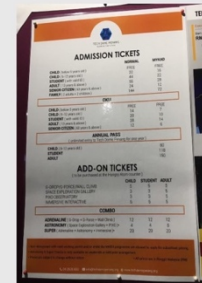
- 入館料の例(Tech Dome Penangの場合):

### マレーシア人以外

- 子供 (5歳未満) ... 無料
- 子供 (5歳から12歳) ... 32
- 学生 (有効なIDを持つ) ... 44
- 大人 (13歳以上) ... 56
- 高齢者 (60歳以上) ... 24
- 家族 (大人2人と子供2人) ... 144

### マレーシア人

- 子供 (5歳未満) ... 無料
- 子供 (5歳から12歳) ... 16
- 学生 (有効なIDを持つ) ... 22
- 大人 (13歳以上) ... 28
- 高齢者 (60歳以上) ... 12
- 家族 (大人2人と子供2人) ... 72



## まとめ

- 「観光における博物館」についての問題意識と重要度について、ペナンプラナカンマンシンなどの地元の歴史的建造物や文化に興味のある観光客に人気の博物館施設の売りは文化や当時の再現性そのものであり、SDGsのゴール11を細分化したターゲットの中には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」というものがあるように歴史博物館や美術館では景観や保護と集客に関する展示についての議論がされている中で科学博物館に関するものは近年になって台頭してきたというのが現状である
- 日本とほぼ変わらない国土にも関わらず、全体の約6割程度が森林におおわれているといった特徴から、観光ガイドブックには国立公園や植物園などの自然系施設紹介が多い
- 「観光地」としてのペナンがこれからも発展していく中で、歴史博物館とはまた違う、国内外問わず学外教育活動の要としての自然保護の重要性や科学リテラシーの育成を担う位置付けとしてこれらからも持続可能な観光拠点といった役割を科学博物館が自覚し促進していかなくてはならない
- これらのことから、主に観光地域づくりを進め、ペナンの博物館の資源化に繋がられるように提言したい。また、それらの資源を地域住民、特にUSMの人にも還元したい

## 参考文献

- <https://tentsuki.jp/information/malaysia/2543/>
- [http://www.tourismmalaysia.or.jp/kihon/kihon\\_b.htm](http://www.tourismmalaysia.or.jp/kihon/kihon_b.htm)
- [http://fjcms.jp/wp-content/uploads/2018/09/vol48\\_no5.pdf](http://fjcms.jp/wp-content/uploads/2018/09/vol48_no5.pdf)
- <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/data.html>
- <https://www.unesco.or.jp/activities/isan/decides/>
- <http://www.techdomepenang.org/>
- <https://cemacs.usm.my/index.php/ms/>
- <https://www.kahaku.go.jp/procedure/press/pdf/181955.pdf#search=%27%E5%9B%BD%E7%AB%88%E7%A7%91%E5%AD%A6%E5%8D%9A%E7%89%A9%E9%A4%A8+%E6%8C%81%E7%B6%9A%E5%8F%AF%E8%83%BD%E3%81%AA%E8%A6%B3%E5%85%89%27>
- 中村浩・青木豊編著 『観光資源としての博物館』 芙蓉書房出版 2016 : 66-70, 166-168
- 林良博『日本の大学と科学系博物館のゆくえ』『結晶』中部大学 2019 : 269-272

## Sustainable Tourism in Malaysia 研究プロジェクト：自由懇談（部分）

- A 氏 （中部大学アクティブアゲインカレッジ生） マレーシアは行ったことがあります。去年の10月だったかな。
- 学生 暖かくていいところですね。
- A 氏 暖かいというか、暑かった。観光でペナンへ行ってきました。
- 学生 私は主に研究が博物館系なので、ちょっと博物館のことしかやっていないんですが。あまり観光地には行ってなくて。
- A 氏 観光地へ行っていないの。
- 学生 前を通ったりはしたんですけど、中には入ってなくて、博物館系の施設ばかりに行っていました。一番最初は旅行で行って、現地の学生にジョージタウンとかを案内してもらったりしたんですけど、2回目、3回目はこちらの研究で行かせてもらったので。
- A 氏 観光というのが研究になるんだね。研究になるとは全然思わなかったから。非常に楽しいね。また行きたい。
- 学生 そうですね。
- A 氏 私は中国も。西安から兵馬俑に行って、莫高窟へ行って、敦煌へ行って。
- 学生 中国は、内モンゴルにだけ行ったことがあります。
- A 氏 私も現役時代は、海外なんて仕事で行っただけで、観光なんて一切したことなかった。今やっと、現役を離れて、一緒に行ってくれる人がいるから。
- 学生 大学の1年ぐらいだったか、科学系の博物館へ行きまして。
- A 氏 オランウータンのいるところがあるでしょう。
- 学生 私は航空系をやっているんで、動物系のところは行っていないんですけど、後輩はチョウについて研究しています。
- A 氏 オランウータン・アイランドって。
- 学生 マレーシアの本土にも何かありますよね、そういう動物園的なものが。行ったことはないんですけども。
- A 氏 放し飼いで、人間が檻の中に入っているんです。オランウータンが檻の向こう側にいる。なかなかいいでしょう。この人は飼育員さんで、外にいます。ここは、お寺みたいな、洞窟みたいな。
- 学生 これもペナンですか。
- A 氏 ペナンなのかな。よくわからん。グーグルはいいね。写真を撮れば、何月何日にどこにいたかが全部わかる。
- 学生 ペラ州ですね。本土のほう。
- A 氏 いろいろおいしいものも食べてきたし。また行きたいですね。島のほうはどうなの。
- 学生 ボルネオですか。私はちょっとペナンのほうしか研究していないので、実は本土のほうもあまり詳しくなかったりするんです。すみません。
- A 氏 では、またよろしく願います。

財部 私、財部と申します。

川村 中高研（中部高等学術研究所）の川村（真也）です。

財部 私、中高研にいたの。

川村 GIS でお世話になっていて、ESD とつなげるような仕事をしています、専門は地理なんです。

財部 実は私は科学史で、博物館と観光というと大体文系のほうになってしまうので、そうじゃない何かないかなということ。

川村 エントピアというチョウの博物館があって、私、行ったことがあるんです。

財部 私の院生がエントピアで研究しているんですよ。ちょうど今日来ていなくて。

川村 今もいるのかわからないんですけど、僕の知り合いが働いていたんです。マレーシア人なんですけど、中国系で。

財部 何であっちの理工系がおもしろいかというと、ロケットの展示を見てきて、どうだったと聞いたら、ロケット開発ということでアメリカとロシアかと思っていたら、違う。ロケットはみんな中国のものだったと言うわけです。ペナンは華人も多いし、企業が出資するから、ロケット自体も中国のロケットが展示されているというのがおもしろくて。

川村 なるほど。そうですね。日本の教科書で宇宙開発で習わない国のものが。

財部 そう。もう今現在は、やはり中国。

川村 僕がたまたま行ったときは、歴史博物館が改装中で入れなかったんです。それで、エントピアと、いろいろモスクの近くの施設とかで、10 日間ぐらいそこで。

財部 そういう意味では、今日言わなかったんですけど、今度報告書をつくらしくて。例えば、自分はまだ行ってないんだけど、2011 年の後に、ペナンはもともと地震もないし津波もあまりなかったの、すごい災害を受けて初めて、それに関する資料館（博物館）ができたそうです。そういう情報を共有しておきたいなど。

川村 災害文化とか、やっぱりそういうところでものすごく重要な知見になると思います。ペナンは1 回しか行ったことないんですけど、結構小さい島にあらゆるものがすごく詰まっているんですね。

財部 だけど、さっきちょっと私が紹介したように、詰まっていますが、大体の人は本当にあの島の一部しか行かないんです。ジョージタウンあたり。

川村 無料の観光バスが走っているエリアだけですよね。

財部 大体そうなんです。なので、それをどうにかもうちょっと観光資源にしていかないと。誰も取りこぼさないという形なので、そういう意味では、本当はもっともっとシェアできる知識とか産業文化がある。先生もぜひ。だけどタイが多いんですよね。

川村 うちのほうはタイの災害とかも。あと、人口のほうのプロジェクトとかですね。所長ご本人は東南アジアでいきたいんでしょうけど。

財部 そうなんです。教育も。

川村 ESD・SDGs センターなので、やはり ESD 関係のイベントのこともやっていて。ESD 拠点というのがあって、一応中部大学が事務局をしているので。

財部 この前の土曜日の中部 ESD 拠点「SDGs フォーラム 2020」。あれはすごいメンバーですよ。どうしてあんなことが可能なのかとびっくりしました。そこに院生のタパさんもいて。

川村 そうですね。発表を。サステナ政策塾の塾生として、年間12回ぐらい講座があった上で、SDGsを学んでいただいているという形でおこなっているんです。彼女の場合は、もう完全に博士論文のテーマをそのまま持ってきちゃったので、あまりこの地域のSDGsとの因果はないんですけど、17のゴールに照らし合わせて地域のステークホルダーの人をスカウトして、あのイベントをやっています。

財部 そういう意味では、キャッチフレーズに掲げた「地域の光を見つける」というのは、多分地域の人だけだとちょっとわからないと思うんですね。私たちの研究はまだ、学生や院生が研究しに行っているところですが。

川村 普段はそちらをやっていますので。

財部 古澤（礼太）さん（中部高等学術研究所、国際ESD・SDGsセンター准教授）は。

川村 私、古澤さんの下で一緒にやっているんです。

財部 あれをよくやりましたね。松浦（晃一郎）さん（前ユネスコ事務局長）まで出ておられて。

川村 松浦先生は2年連続らしいです。あとは、古澤先生のこれまでの活動で培われた人脈というか、関係性みたいな形で。私はまだ2年目なので。

財部 本当にお目にかかるチャンスがなかった。私は科学史ということで理系と文系の接続をみたいということで本当に勉強中なので、また情報交換よろしくお願いします。

川村 これを機に、よろしくお願いします。

学生 自分の修士論文が科学博物館における教育についてなので、いろいろご縁があってマレーシアのペナンのほうに研究で行かせてもらえるということから、ペナンの科学博物館について観光と絡めて研究をしていったという。

加藤佑輝（王春工業）これは、何で博物館にターゲットを当てたの。

学生 飛行機が好きなんです。ここは航空博物館なんです。

加藤 美術館や博物館って、なぜターゲットがそっちになるのかなと思ったんだけど。こういう報告会のとき、何でそっちに焦点が行くんだろうという、そこが一番シンプルな疑問。みんなどこでもそうだけど、観光の場所とか、風光明媚なところとか、物がおいしいところとか、その地方地方の歴史とか、古い建造物とか、そっちに展開していくんだけど、今回はミュージアムが中心。同じことなんだろうけれども、表現の仕方としてそっちに焦点が当たっていたから、そのアプローチはどこから入っていったのかなというのが正直なところ。

学生 原点は飛行機が好きだというのがあって。飛行機の博物館を見て、財部先生が航空博物館があるって言っていたということから、じゃあ航空博物館って。

加藤 そこから広がっていったんだ。

学生 航空博物館から大きく広げて科学博物館。

加藤 この前の中間報告のときに、幾つかの博物館があって、入場料がどうで云々という発表をされていましたよね。もうちょっと深掘りはこれからみたいな話を。

財部 深掘りは、やや無念なんだよね。だけれども、私が行っていないところへいっぱい行ってきています。私が特に見てほしいのは、さっき商業化されない情報が縮小すると言いましたが、『るぶ』とかにはお金になるところしか出てこないの、つくられた観光資源を



見ているだけなんです。だから、いかにこれらが観光においても重要であるかを知ってもらいたい。

学生 ホームページのほうだと、マレーシア政府観光局がそこにあげている博物館だとか、博物館じゃないようなところも載っていたんですけど、日本のガイドブックはやはりアクティビティ系のものを中心に紹介をしている。2020年版の『るるぶ』は見えていないので、わからないんですけど、2019年版のほうだと、やっぱりマリンアクティビティとかショッピングを全面に押し出しているのです。



### I.はじめに

中国内モンゴル自治区の草原観光と「ゲルキャンプ」の存在

- ▶ 草原観光：自然景観+民族観光（モンゴル族）
- ▶ 拠点としての「ゲルキャンプ」

モンゴル族の移動式住居「ゲル」を用いた観光施設で現在の草原観光の拠点であるが、その全体像ははっきりしない部分も多い。

\* 「外」モンゴル=モンゴル国にも存在。

⇒今回はこの「ゲルキャンプ」の特性について、内モンゴル最北部・フルンボイル市における現地調査の結果に基づいて報告。



### II.草原観光の背景と「ゲルキャンプ」

内モンゴル自治区の草原観光

- ▶ 1978年頃から開始か。
- ▶ 本来は外部からのゲスト（VIP、政治家、外国人）を案内して草原の暮らしやモンゴル族の文化を見せることから出発。
- ▶ モンゴル族の食文化、乗馬、モンゴル相撲、民族音楽、ゲル宿泊などの体験をさせる。

ゲルキャンプの存在

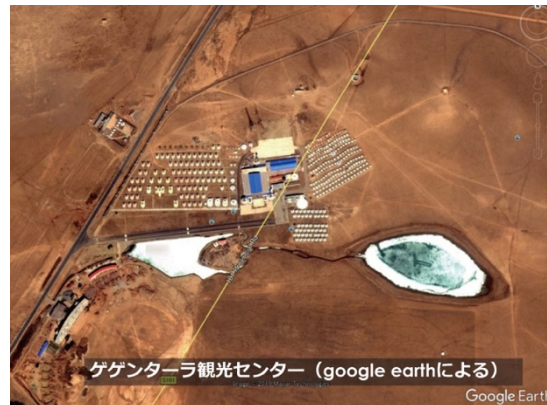
- ▶ ゲルキャンプ=宿泊用ゲル+馬場+食堂・イベント用大型ゲル+広場+メインの建築物等
- ▶ 大規模なものから内モンゴルの牧畜民の農場内に設置するかなり小規模のものまで。







格根塔拉（ゲゲンタラ）草原の大規模なゲルキャンプ



ゲゲンタラ観光センター（google earthによる）

Google Earth



シラムレン草原の中規模ゲルキャンプ



シラムレン草原の小規模ゲルキャンプ（冬）

Google Earth

### Ⅲ.内モンゴル遠隔地の「ゲルキャンプ」： フルンボイル市新バルグ右旗の事例

- ▶ フルンボイル市周辺：近年草原観光が行われるようになった地域。
- ▶ 中小規模のゲルキャンプが多く、開業年も2010年以降と新しい。訪問客は北京など大都市から自家用車で来訪し、草原観光をして1泊で帰るケースが多い。
- ▶ 経営者は地元で牧畜業を営む者が多く、家畜の世話が比較的少ない夏（6-9月）だけサイドビジネス的に行う。「冬は忙しい」
- ▶ 自然環境や生業のサイクルに比較的うまく組み込んでいるのではないか。



フルンボイル草原の小規模ゲルキャンプ

Google Earth



フルンボイル草原の小規模ゲルキャンプ

### Ⅳ.まとめ

中国内モンゴル自治区の「ゲルキャンプ」の特性

- ▶ 「固定ゲル」を用いた大規模なゲルキャンプもあり。⇒排水などによる草原環境破壊との批判も。  
\* 「退牧還草」政策と「生態移民」
- ▶ モンゴル高原における草原観光のスタンダード：もしなければ観光自体が困難？
- ▶ 季節的変動の問題：どれだけの施設を作ってもせいぜい6-10月程度。牧畜民が暇な時期に運営可能。現金収入のあるサイドビジネスか。
- ▶ 地域的差異、社会経済的背景、草原観光普及の経緯など、顧慮すべき事項やテーマが多く存在するか。

## 内モンゴルにおける草原観光の季節的変動研究：自由懇談（部分）

澁谷 教えてください。日本で出た論文だとこういうのを「ゲルキャンプ」って言っているんだけど、現地ではどうですか。

フフムチル そうは呼ばないです。

澁谷 何か言い方がありますか。

フフムチル 中国語で「旅游点」、「観光スポット」と。

澁谷 「観光地」と同じような意味で。

フフムチル そうです。

澁谷 実は院生のセレンメンさんは研究中に困って、「ゲルキャンプってそもそも何？」みたいな感じになったんです。それで、グーグルアースを使ったんです。グーグルアースならゲルキャンプがどんなものか画像で出る。これ（p.57 右列上から2番目のスライド参照）なんかおもしろくて、冬で多分上のテントをとっちゃっている。そうすると、このゲルは固定しているというのがわかるんです。ただ、これを全部見つけて歩くわけにいけないので、部分的にしかわかりませんけど。

B氏 （中部大学オープンカレッジ受講生）これは、一般的には何泊ぐらいするんですか。

澁谷 1泊でしょうね。

B氏 そうすると、例えば、海外からのお客さんが日本で旅館に1泊するだけで、あとは通常の国際水準のホテルに泊まるというのと同じように考えればいいんですかね。モンゴル体験として1泊するというのは、日本体験として日本の旅館でふすまだとか床の間を見るみたいな、そういう感じなんですか。

澁谷 インバウンドならそうでしょうね。近いと思います。でも、多分中国の人が遊びに来てても1泊ですよ。

セレンメン ほとんど1泊です。

B氏 アイスランドなんかでは、氷でできたホテルがあるじゃないですか。体験ということでは非常に似ていると思うんですよ。

澁谷 そうですね。1泊、話の種に泊まる。

B氏 ですよ。けども、一方でデラックス化しているという話を先ほど聞いたから、それは連泊とか、もっと快適に何泊かしてもらおうと考えているのかななんてね。

澁谷 あまりそういうふうには見えないです。シャワーとかあるんだけど、やっぱり1泊で帰っちゃうんじゃないかなと。

B氏 イメージとしては、テントだと、簡易施設というか、メイクシフトの施設というふうに感じ取っちゃいますよね。

澁谷 そうかもしれないですね。

B氏 私は現役のとき旅行会社にずっといたんですけども、こういう観光は、まず中国の一部というか、中国ジャンルでしか扱わない。マニアックな人が行くというだけで。中国旅行を専門に扱っている会社がやるとか。あるいは、中国で問題が起こったときに、あそこに行けないから周辺のところに行き先を変更するとき使うという感じで。例えば、日中旅行



社とか、日中平和観光とか、ああいう会社は扱っていましたが、メジャーのパッケージ会社、例えば JAL パックとかルックとかパノラマとか、そういうところはやらないですよ。だから、パッケージには乗らないというところが、やっぱりちょっと目に触れにくいところかなと。

澁谷 中国国内でのパッケージツアーで使うゲルキャンプは、この写真 (p.57 左列一番上のスライド参照) のように、センターをつくっちゃって、周りに小さいゲルをたくさんつくる。こんな感じです。

B 氏 それは西洋式のホテルのタイムシェアリングみたいな感じで、ホテルがあって、長期滞在のものがあって、真ん中にレストランエリアをつくったり、アミューズメントセンターをつくったりという、多分西側の人の考え方ですね。最初にそこへ着いてオリエンテーションをやって、そして、いろんなタイプの施設へ行かせるとか、そういう一つのカントリースタイルの考え方じゃないかと思うんですけどね。わかりませんが、ただ、そういうのを参考にしている可能性はあるような気がします。

澁谷 逆に、自然にできた感じのゲルキャンプは、写真で見ると多分こういう (p.57 左列一番下のスライド参照) 感じだと思うんですね。本当はもともと牧場があって、その周りにゲルをたくさん設置してつくってしまうんじゃないかと思うんです。これだと、もう今のお話でいうところのパッケージ旅行には合わないような感じですけど。

B 氏 何かの旗のもとに、みたいな感じで。しばらくここで住むぞみたいな、そういう歴史とか何かわかるといいですね。「旅」のもとには「旗」という意味だと言われていますからね。だから、マニアックな人とか旅行会社の人たちは興味を持って、一旦「いいね」と言うかもしれないけど、一般の人たちがついてこない。

澁谷 なるほど。実際にゲルキャンプにも泊まってみたんですけど、環境のほうもちょっと厳しいところがあります。マニアックな人じゃないと無理かもしれません。

B 氏 それと、周りに何も無いという感じはいいんだけど、これはなかなか日本人には耐えられないところがありますよね。とにかく次から次へと、劇場で見せる、何か食べに行く、観光をすると次々にやっていかないと、みんな落ちつかないというところがあるのかもしれない。

澁谷 中国内のパッケージツアーではあるんですね。

セレンメン あります。

澁谷 ただ、日本からはちょっと、個人旅行しかない。

B 氏 この研究とサステナブルというところがよくわからなかったんですけども、これをどういうふうにサステナブルに扱っていくのか。

澁谷 今思っているのは、大きなゲルキャンプをつくるパターンは批判が多いんです。廃水がたくさん出したり、自家用車とかがたくさん来て周囲の草原を踏みつけていったりするんですが、この小さなゲルキャンプ (p.57 左列一番下のスライド参照) なら大丈夫じゃないか。しかも夏しか営業しないんですね。

B 氏 そうすると、季節性が問題ですね。

澁谷 特に現地調査をした場所は、すごく北のほうで、寒いので夏も長くは営業できないんです。

セレンメン 寒いときにはマイナス 30~40 度ぐらいですから、厳しい感じで。

- 澁谷 そうすると、サイドビジネス的に小規模にやれば、草原はもつんじゃないかと思います。要するに、長く続けていくために、増やさない、無理をしない、やや抑えるのが良いという考え方をしているんです。
- B 氏 言葉としてサステナブルは美しいんだけど、ビジネスとしてやっていくと、それならあと半年どうするんですかとか。
- 澁谷 半年は牧畜をして、それはそれで収入があるので。
- B 氏 だけど、一方でサービス業をやりながら、もう一方でものづくりをやるというのは、そういうことが急にできるんですか。人が変わるんですか。
- 澁谷 いや、同じ人がやります。
- セレンメン 自分の牧場でやっていますから。
- 澁谷 同じ人がサイドビジネス的に夏シーズンだけこのお仕事をします。
- B 氏 なるほどね。それはなかなか転換が大変ですね。リーダーがよくて、外との交渉をちゃんとやってくれるとか。
- 澁谷 そこはおもしろいですね。どういうふうに切って、どういうふうにやっているのか。
- B 氏 小規模だと、まず集客が難しいので、それは何かリーダー的な、マーケティングとか、西洋とつながるとか、お客さんとつながることができる人。それから、サービスレベルが一定に保てるような教育ができる人。それから、オプションルツアーだとかそういったことがきちんとオーガナイズできる人。それから、精算に至るまで、お金の流れがうまくつながっていくところですね。そして、戻していく。なおかつ、衛生面だとか、いわゆる来るお客さんの水準にヒットできるようなことをやっていかなくちゃいけない。
- 澁谷 こういう大規模なゲルキャンプ (p.57 左列一番上のスライド参照) だと、中国国内の方が来ると、人によってはずっと夜にマージャンして騒いでいるとか、客の方もあまり質が良くないなという感じがあります。わざわざこの辺境の小さなゲルキャンプ (p.57 左列一番下のスライド参照) に行く人というのは、それなりのこだわりがあって多少不便でもちょっと覚悟して行っているような感じがあるなど。
- B 氏 そうでしょうね。それと、やっぱり着いたときにある程度、教育すると言ったらおかしいんだけど、お客さんに、ここまではできます、ここからはできませんとかということを、ちゃんとガイドラインとかエチケットとか、そういうのをきちんとオリエンテーションするんでしょうね。でも、やり方によってはおもしろいですよね。なかなか時間がかかるけど、おもしろそうです。
- 澁谷 ありがとうございます。どうですか。お客さんは来ているんですか。
- セレンメン はい、そうですね。
- 澁谷 で、もうかっているのかな。それなりに現金収入がちょっとあればいいのかな。
- B 氏 例えば、イギリスなんかの B&B、ベッド&ブレイクファストというのは、大きな牧場を持っているお金持ちの奥さんが余っている部屋を使ってアルバイトでやっているところが、コッツウォルズとかいろんなところにある。皆さん留学されていてご存じでしょうけれども、奥さんがやっていて、名前も聞かなくて、お金だけ何ポンド、と。全然ホテルと変わらないじゃないかと思うんだけど、娘がロンドンへ行っちゃって部屋が空いているからアルバイトでやっていますみたいな。ふと見たら馬が 10 匹ぐらいいて、すごいお金持

ちだなど。入り口から5分ぐらいかかるころの奥に家屋があるとか、そういう人たちは、要するに奥さんの片手間でやっているから、全然問題ないみたいですけどね。

澁谷 片手間のやつは関心あります。おもしろいですね。

B氏 だけど、片手間というと、お客さんの要求度によってはうるさいですから、難しさがありますよね。

澁谷 彼女がこれで卒業しちゃうので、この後そのあたりも知りたいのですが、現地調査どうしようという感じなんです。

B氏 エコにこだわっちゃうのか、こだわらないのかというところが、ものすごく分かれ道ですね。ハンディキャップの人をどうするのかというのと同じで。あれは旅行会社にとっては永遠の課題です。

澁谷 旅行会社は一応入っているんですか。

セレンメン はい。現地調査によると、こちらに来られる観光客は、大体旅行会社を通して、直接この人たちに連絡してこない観光客が一番多いので。

澁谷 自分で車で来るの。

セレンメン 自分で車で来る人も結構いるんですけど。

B氏 飛行場からのアクセスをどうするか、中でどうやってオプションを回すとか、ガイドイングをどうするか、いろんな仕組みがある程度ないと。それを半年だけやるというのは、現実的には結構しんどいですよ。

澁谷 どのぐらいそれがしんどいのかというのが、こちらはいまいちイメージが湧いていなくて。彼女の修士論文発表会のときにも、ほかの先生から質問があつて、経済的にどうなんだと。夏にちょっとだけでも現金収入があればいいレベルなのか、あるいは、かなり一生懸命やらなくちゃいけないのか。

B氏 岐阜の鵜飼いが半年なんですよ。あれは名前を売るためにやっているから、補助金がついているんですけども。

澁谷 なるほど。そういうこともあるわけですね。

B氏 それと、オーセンティシティというか、さっき先生がおっしゃっていたあの問題は、また文化の問題だから。伝統とか。

澁谷 オーセンティシティを追求し出すと、この辺境のゲルキャンプ (p.57 左列一番下のスライド参照) に来るんだと思うんですね。この大きな観光センターになっているゲルキャンプ (p.57 左列一番上のスライド参照) じゃなくてね。

B氏 そうそう。そういうことですよね。だから、多少の変化はあったとしても、やっぱり地元の年寄りが納得するのがオーセンティシティだと思うので、そういうことを考えるといいのかなと思います。余計なことを言いまして。

澁谷 いえいえ、ありがとうございました。

## 内モンゴル自治区における観光

### —草原観光をこえて—



KN19001 大岩 楊

## 背景

- 内モンゴル自治区で観光といえば草原観光を思い浮かべるかもしれない。実際に『地球の歩き方』2019～2020年版を見てみると最初の見開きページには草原観光が出てくる。
- 理由の1つとして、中国には大草原が6つあり、とりわけ内モンゴル自治区には大草原が2つある。
- 1つ目にフレンボイル草原である。世界三大草原の1つ、世界で最も優良品質の草原、モンゴル族の発祥地と言われる。3000あまりの河、500以上の湖が流れており、壮大な草原が広がっている。また、内モンゴルの主な牧畜区であり、有名な産物は三河馬、三河牛である。
- 2つ目にシリンゴル草原である。成吉思汗(チンギスハン)が偉業を収めた三大古戦場であり、中国で唯一の国際生物圏に選ばれた草原自然保護区である。世界でも自然保護状態が最も良い温帯の原生草原で、湿地草原や荒れ果てた土漠の草原、砂地牧草地帯などの様々な種類の草原がある中国で最も代表的な温帯草原である。
- このように近くに代表的な2つの大草原があるため草原観光が有名である。
- また、古代モンゴル帝国の創始者・チンギスハンの故郷がフレンボイル草原ということもあり、モンゴル学、歴史学が盛んである。そのため内モンゴル自治区にあるフフホトには内モンゴルに関する歴史、文化の博物館が多く存在する。

## 目的

- 現在、内モンゴル自治区では草原観光が主な観光資源の大部分を占めている。しかし、草原観光以外にも他の魅力も存在するのではないかと考える。
- フフホト市内ではモンゴル帝国の歴史や文化に関する研究が盛んに行われている。そのため歴史博物館などの施設はとても充実している。草原観光以外の観光名所として、Dazhao Historic Cultural Tourism Zoneというところもあり、フフホト最初の寺院として人気である。
- あまり知られていないかもしれないが、内モンゴル自治区では化石の発掘が進んでおり、多く発見されている。また、内蒙古博物院では、発見された化石の展示もされている。
- 2019年9月、短い期間であったがフフホトを訪れたため、その際に訪問した博物館をいくつか紹介していく。



Dazhao Historic Cultural Tourism Zone

## 内蒙古博物院 Inner Mongolia Museum

- 開館時間：09:00～17:00 (入館は16:00まで) ただし、月曜日は閉館。
- 開館年：1957年5月1日
- 住所：内モンゴル自治区フフホト市新城区新華東街27号

中国の少数民族地区で最も早い時期に創設された博物館でもある。内蒙古博物院には6万余の文物が収蔵されており、そのなかには、各時代のいろいろな古生物化石の標本があり、世界で注目されている。中国北部の遊牧民族の文物が重点的に収蔵されており、少数民族の文物は全国のトップと言える。展示面積は3500平方メートル、さまざまな文物と化石の標本が2600余点も展示されている。「内蒙古の古生物」、「内蒙古の歴史文物」、「内蒙古の民族文物」、「内蒙古の革命文物」など四つの展示室がある。



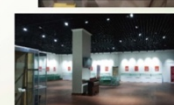
## 内蒙古博物院 Inner Mongolia Museum



## 内蒙古大学民族博物館 Inner Mongolia University Ethnography Museum

- 設立年：2004年8月
- 住所：内モンゴル自治区フフホト市賽罕区海爾海西巷

博物館には3つの展示室があり、そのうち2階の展示室「馬背の民族」が主な展示室である。1階の「毡棚」展示室には、伝統的なゲル、生活に使う道具などを展示し、遊牧民の牧畜、生活が見ることが出来る。2階の「馬背の民族」には青銅のナイフ、龍の形をした銅のフイグラス、絶妙な黄色のサテンの刺繍入り小袋、金の帯飾り、元王朝の紙幣が展示されている。3階の「移動式展示場」は2つに分かれており、片方の「歴史展示場」は主に北方民族の歴史に関連する発掘された文化遺物を展示している。(現在は3階は伝統文化教育機器と新中国チケット展が開催されている)



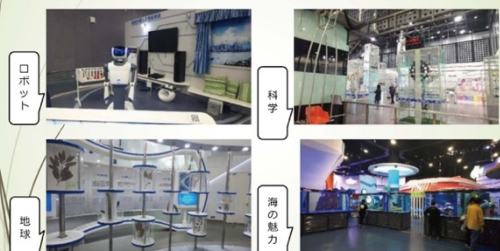
## 内蒙古科技馆 Inner Mongolia Science and Technology Museum

- 開館時間：09:30～17:00 火曜日から日曜日閉館。
- 開館年：1983年12月5日
- 住所：内モンゴル自治区フフホト市新華大街

内モンゴル科技馆は、1792.3平方メートルの面積と7876平方メートルの建築面積がある。館内にはコンピューター室、音声室、9つの教室、小さな会議室、多機能の講堂があり、建物全体は同時に2,000人を収容できる。展示室はそれぞれ分かれており、「科学」、「海の魅力」、「地球」、「ロボット工学」などがある。「地球」のブースでは、モンゴル医学や身体について学ぶことが出来る。また、「海の魅力」では内陸で見るのが珍しい海の魚や、カメラが展示されている。



## 内蒙古科技馆 Inner Mongolia Science and Technology Museum





中部大学国際人間学研究所「持続可能な観光」を  
めざす地域研究プロジェクト群

## 春日井市姉妹都市ケロウナ（カナダ）における ワイン・ハスカップ観光プロジェクト

国際関係学部 羽後静子教授・応用生物学部 横岸晴夫教授  
CAAC 羽後ゼミ 松本隆夫

### ケロウナ概要



- ・カナダ 西南部
- ・人口13万人（2017年）増加中
- ・カナダのリゾート地  
穏やかな気候で都市開発が進み、カナダ人が老後に住みたい町 NO.1
- ・1981年に春日井市と姉妹都市

### ハスカップについて

- ✓ スイカズラ科スイカズラ属の落葉低木
- ✓ 学名： *Lonicera caerulea* var. *emphyllcalyx*
- ✓ 和名： クロミノウグイスカグラ（黒実鶯神楽）
- ✓ ハスカップの名称はハスカップの実をさすアイヌ語ハシカブに由来
- ✓ 「不老長寿の実」や「幻の果実」

ワイキベディアから引用



北海道では4～5月開花

国際関係資料

### ハスカップ性質

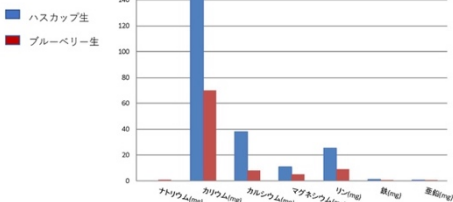
- 生のままの保存が極めて難しい（生のまま放置すると、徐々に果肉や皮が柔らかくなり、溶け出して液化してしまう）。

- この実には **ビタミンC**、**アントシアニン**<sup>(\*)1</sup>、**カルシウム**、**ナイアシン**（**ビタミンB3**）<sup>(\*)2</sup>などが豊富に含まれている。

<sup>(\*)1</sup> エネルギーが強い光は、細胞に達すると活性酸素を生み、細胞の細胞にダメージを与える。パソコンやスマートフォンが発するブルーライトも同じように、目の疲れ、かすみなどはその例。アントシアニンは眼精疲労を回復し、視力を改善する働きがある。

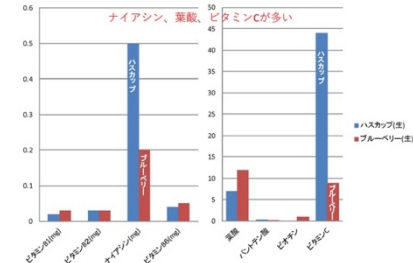
<sup>(\*)2</sup> ナイアシンは糖質・脂質・タンパク質の代謝に不可欠で、エネルギー代謝中の酸化還元酵素の補酵素として重要。循環系、消化系、神経系の働きを促進するなどの働きがある。

### ハスカップ ブルーベリー ミネラル比較



国際関係資料

### ビタミンB群 その他 ビタミン



国際関係資料

経営者  
レジさん  
羽後先生



### ハスカップジャム試供品



低糖度ジャム (JIS  
20)  
pH 3.26  
糖度 48.2%



中部大学  
ロゴマーク

ケロウナ市章

国際関係資料

## 春日井市姉妹都市ケロウナ（カナダ）におけるワイン・ハスカップ観光：自由懇談（部分）

- 林越（春日井商工会議所） このケロウナハスカップの試作品のジャムおいしいですね。
- 川村 私が住んでいた苫小牧だとロールケーキにこれがいっぱいついていますよね。
- 羽後 それは北海道のハスカップですね、こっちは直接ケロウナから輸入したカナダ産のハイブリッドのハスカップです。根岸先生がジャムを試作してくださいました。
- 川村 苫小牧では、ロールケーキにハスカップがたっぷりついている、すごく有名な「よいとまけ」という食べづらいお菓子があるので、そういう新しいお菓子がこのハスカップで開発されるといいですね。本当にさっぱりしていますね。
- 羽後 ケロウナ産ハスカップの売りは、とにかくブルーベリーよりもカルシウムもビタミンも多いという、あの表（前ページのスライドのグラフ参照）がすごいよ。アントシアニンが3倍、ポリフェノールが3倍。カルシウムもカリウムもね。不老長寿の実と言われている。
- 川村 風邪も治りますね。
- 羽後 そうそう。免疫力を高めて。今一緒に研究してくれる企業を探しているんです。
- 川村 まさにあのグラフじゃないですか。
- 羽後 それこそシニア大学でいろいろ血液をとったりして、これだからみたいな。
- 林越 結局サボテンは、食べる理由がないから、「癒しと健康」って、あの標語を決めただけなので。
- 羽後 だから、春日井のサボテンとペアで売り出せないかなと。
- 林越 ストーリーができれば。要は、商品売り出すには、物語がとても大事です。
- 川村 例えば、ヨモギのスポンジとかできていそうなので、サボテンの繊維を練り込んだスポンジケーキにこのジャムを塗るとか。
- 羽後 ダブル健康で（笑）。
- 林越 それもできると思う。
- 川村 オリジナリティがすごくありますよね。
- 羽後 このプロジェクトの研究費が出る間は、ケロウナハスカップを輸入することはできるんですけど、その次の一步を見据えておかないと、それで終わっちゃうともったいない。
- 林越 ケロウナと姉妹都市だということで物語ができるといいですね。観光って、私ら会議所の立場で考えると、どうしても産業なので、金が動かないと続かないと思っているんですよ。それをどうつくっていくか。
- 川村 もう一つ、苫小牧も実はハスカップが結構有名なので、王子製紙の関係で苫小牧でもいろいろできるのかなと。そういう三つの構成で。
- 羽後 商工会議所副会頭のもそれを言っていて、苫小牧の王子製紙と、北海道でハスカップができることで何かできないかと言うんだけど。
- 川村 僕はもともと北海道にいたというのもあるんですけど、ハスカップって、やっぱり北海道のものという認識が頭の中にあるので、まさかここでまた出会えるとはという感じです。
- 羽後 日本に帰ってきたの。ぜひぜひ楽しみにしていただいて。
- 終 もうちょっと酸味があってもいいかな。

羽後 そうです。今回根岸先生は、自然の味を生かすために、添加物をいれていません。普通はビタミンCとかを入れてますよね。

柊 ハスカップ自体が酸っぱいですよね。ジャムにすると、あれは消えるんですか。

羽後 ケロウナのは多分もっと酸っぱいと思います。だけど、少し酸味があったほうが、めり張りがあるかもしれないですね。

柊 北海道とコラボしちゃえばいいじゃないですか。さらに北海道のハスカップを何%混ぜるとちょうどいいとか。

羽後 面白いですね。そういうコラボもありかもしれない（笑）。さっきの柊先生のプロジェクト報告にあった地域の記録映像の中にハスカップの取組みや北海道のハスカップとの比較なども、アーカイブできるといいですね。

柊 残したいんですけどね。いかんせん、風味や味の感触は、アーカイブする方法が全くわからないので。

羽後 それなら、今ここでジャムをどんどん食べてください。

林越 春日井の観光資源で愛岐トンネルってあるじゃないですか。愛岐トンネルも実は経済効果という点では、あまり経済効果がでていない。年間2週間の特別公開しかないで、あそこの日常利用で、ケロウナから輸入したワインをトンネルに入れて熟成させて、ケロウナ&春日井ワインとして売るというアイデアはどうですか（笑）。温度が一定なので。

羽後 それはいいかもしれない（笑）。あそこはおしゃれですよ。私もまだトンネルを歩いたことはありませんが。毎年たくさんのファンが全国から来ていますよね。

林越 ケロウナワインをトンネルで熟成させて、ケロウナ&春日井コラボワインにして、何かそういう形で話題性を地域おこしに活用できないか、トンネル公開以外のときのトンネルの活かし方にケロウナのワインやハスカップが活かせるといいのでは？

羽後 あそこでカフェとか、何かそういうことはできるのですか？

林越 今、夏場には、森のビアホールといって、一応焼き鳥と生ビールで公開してやっているんですけど。

羽後 それは真ん中のほうですか、入り口のほうですか。

林越 入り口で。

羽後 じゃあ、そのときにイベントできるといいかも。トンネルの紅葉とかも、カナダの紅葉のイメージと重なりますね。

川村 メープルシロップはだめなんですか。

羽後 メープルシロップは、ケロウナではなくカナダ東部、寒い地域で作られます。

川村 ケベックのほうですよ。

羽後 もちろんカナダ全体で売っているから、カナダ名物ではありますが、ケロウナはちょっと温暖なんですよ。メープルシロップは本当に寒いところというのが売りなので。お土産は、やっぱりメープルシロップを買って帰りますけど。なぜなら、ハスカップは冷凍なので、日本に持ってこれないので。

林越 中部大学さんの研究費が続いている間に、ちゃんと売れるものにしないと。

- 羽後 そうなんです。1年目はとりあえずここまでやりましたが、2年目には、皆さんと相談して、次の話し合いができるような相手を集めて。みんな自分のところだけに負担がかかるので、ある程度は中部大学のほうで研究開発はできますが、やる以上は、やっぱり市場化できればいいですね。サボテンとのコラボとか。
- 林越 最初はこっちから頼んだところかもしれないけど、ちょっと商品開発してもらって。あとは、ケロウナが姉妹都市だからだと、何かちょっと物語をつくってパネル展示でもしてという場があると、一番PRにはなる。
- 羽後 2年前は春日井まつりの時に清水屋と商工会議所の一階ホールで、ケロウナ写真展をしようということで、入ってすぐの左のコーナーをもらったんです。写真展をして、メープルクッキーを配って、ケロウナを知ってもらおうということをやりました。  
できれば、ハスカップ試食会をやりたいと思います。将来は商品化したいですが、単価が高いのが課題です。
- 林越 商品単価は別で、それに付加価値があれば買うので。
- 羽後 材料としてはサボテンよりもおいしいですよ。
- 林越 これはおいしいですよ。ハスカップジャム、いいんじゃないですか。
- 羽後 ハスカップかサボテンか競争しても仕方がないので、うまく両方とも春日井の特産になるといいですね。苦味と甘みじゃないけど、この二つで春日井市市民に知ってもらいたい。アントシアニンがブルーベリーの三倍とか、カルシウム、カリウムが豊富とか、やっぱり「不老長寿の実」と言われてますから、健康に良い、というのがキーワードですね。
- 林越 サボテンも、葉っぱだけじゃなくて、済州島とかでやっているんですけど、放っておくと赤い実がなるんです。あれは甘酸っぱくておいしい。
- 羽後 そうですね。赤い実の栄養価が証明されているらしいですね。
- 林越 そうなれば緑のサボテンの葉と赤い実と両立でいけるからということで、実がなるまで放っておこうという話になったこともあったのですが、どうしてもみんな、待ちきれなくて赤い実を切っちゃうんです。
- 羽後 サボテンとケローナハスカップ、引き続き、ぜひよろしくお願いします。



## 懇親会報告

当初予定していた、シンポジウム後の懇親会&ケロウナハスカップ試食会は延期となりましたが、マレーシアと内モンゴルからのゲストを囲んでのささやかな懇親会と副田雅紀先生の叙勲のお祝いが、ホテルプラザ勝川のレストラン、ソレイユで行われました。

来賓として松尾隆徳前春日井商工会議所会頭や岡部清次郎副会頭らの参加を得て、またホテルの松波政文パティシエシェフの計らいで、海外ゲストたちのために、試食会で提供される予定だった、ケロウナハスカップのシャーベット、ムースのケーキ、マシュマロのデザートがサプライズで参加者全員に振舞われ、盛り上がりました。



松波政文パティシエシェフによるケロウナハスカップのデザート各種



懇親会の参加者

## 閉会の挨拶



### 羽後静子 HANOCHI Seiko

中部大学国際関係学部国際学科教授・中部大学国際人間学研究所副所長  
カナダ・ヨーク大学大学政治学 Ph.D.コース終了 ISA(国際関係論学会)・平和学会・人間の安全保障学会・コミュニティ政策学会。中部 ESD 拠点協議会基盤部門副代表。専門分野は国際政治学、研究テーマは ESD/SDGs、人間の安全保障（難民・移住者・ジェンダー・LGBT）。

皆様、今日は非常に微妙な時期にお越しいただき、本当に感謝しています。内容も大変盛り上がりました。まずは、マレーシアのご報告と内モンゴルのご報告に対して、心より感謝申し上げます。

副田先生の報告に関しては、私も二度ほどペナンへ伺いましたが、非常に観光客が多い中、私たちは外国人が描いた絵画の写真を一生懸命撮っていたわけですね。植民地主義の歴史も含めて、外から持ってきたいわゆる西欧の文化から自分たちの伝統や文化をどう守り、内からの発信にしていくかという問題提起、外発的ではなく内発的な発展をめざすことは、われわれアジアの諸国民に非常に共通するものがあると思いました。

ディアナさんの報告では、自分たちはグリーンツーリズムに取り組みたいのに前例がない、一体どこをモデルにしたらいいのか、その教育のテキストはどうしたらいいのかと、非常に苦悩され、模索しておられました。これもまた私たちに共通するところでして、何が持続可能な観光でありグリーンツーリズムであるのかということを常に考えながらやっておりますので、やはり共通点があるなと思いました。

フムチル先生の内モンゴルの報告は、まさに私たちの近代の超克の問題と重なる考え方でした。内モンゴル東部の一部は、日本の傀儡政権のいわゆる満州国でしたから日本人の加害的責任も歴史的にはあるわけですが、同じアジアとして、これから未来に向けては、互いに共通する持続可能な観光の研究や戦略が立てられるべきではないかと思いました。

例えば、ペナンの世界遺産というお話がありましたが、私が最近読んでいる『ベルク「風土学」とは何か』という本では、日本の持つ自然とのつき合い方、風土という考え方をベルクが西欧に持って帰り、またそれを西欧から世界に発信しています。西欧人は環境を対象として客観的に見て、自分と他者との関係でつき合っているけれども、日本人はそうではないということを彼は発信し続けています。

その1つの事例が、この本の共著者であり静岡県知事で経済史が専門の川勝平太先生が書いている富士山の世界遺産登録に向けた最終審査委員会にオブザーバー参加した時のエピソードです。富士山が最終審査で議論しているとき日本政府（文化庁）は、国連ユネスコの審査委員長から、日本政府の申請にある「富士山」だけでは世界遺産にならない、「富士山」ぐらいの高さの山は世界中にある、なぜ「富士山」なのかをちゃんと伝えないとイケないと言われ、世界遺産に選ばれる理由として「富士山」が日本人にとって、宗教の源流であったり、魂の源であったり、精神の統合であるということを伝えなければならないということで正式の名称を「富士山—信仰の対象と芸術の源泉」とするように提案されたという。そのおかげで、世界各地の審査委員から賛成

の意見が相次ぎ、この長い名前の正式名で世界遺産になったそうです。これからの世界の環境問題や自然との付き合い方においては、やはり日本人の持つ自然との共生、あるいは「風土」という考え方が大事なのだと書いておられます。私は、「富士山」をどう認識し、どう表現するかが私たちのやろうとしている「持続可能な観光」の中身なのではないかと思いました。本日、宗宮先生も柳谷先生も、そしてマレーシアと内モンゴルのご報告でも、西欧でないアジア地域の私たちが、本来持っている自然との付き合い方ということをお示しになりました。

それをこれから世界にアピールしていくという意味で、このプロジェクトは非常に重要なメッセージを発信する可能性を持っていると思います。これでようやく1年目が終わり、今日いろいろと試行錯誤をしながら進めていらっしゃる皆さん方のすばらしい取り組みについて伺いましたが、これらの七つのプロジェクトも、まさに底辺、源流においてつながっているわけです。

宗宮先生、柳谷先生が最初に中部地域の ESD 拠点を伊勢・三河湾流域圏と呼んでいるということをおっしゃっていただきましたが、春日井市は庄内川の中流域にあります。昨日土岐市と中部大学との連携協定が結ばれたと箕島課長からご報告がありましたが、恵那から瑞浪、土岐、多治見、春日井、名古屋と5都市を流れて伊勢三河湾に注ぐ庄内川を一つのモデルとして考えることができます。愛知・三重・岐阜を含む中部地域は、12の一級河川のもとで発展してきました。もちろん世界中見渡しても、川の周辺に人間が住み始めた文明の歴史もありますが、中部地域は、12の川が点を線にし、一つの面として発展してきたと言えます。上流は自然豊かであり、豊田は産業化・工業化が進んでおりまして、世界でも非常に特殊な地域です。

そういったことからこの地域は、早い時期に世界に174ある ESD の拠点の一つに認定され、中部大学が幹事校として事務局も担っております。この中部 ESD 拠点では、世界的にはまだ広がっていないバイオリージョン、生命流域圏という考え方をユネスコを通じて国連に提唱しています。今日は川村先生もおられますが、こういう生命流域圏という「風土」的な考え方は、実は世界にあまりないのですね。そういった点からも私たちの持つポテンシャルの大きさを再確認しつつ、皆さん、さらに2年目、一緒に楽しくこのプロジェクトを進めていきましょう。

以上を最後のご挨拶にかえたいと思います。今日は、長時間おつき合いいただき、本当にありがとうございました。新年度もまたよろしくお願いいたします。（拍手）

中部大学国際人間学研究所シンポジウム

## 持続可能な観光2019<sup>年度</sup>

2020年3月31日 発行

編集責任

柳谷啓子

発 行

中部大学国際人間学研究所

〒487-8501 愛知県春日井市松本町1200番地

電話 (0568) 51-1111

印 刷 所

中部大学サービス ドキュメントセンター





中部大学国際人間学研究所

〒487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 番地 中部大学 TEL. 0568-51-1111